

全道中

No.95

2026.3



北海道中学校長会

No. 95

全道中

2026—3



運 営 方 針

- 1 本会の目的である「中学校長の職能の向上と、北海道の中学校教育の振興」を図り、校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、会の総力を結集して活動の充実と諸問題の解決に努める。
- 2 道教委をはじめ、全日中、四種校長会及び教頭会等の教育関係諸機関や、PTAをはじめとした諸団体との連携を深め、国及び道・市町村教委の動向を踏まえて適切な対応に努める。
- 3 校長としての学校経営力の向上を図り、道民の負託に応える中学校教育の創造に努める。

北海道
中学校長会

第98回 北海道中学校長会 総会・研修会 (4/25)



第76回 全日本中学校長会 総会・研修会 (5/15~5/16)



第98回 道教委と校長会、教頭会との意見交換会・各課懇談会 (8/6)



北海道中学校長会研究大会 胆振・室蘭大会 (9/26~9/27)



第76回 全日本中学校長会研究協議会 香川大会 (10/22~10/24)



巻頭言

◎職能集団としての今年の道中を振り返る……………北海道中学校長会会長 山田 誠 一…8

潮流

◎中学校教育の一層の充実を願って……………北海道教育委員会教育長 中島 俊 明…10
◎北海道の子どもたちの学びのサポートのために……………北海道立教育研究所所長 谷 垣 朗…12

論考

◎心豊かで主体的に生きる力を育む学校経営
「こどもまんなか望洋台」～子供が主語となる学校経営……………小樽市・望洋台中 浦 壽 昌 明…14
子供の資質・能力の向上に資する持続可能な学校経営……………芦別市・芦別中 丹 那 暢 仁…15
目標の共有と醸成される職場風土が拓く学校経営……………帯広市・帯広第五中 山 田 知 史…16
子供の声を基点とした学校経営の展開……………札幌市・手稲中 原 田 格…17
◎心豊かで主体的に生きる力を育む生徒指導
「子供が主語」の学校づくり……………せたな町・北檜山中 村 田 真 一…18
認め合い、高め合い、支え合える生徒の育成……………日高町・富川中 杉 山 一 彦…19
自分を大切にできる生徒指導をめざして……………清水町・清水中 嘉 藤 貴 充…20
自己肯定感を育み、自他を大切にする生徒の育成……………釧路市・大楽毛中 安 部 新 路…21
◎心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習
心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習……………余市町・旭 中 久 米 達 夫…22
「神中タイム」を要とした人間関係形成能力等の育成……………旭川市・神楽中 辻 並 浩 樹…23
ふるさとを愛し未来を担う力を育成する体験学習……………利尻町・利尻中 三 原 美 和 子…24
「八雲町、もっと知ろう！」探究と課題解決に向けて……………八雲町・八雲中 増 田 正 弘…25
国際交流の中で、主体的に異文化理解を深める体験活動……………西興部村・西興部中 堀 内 篤 宏…26

特集

テーマ

◎学校教育の今日的な課題から ～更なる学校力の向上を目指して～

「話し合い」から「学び合い」への変革

～「分らない」「できない」と言い合える風土を創り上げる～旭川市・愛宕中濱中昌志…28

エージェンシーを育む学校づくり

～自ら考え、主体的に行動し、責任をもって社会変革を実現していく力の育成～留萌市・港南中田谷典久…31

体を通して未来を育む

～教育の総合力で子供を支える学校づくり～浜中町・茶内中宇野正幸…34

今年の道中

◎第六回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会を終えて…研修部長 桑原俊二…37

◎第七回全日本中学校長会研究協議会香川大会提言概要

自治的な活動を柱とした人間尊重の教育

～多様な他者との協働を通して磨く相互承認の感度～札幌市・美香保中伊達峰史…39

一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育の構築に向けて

～特別活動を要として進めるキャリア教育～倶知安町・倶知安中佐々木淳…43

一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

～社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育～小樽市・西陵中駒場秀剛…47

◎各部門の活動

令和七年度の活動及び当面する課題への対応について…事務局長 高橋正幸…51

各部の活動（経営部・研修部・対策部・情報部）…54

各地区の活動…58

北海道風土記

子供が主役のまち江別…江別市・江別第二中高橋浩子…79

愛が別格・きのこの里 愛別町…愛別町・愛別中村澤泰志…80

雄大な天塩川と豊かな自然に包まれた街 天塩町…天塩町・天塩中小林剛…81

歴史とロマンの街・函館…函館市・銭亀沢中村井雄一…82

魅力あふれる歴史と風土 自然と温泉の郷 登別…登別市・登別中横山康彦…83

十勝開拓とともに発展した八千代地区…帯広市・八千代中坂田明彦…84

タンチョウとともに生きる釧路市阿寒町…釧路市・阿寒中森下智之…85

サローマの休日…佐呂間町・佐呂間中太田依里…86

文 芸

戦後八〇年によせて	千歳市・東千歳中	山下	慎一	87
現代に必要な 転ばぬ先の杖	留寿都村・留寿都中	林	稔	87
心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営	小樽市・松ヶ枝中	柳原	功美	88
生成AIをうまく使う	富良野市・麓郷小中	島村	圭吾	88
AI時代に挑む学校と先生	旭川市・啓北中	東藤	義文	89
北の海と子供たち	稚内市・宗谷中	込山	茂	89
あの頃は	初山別村・初山別中	滝本	秀明	90
学校のチャイムを聞きながら	せたな町・大成中	山本	雅樹	90
学校体育と私	知内町・知内中	森	雅	91
言葉の力	函館市・赤川中	木谷	隆史	91
全ての学校が「成瀬」のようにいられる学校に	砂川市・砂川中	堤	雅宏	92
いのちの授業と第二の誕生日	苫小牧市・ウトナイ中	山岸	弘昇	92
地域の皆様に支えられてく閉校・統合を迎えるにあたって	浦河町・浦河第二中	森	真治	93
ボッカルーポく狼の口に飛び込め!	音更町・緑南中	川	昌浩	93
武道の精神 学校経営に	帯広市・帯広第四中	小	徹哉	94
「学校」って何だろう?	弟子屈町・弟子屈中	小	一博	94
アインシュタインからの学び	釧路市・春採中	河	和	95
今日は昨日の明日	別海町・別海中央中	小	伸	95
出会いと体験	滝上町・滝上中	中	善	96
ブドウ作りの楽しさ	札幌市・北栄中	北	伸	96

資 料

◎令和七年度 一般会計予算	室蘭市・港北中	高田	裕之	97
◎令和七年度北海道中学校長会役員・理事	室蘭市・港北中	高田	裕之	98
表紙に寄せて「地球岬から望む噴火湾」	室蘭市・港北中	高田	裕之	99
編集後記	室蘭市・港北中	高田	裕之	99
北海道中学校長会の歌	元北海道中学校長会会長	本間	均	



職能集団としての今年の道中を振り返る

北海道中学校長会 会長 山田 誠一

中教審教育課程企画特別部会が令和七年九月に発表した論点整理には、次期学習指導要領に向けた今後の検討の基盤となる基本的な考え方や「多様な子供たちの深い学びを確かなものにするため、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む」という第四期教育振興基本計画からの流れを汲む目標が示されています。私たち校長は、VUCAの時代を生きる子供たちのウェルビーイングの向上のために、国の動向や社会情勢を適切に読み取り、自らの資質能力の向上を図り、安定した学校経営に努める必要があります。その使命に応えるべく、北海道中学校長会（道中）は中学校長の職能向上を図り、北海道における中学校教育の振興を目指して活動を推進してまいりました。今年度の道中の活動を総括するにあたり、職能集団としての活動の中心である「専門性の向上」「社会的提言」「社会貢献」の三本の柱を用いて振り返りたいと思います。

一 専門性の向上

最大の機会は第六六回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会でした。三二五人の参加者が五つの分科会にて提言を基にした研究協議を熱心に行い、さらに、全日中会長による教育情勢報告、全日中研究協議会香川大会における提案発表、記念講演という充実した内容が校長の資質能力の向上に大きく寄与したものと考えます。胆振管内校長会の皆様の細部にまで至る丁寧な大会運営に改めて感謝の意を表します。

次に、七月から十一月にかけて各地区校長会の主催で開催いただいた地区別教育経営研究会について述べます。全道一九地区において、教育情勢の説明や各地区から寄せられた質問への回答を通じた研修の場を確保できたこと、また、地区校長会と道小、道中の連携・協働の機会となりましたことは、大きな成果と考えます。

最後に道中が作成する刊行物です。「学校経営の資料」は平成十八年度以来、毎年内容を更新し、学校経営に関する今日的な課題を鮮明にした資料として御活用いただいております。「法制研究集録」は昭和四十三年以来、こちらも毎年内容を更新し、主として条例・規則等諸法令に関わる課題に対処する資料として、今年度は第五六集を発刊いたしました。「教育課程に関する調査」報告は時代の情勢に即した調査を全道規模で実施し、まとめたものです。今年度は「教育課程」「特別支援教育」「小中連携（一貫）教育」「コミュニティ・スクール」「部活動の地域移行」に関する現状についての調査結果を報告いたしました。「道中だより」、「全道中」は各地区の活動や会員の研究成果、論説、さらには教育関係機関・団体との情報の交流による相互の連携・協働を図る機関誌として発刊しております。

二 社会的提言

道中は道小、道公教との連名により令和七年五月二十六日、道教委、中島教育長へ「北海道文教施策・予算策定に関する要望書」を手交いたしました。要望書の作成にあたっては、前年度の九月から各地区校長会、教頭会、へき複連、中体連、特支学級設置校長会から意見や要望をいただき、道小、道中の五役を中心に内容の検討を重ねました。内容としては三五人学級の前倒し実施の他、今年度の新規項目として、育児休業取得等に係る代替教員の確実な配置、中体連における外部指導者への引率旅費支援、教頭業務マネジメント支援員の配置促進等を要望しました。道教委からは七月に丁寧な内容の回答をいただき、要望に対する現在の状況や実現の見通しについての正確な情報を「道小情報、道中だより号外」によりお知らせしました。

次に八月六日に開催しました意見交換会・各課懇談会です。意見交換会は道教委主催の形にて「教育DX」を主題に道教委、道小、道中、道公教から約六〇人が参加しました。一人一台端末の活用や校務DXについて学校現場の現状や課題を共有し、今後の方向性について意見を交わしました。各課懇談会には三つの分科会に計八六人が参加し、一二の提言を基に「教育環境」「危機管理と生徒指導」「教職員の資質能力の向上」について協議を行いました。

道教委から道中に対し、施策に関する意見を求められる機会があります。同様に文部科学省からは全日中を通して意見を求められることもあります。その際には要望書の作成や地区別教育経営研究会を通して把握した各地区の実態や願いを加味した意見を副会長や五役とともに作成し、提出しています。今年度はデジタル教科書、全国学力・学習状況調査、今後の研修の在り方、子ども性暴力防止法等について意見を述べる機会がありました。また、北海道教育推進会議、学校における働き方改革促進会議、部活動・地域クラブ活動関係者会議といった道教委が主催する会議においても、道中として丁寧に検討した意見を述べてきました。

最後に各種研修会における挨拶や報道を通しての道中会長としての意見の表明です。四月九日の理事研修会においては今年度の道中のスローガン制定理由として「子供を主語にした教育の実現」について述べました。また、六月二十五日の道通インタビューでは、教育現場における教員不足への対応として「教育現場の現代化」について論じ、七月十七日の道通記事にはコロナ禍後の教育の方向性として「学びの場のアップデートの継続」について論じました。道中研胆振・室蘭大会の開会式挨拶においては「子供を大切に育てる校風の確立」について述べる等、一貫して「子どもまんなか」の理念を伝えることに力を尽くしました。

三 社会貢献

前項で紹介した道教委が主催する会議へ、三二一の役職で道中役員、事務局員を派遣しています。その他の団体には教育研究関係、保健関係、給食関係、福利厚生関係、社会教育関係等、五九の役職が道中に割り当てられており、それぞれにおいて協力体制を整えた上で、校長として、さらには、道中事務局員としての矜持を胸に貢献に努めています。その中には作文コンクールや少年の主張の審査員といった文章の精読、審査、講評に時間をかけて丁寧に行う業務もあり、子供たちの健全育成の一助として力を尽くしています。

結びになりますが、今年度お世話になりました関係諸機関・団体の皆様、そして道中会員の皆様の御支援に感謝申し上げます。とともに、次年度以降も引き続きの御厚誼を賜りますようお願い申し上げます。巻頭の挨拶といたします。

潮流



中学校教育の一層の充実を願って

北海道教育委員会 教育長 中島 俊明

北海道中学校長会におかれましては、本道の中学校教育の改善・充実
はもとより、本道の教育行政の推進に特段の御理解と御協力をいただい
ておりますことに心から感謝申し上げます。各地域における中学校教育
の一層の充実に向け、大きく三点について、述べさせていただきます。

一 子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進

(一) 教育課程の適切な編成・実施

学校教育においては、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識
するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な
人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓
き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求め
られています。各学校においては、多様な生徒の存在や、自己実現の在
り方も多様である点も十分に踏まえ、一人一人のよさを徹底して伸ばす
教育の実現に向け、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な
充実を図るようお願いいたします。

(二) 学力向上

令和七年度全国学力・学習状況調査では、国語と理科は全国とほぼ同
水準となった一方、数学は全国平均を下回ったほか、自律的に学ぶこと
などに課題が見られました。各学校においては、ICTを効果的に活用
し、課題の解決に向け、主体的に考え、表現する学習活動を一層重視す
るとともに、北海道版結果報告書に示している多面的な教育データや特
色ある実践事例を参考に、学校全体で学力向上の取組を進めていただく

ようお願いいたします。

(三) 体力向上

令和七年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査では、ICTを活用
した保健体育の授業改善や、運動機会の少ない生徒の減少などの成果が
見られた一方、朝食摂取率が低い、学習以外のスクリーンタイムが長い
などの課題が見られました。各学校においては、引き続き、保健体育授
業の一層の充実はもとより、望ましい運動習慣や生活習慣の確立に向け
た取組を推進していただくようお願いいたします。

(四) 特別支援教育

どの学校、どの学級にも特別な教育的支援を必要としている生徒が
在籍している可能性があり、一人一人の教育的ニーズに応じた支援の
充実を図ることが求められています。各学校においては、保護者や関
係機関との連携、高等学校等への丁寧な引継ぎなど、切れ目のない一
貫した指導や支援の充実に向けて、通常の学級に在籍する支援を要す
る生徒に対し、「個別的教育支援計画」を作成・活用いただくようお
願いいたします。

二 学びの機会を保障し質を高める環境の確立

(一) 教育DXの推進

教育DXの推進にあたっては、多様な子どもたちを誰一人取り残すこ
となく、全ての子どもたちの可能性を最大限に引き出す教育を進めるこ
とが求められています。各学校においては、生徒が端末等を主体的に活

用して学ぶことはもとより、教育データを活用した、きめ細かな指導・支援の充実や、校務のデジタル化による業務負担の軽減を通じた生徒と向き合う時間の確保など、デジタル学習基盤の活用を前提とした取組を学校全体で一層推進していただくようお願いいたします。

(二) 生徒指導の充実

令和六年度の国の調査では、暴力行為の発生件数が前年度を上回り、また、不登校生徒数は減少したものの高い水準で推移しており、学校が生徒にとって、安心して学ぶことができる場となるよう、魅力ある学校づくりや多様な生徒に応じた支援体制の確立が求められています。各学校においては、学校風土の見える化による学校改善、教科の指導と生徒指導の一体化、スクールカウンセラー等との連携など、チーム学校による支援の取組を一層充実していただくようお願いいたします。

(三) 教員の資質向上

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、主体的・個別最適・協働的な学びを促進する「新たな研修制度」のもと、教職員一人一人の資質向上を図ることが求められています。各学校においては、全国教員研修プラットフォーム(plant)を活用した受講奨励や、校長のリーダーシップによる研修環境の整備など、組織的・計画的に取組を進めていただくようお願いいたします。

(四) 学校における働き方改革の推進

昨年六月に改正された給特法では、教育職員の業務量管理と健康確保には管理職の役割が重要であり、勤務状況の把握や意見聴取を踏まえ、優先すべき教育活動を見極めて適正な業務量と校務分掌を設定することが求められています。各学校においては、引き続き、業務を精査し、教員が教員でなくてはできないことに集中できる環境整備を進めていただくようお願いいたします。

(五) 服務規律の保持

先般、道内の教員が盗撮グループの一員との疑いで逮捕されるなど、学校教育に対する信頼を著しく損なう事案が複数発生していることは極めて憂慮すべき事態です。各学校においては、職員を指導する立場にある校長が、自らを厳しく律するとともに、教職員の服務規律の徹底に向け、これまで以上に危機感をもって取り組んでいただくようお願いいたします。

三 地域と歩む持続可能な教育の実現

(一) 地学協働の推進

地学協働は、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に推進し、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」の実現を目指すものです。各学校においては、学校運営協議会で地域と目標やビジョンを共有し、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む取組を進めていただくようお願いいたします。

(二) 部活動の地域展開

部活動の地域展開を推進するためには、将来にわたって子どもたちが継続的にスポーツ・文化芸術活動に親しむ機会を確保し、等しく多様な学びと体験に触れられ、心の居場所ともなる環境を整備することが重要です。各学校においては、地域全体で生徒の望ましい成長を保障していくため、市町村教育委員会や市町村関係部署、地域クラブの運営団体等と密接な連携を図っていただくようお願いいたします。

(三) 学校安全の充実

学校は生徒が安心して学習することのできる環境が求められる場所であり、安全な環境を整備し、関係機関等と連携を図りながら、事件・事故を防止する取組を進めることが重要です。各学校においては、不審者侵入や自然災害、ヒグマ対応等の安全上の課題を踏まえ、危機管理マニュアルを見直し、全教職員で共通理解を図るとともに、生徒自身が危険を予測し、回避する能力を身に付ける実践的な安全教育を推進していただくようお願いいたします。

むすびに、これからの時代に求められる質の高い学校教育の実現に向け、校長の皆様には、経営ビジョン等を踏まえたカリキュラム・マネジメントを推進する能力や、働き方改革を推進する組織マネジメント能力、地域住民や保護者等とビジョンを共有し、地域との連携・協働を推進する能力など、多岐にわたる資質能力を発揮されることを御期待申し上げます。道教委の各種施策の推進に御理解と御協力をいただくようお願いいたします。



北海道の子どもたちの学びのサポートのために

北海道立教育研究所 所長 谷垣 朗

北海道中学校長会におかれましては、長年にわたり、本道における中学校教育の充実・発展に努められ、とりわけ、道立教育研究所の業務にかかわっては、教職員の資質向上や人材育成にお力添えをいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

また、各校長の皆様には、当研究所が実施する研修講座の受講やプロジェクト研究等の各種事業に御協力いただいておりますことにお礼を申し上げます。

さて、令和四年十二月に中教審答申「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について、「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成（以下、「令和四年答申」）が公表され、翌年度から「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた「新たな研修制度」がスタートしました。当研究所でもこうした国の動きを踏まえ、教員研修の質の向上に資するよう取組を進めているところで、以下、紹介いたします。

一 令和七年度の研修スタイル

令和四年答申の中で、「教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった『現場の経験』も含む学びのスタイルの多様性を重視するということも重要である。この観点からも、教師の個別最適な学びの実現のみならず、協働的な学びを実現していくことが必要である。」と示されたことなどを踏まえ、当研究所では、令和五年度のプロジェクト研究において研修スタイルについての検討を進め、令和六年度から、「探究省察型」と「課題解決型」の二つの研修スタイルを試行実施し、今年度についてもそれらのスタイルを基に、「『新たな教師

の学びの姿』を実現する研修の推進」として研修講座を実施しました。

まず、「探究省察型」の研修は、受講者の教育観や考え方について、遠隔型研修で自己点検したり、集合型研修で自己分析や省察したりすることを通して再構築していくもので、今年度は、管理職を対象とした二つの研修でこのスタイルを導入し、合わせて六十七名の方に受講いただきました。

この研修の大きな特徴である集合型研修では、省察、演習・協議を通して、管理職に求められるアセスメントや学校の教育力を最大化するファシリテーションの在り方などについて理解を深めていました。また、この研修は、およそ半年かけて行うことから、自分自身の認識の変わりや深まりに気付き、新たに意欲を高めるといった意味でも効果的であったと考えています。

次に、「課題解決型」の研修は、オンデマンド型研修で新たな知見を得たり、職場での実践を遠隔型研修で交流したりすることを通して解決の手立てを自ら見いだしていくもので、前述の二つの研修以外の管理職研修や生徒指導にかかわる研修などで実施しました。

当研究所では、これまでも広域分散型の本道の特質を踏まえ、オンラインによる遠隔型研修を実施し、画面越しでも協働的に学ぶことができ、研修の構成やクラウド上で演習可能なデジタルワークシートの活用など、オンラインのよさを活用した研修を試行錯誤してきました。

「課題解決型」の研修では、そのノウハウも生かし、研修テーマにかかわる知識を得ることを目的とする場合は参加者が時間や場所を選べるオンデマンドで実施、遠隔型研修では、できるだけ参加者同士の協働的

な学びを重視することとし、職場実践では、どのように取り組むのか参加者がイメージしやすいよう、事前や事後のフォローをきめ細かく行うよう心がけるなどの工夫を行いました。

また、「課題解決型」の管理職研修には、令和六年度から採用校長・教頭の皆様も選択により受講いただいております、こちらも研修を通して、テーマにかかわる学びはもとより、新たな立場としての悩みや課題の共有の場ともなっています。

こうした研修スタイルにより、理論と実践の往還による学びが実現しつつあります。次年度も、ニーズに合わせた研修テーマの設定、参加対象（キャリアステージ等）を一層意識して内容の充実に努めてまいりますので、皆様も是非受講ください。

なお、本年度実施した管理職研修の内、「学校DXの推進」、「危機管理体制の在り方」、「人材育成」に係る内容の研修映像については、全国教員研修プラットフォーム（Platform）上に公開しています。今後の学校経営の参考としていただけると幸いです。

二 地域での研修や校内研修をサポートする取組

令和四年答申には、「『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒のみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。」と示されていることを踏まえ、当研究所では、今年度も、教育研究所・教育（研修）センター及び教育関係機関・団体等のニーズに応じて、当研究所職員を派遣し、講義等を行うことにより、地域で実施する研修をサポートすることをねらいとした地域研修サポートを小、中、高あわせて約七十件以上実施しています。

主な依頼内容としては、学習指導要領の着実な実施、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育課程、学習指導に関わる内容やいじめ、不登校等の生徒指導に関する対応など、学校や地域の課題に応じて様々な依頼がありました。

また、今年度は、各学校の校内研修の一層の充実を目指し、当研究所職員が、依頼のあった学校を複数回訪問し、校内研修を伴走支援する

「校内研修サポート」、全道の希望する校内研修担当者が気軽に校内研修の悩みをオンラインで語り合う「校内研修カフェトーク」を実施しました。

参加者からは、「自分で考える時間、他者に伝える時間など、今回の研修のような場面を自分の授業の中でも取り入れていきたい」、「新しい教師の学びのカタチを取り入れた研修を自校の校内研修の充実につなげたい」などの感想をいただいております。

地域研修サポート等の実施に当たっては、教師の学びを支援する研究所職員が率先して自身の研修観と向き合い、研修運営に生かすことが、受講される皆様のよりよい実践につながると考えており、今後も取組の充実に努めてまいります。

終わりに

令和六年八月の中教審答申「『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について」には、「子供の学びを支える教師は公教育の要であり、教師の質や量は子供たちへの教育の質に直結するため、現在の教師を取り巻く環境を改善しなければ、我が国の教育の質の低下を招きかねないと考えられる。」と述べられており、そのためには、「全ての子供たちへのよりよい教育の実現」に向けて、学校における働き方改革をはじめ学校の指導・運営体制の充実を一体的・総合的に推進する必要性が強調されております。

また、令和七年九月の中央教育審議会教育課程特別部会の論点整理では、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方が示され、三つの方向性を支える土台として「学びをデザインする高度専門職としての教師」が示されているところです。

当研究所としましても、こうした国の動きを注視しながら、貴校長会との連携を一層深め、北海道の先生方が「学びに関する高度専門職」として力を高めることができるよう教員研修の充実や教育実践に役立つ情報提供に努めてまいります。

論考

心豊かで主体的に生きる力を育む学校経営

「子どもまんなか望洋台」

～子供が主語となる学校経営

小樽市・望洋台中 浦 奇 昌 明

一 はじめに

本校は、小樽市の比較的新しい新興住宅街に位置する、開校三五年の中学校である。平成二年、当時マンモス校だった桜町中学校から分離し、生徒数二〇〇人ほどでスタートしたが、現在では住宅街の高齢化に伴い生徒数一三〇人ほどになっている。小樽市では中規模から小規模程度の学校である。また、本校の建つこの地区は望洋台と呼ばれ、山の麓に位置することから石狩湾とそこに林立するいくつもの風力発電の風車を望むことができ、ちよつとした未来感を感じることができる。

生徒の家庭環境は、新興住宅街だけあって公務員や教員、比較的大きな民間企業に勤める保護者が多く、経済的に安定した家庭が多い。生徒指導案件が少なく、生徒は落ち着いた学校生活を送っている。

教職員は、常勤・非常勤を含めて一四人ほどで、二〇代一人、三〇代二人、四〇代一人、五〇代五人、六〇代五人の平均年齢五三・四歳で校長は、上から六番手につけている。

二 生徒の生活実態

このように、おじいちゃん、おばあちゃん先生が孫と仲良くやっっている「毎日波風の立たない平和な学校」というイメージをもたれるかもしれないが、もちろん学校は「子供が育つところ」＝子供たちの成長の過程で衝突や軋轢、人間関係形成の悩みは他の学校と同じようである。いや、それ以上に本校独自の課題を含んでいる。小樽という人口一〇万人の都市でありながら、この望洋台地区は市内の他の地域からは孤立している感がある。望洋台小学校からほぼそのまま望洋台中学校へ進学し、人間関係に大きな変化なく一五の春を迎える。これは、ひとつのマチ

に小学校一校、中学校一校という町村部の学校と同じ状況である。

三 「都会(まち)の中のユートピア(田舎)の子をたくましく

小学校から人間関係が閉じられていて、その中では快活に暮らすことはできても、中には固定化した人間関係に嫌気がさしている子もいるだろう。そこで、次のような施策を打った。

○ 同年齢、同質な集団意識の打破

コロナ禍以降、復活していなかった望洋台地区の高齢者施設、障がい者施設との交流を再開させ、ここ数年「子供の世界」だけで生活してきた生徒の学校生活を「学校の外」とつなぐ。

今年度は保健体育科の協力を得て、望洋台地区の障がい者施設の利用者の方々とポッチャという競技で交流をもつことができた。健常者である自分たちとは違った人たちとのふれあいを通して視野が「外向き」になってくれることを期待する。

○ 望洋台地区学校運営協議会(CS)と生徒の参画

今年度、望洋台地区CSでは「子どもまんなか望洋台」をスタンスに子供の意見を年間事業の企画に生かす試みを行った。修学旅行で東日本大震災の被災地を訪れて学習した三年生に対して、CSが行う地域合同の災害訓練のアイデアを募集した。生徒は自分たちのアイデアで地域に貢献することができたと実感してくれることを期待する。

○ 文化祭の改革

これまで本校の文化祭は、「学園祭」的な要素を未だに残している。内輪受け「のステージ・余興ばかりであったが、今年度総合的な学習の時間のねらい「地域」を柱に生徒に取り組ませた。望洋台地区を学び、自分たちのふるさとを考える取組に変革した。

四 まとめ

この施策は、まだ途についたばかり。来年度はこの基本方針の下、社会福祉協議会のボランティア助成事業に応募し、取組を全校生徒のものにしていくため、教科・総合的な学習の時間、道徳などの教育課程を整備していきたい。

子供の資質・能力の向上に資する

持続可能な学校経営

芦別市・芦別中 丹那 暢仁

一 はじめに

未来を切り拓く子供たちに求められる資質・能力は、知識の量のみならず、「心豊かで主体的に生きる力」である。この資質・能力を育むことこそが学校教育の本質であり、持続可能な学校経営の基盤となる。

私は経営方針として、「学校DXの推進」と「教員のやりがい向上」を二本柱に据え、空知校長会の理念の実現に取り組んでいる。

二 学校DXの推進

GIGAスクール構想により、端末や校内ネットワーク等のデジタル環境は整備されたが、ハードが揃っただけでは教育は変わらない。そこで本校では教員が授業に集中できる環境を整えるため、以下の取組を進めている。

1 評定・出欠等の教務データと学習ログの統合・可視化等、校務支援システムの統合運用

2 DXチェックリストによる業務改善目標の共有

これらの取組により、教員の事務負担が軽減され、授業準備等に時間を割ける「余白」が生まれている。しかし、個人端末を全ての教員が自在に使いこなせるわけではない。とくにベテラン教員は、長年の板書やプリント中心の授業スタイルに長けており、ICT機器の活用に戸惑いがちである。操作習得の時間が取れず、ネットワークトラブル等への不安から、一步を踏み出せない姿も見られる。私は、こうした困難さに共感しつつ、学校全体で次の支援体制を整えた。

(1) ICT支援員の配置によるトラブル対応の即時化
(2) 「操作↓教材作成↓実践」の3ステップOJTによる段階的支援

(3) 小さな成功体験の積み重ねを促す校内支援
これらを通じて、五〇代のベテラン教員が、若手とペアで授業改

善に取り組み、端末上でのチャット活用を通じて生徒が主体的に意見を発信・共有する様子に触れ、「教える楽しさは、今もここにある」と実感。授業スタイルの再構築に挑戦するきっかけとなった。

三 教員のやりがいを支える組織づくり

教員の世代ごとに、やりがいの源は多様である。①ベテラン教員は、長年培ってきた経験に基づき、「経験の伝承」や「関係性の深化」にやりがいを感じている。②中堅教員は、「責任感」「達成感」を原動力に、学年運営や行事の企画・運営など実務の中心を担い、ミドルリーダーとして重要な役割を果たしている。③若手教員は、「挑戦」や「成長の実感」に価値を見だし、柔軟な発想と行動力で学校を活性化している（期首面談等から筆者が整理）。それぞれが組織内での各自の役割を、理解し果たして強みとすることが学校経営の要となる。私は、期首面談を通じて、こうした個々の強みを直接伝え、励ますとともに、日常のマネジメントにもこれらの視点を反映し、持続可能な学校経営を実践している。一方で、全国的に採用五年以内の教員の離職が増加している。若手教員を支える校内外の仕組みづくりは急務である。本校でも二〇代の教員が三割を超え、若手が安心して挑戦できる環境づくりが喫緊の課題であった。このことを踏まえ、空知校長会でのこれまでの実践を次の三つに整理した。①若手を支える日常的なOJT②学年部によるメンター研修の実施③若手が挑戦できる場の保障

これらについて、本校ではベテラン教員とも全体で共通理解を図り、若手が孤立しない校内体制を整備している。例えば、新卒一年目の教員は、未経験のバレーボール部の指導と初めての通常学級での教科指導を担当し、大きな不安を抱えていた。しかし、ベテラン教員の伴走と実践的なOJTを通じて、生徒との信頼関係を築き、「分かった・できた」を積み重ねた。この経験が、挑戦意欲と教職へのやりがいを飛躍的に高める契機となった。

四 結びに

世代ごとのやりがいを尊重し、互いに学び合う風土を育むことが、未来の教育を支える基盤となる。私は、「子供は必ず成長する」という信念のもと、教員が子供とともに学び、響き合う「学びの共同体」の実現を目指している。これからも、「チーム学校」「チーム空知」の力で、心豊かで主体的に生きる力を育む学校文化の創造に努める。

目標の共有と醸成される

職場風土が拓く学校経営

帯広市・帯広第五中 山田 知史

一 はじめに

十勝管内は「十勝晴れ」と称される晴天の日が多く、夏は気温を押し上げ、冬は放射冷却による厳しい寒さに包まれる、雄大で特色ある地域である。今年は記録的な大雪や観測史上類を見ない酷暑を経験し、地球規模での気候変動の影響を肌で感じている。

帯広市の人口減少率は道内主要都市と比較して穏やかだが、教育の基盤となる児童生徒減少率は深刻な水準で進行している。これは、道内の多くの地区と同様である。本校は開校から六七年の歴史をもつ市内中心部の学校で、現在の生徒数は三三三人、各学年三学級と特別支援学級を置く中規模校として地域とともに歩んできた。生徒たちは皆明るく素直であり、学校行事にも真剣に取り組み、主体性の萌芽を見せている。

二 全職員で目指す生徒像の共有

学校経営を実効性のあるものとし、生徒の確かな成長へとつなげるため、経営方針を具体的且つ明確な行動目標として言語化し、全職員への浸透を図っている。毎月提示されるこの方針は、「育成したい生徒像」「注力すべき教育活動」「教職員に求める資質・行動」を示している。そして、学年や分掌、個々の職務だけでなく、全ての教育活動が「心豊かで主体的に生きる力を育む」ことにつながる共通目標であることを意識させている。目標の共有は、生徒指導、学習指導、特別活動など、多岐にわたる教育実践に統一感をもたらす基盤を築いている。

三 未来を切り拓く力を育む学級経営

共通の経営方針のもと、学級経営をはじめとする教育活動は具

体的な目標を設定し、達成に向けた過程を重視している。学級経営では、「落ち着いた学級」を目指すだけでなく、「生徒が自己肯定感を高め、多様性を尊重し、自治的な活動を通して課題解決能力を身に付ける」という、主体性の涵養に焦点を当てた目標を掲げている。教職員は日々の実践の中で目標達成度を評価し、指導を改善していく検証改善サイクルを組織的に展開している。この積み重ねにより、生徒が学校生活のあらゆる場面で「未来を切り拓く力」を養うことにつながっている。

四 教職員の精神的な安定と専門性の発揮

学校経営の充実、ひいては生徒の未来を見据えた資質・能力の育成には、教職員が精神的な安定をもって教育活動に専念できる職場環境が不可欠である。教職員が専門性を最大限に発揮し、質の高い教育を提供し続けるためには、心身ともに健康で、互いに協力し合える環境が土台となる。本校では、業務の効率化やワークライフバランスに配慮することはもちろん、働きがいを高める職場風土の醸成に努めている。互いの専門性を認め合い、遠慮なく意見交換や協働ができる環境は、職員のモチベーション向上を促し、結果として生徒へのより質の高い教育となつて還元されるものと考えられている。校長としては、教職員が抱える課題に対し迅速且つ適切な支援を行うための努力を怠らず、組織全体の士気の高揚と持続的な発展に尽力している。

五 おわりに

大きな行事の一つである体育祭では、全校生徒と全職員で大きな円陣を組み、学校全体の一体感を生み出している。これは、学校の構成員としての帰属意識と主体的な参画意識を育む土壌となり、保護者・地域の方々にも安心感を与えている。

三つの柱（経営方針の共有、具体的目標設定、職場環境の充実）を学校経営の根幹に据え、教育実践の確立を図っている。これは一朝一夕に成し遂げられるものではなく、教職員、保護者、地域が一丸となって持続的に取り組むべき課題である。変化を恐れず教職員とともに学び合いながら、生徒の未来に貢献できる学校経営を目指している。

子供の声を基点とした学校経営の展開

札幌市・手稲中 原田 格

一 はじめに

「頂は気高くそびえ」と校歌にうたわれる手稲の麓、石狩平野を望む緑豊かな丘に位置する本校は、昭和二十二年五月、戦後の新制中学校として開校し、今年で七九周年を迎える。これまで二万一、〇〇〇人を超える卒業生を送り出してきたこの学び舎には、現在六八〇人の生徒が在籍し、豊かな自然と地域の支えの中で日々学びを重ねている。こうした歴史と伝統を受け継ぎながら、本校は時代の課題に向き合い、子供たちが「心豊かで主体的に生きる力」を育む場となることを目指している。

二 今年度の学校経営方針

本校の学校教育目標は、「美しい心」「たくましい身体」「みがかれた知性」である。今年度は、この三つのうち「美しい心」を重点に据え、教育活動を展開している。その具体的な取組として教育課程に位置づけたのが「美しい心プロジェクト」であり、生徒会が中心となって「挨拶」と「合唱」をテーマにした学級・学年・全校交流を実施した。互いの声に耳を傾け、心を通わせる活動を通して、生徒たちは「美しい心とは何か」を深く考え、仲間とともにその意味に迫った。こうした自治的な活動は、他者との関係性を築く力や、自己の在り方を見つめる力を育む貴重な機会となった。また、活動を通じて教職員は「子供の声を聴く」ことの大切さを改めて実感している。子供たちが自らの思いや考えを表現し、互いに認め合う場を創ることこそが、心の豊かさと主体性を育む土壌となる。日々の営みの中で、子供たち自身が学校づくりの担い手であるという意識が着実に育まれている。

三 小中一貫した教育の取組

本校では、手稲中学校区の三つの小学校（以下パートナー校）と連携し、小中一貫した教育活動を推進している。今年度は、パートナー校の児童会と本校生徒会によるオンライン交流を実施し、「自校で大切に

たいこと」「よりよい学校にするために工夫できること」をテーマに意見を交わし、互いの考えを共有した。この交流では、異なる校種の子供たちが互いの学校文化を理解し合いながら、自分たちの学校や地域をより良くするために何ができるかを主体的に考える姿が見られた。後に市内全中学校の生徒会役員が一堂に会して実施した「さっぽろっ子サミット」において、同じテーマで更に深い対話を重ねた。小学校との交流を経たことで、自分たちの考えをより明確にし、他校の仲間と協働する力を高めることができた。

この一連の取組は、子供たちの自治的な力を育むとともに、地域や他者との関係性の中で自分の役割を見いだす契機となった。何より、子供たちが「自分の声が学校づくりに活かされる」という実感を得たことが、主体的な学びの原動力となった。

四 地域との協働

今年度より、本校では学校運営協議会制度を導入し、「札幌らしいコミュニティ・スクール」を目指した学校づくりを進めている。この制度は、地域・家庭・学校が対等な立場で連携しながら、子供たち一人一人の成長を支える仕組みであり、札幌市が掲げる「人間尊重の教育」を具現化する取組でもある。導入にあたっては、地域の特性や資源を生かした教育活動のあり方について、丁寧な熟議を重ねてきた。その成果の一つが、防災体験キャンプ（避難所宿泊体験）の実施である。本校を会場に、パートナー校児童、保護者、地域住民を対象とした本事業には、本校生徒が避難所の開設や運営のボランティアとして参加した。この活動は、命を守る教育の実践であると同時に、地域の防災力を高める取組として大きな意義をもつものであった。子供たちは、自分が地域の一員であることを実感し、地域に貢献する喜びを味わった。こうした経験が、心豊かで主体的に生きる力の育成につながっている。

五 結びに

子供たちが安心して思いや考えを表現し、互いに認め合える場が、心の豊かさと主体性を育む基盤となっている。そうした日々の教育活動や仲間との関わりを通して、よりよい学校づくりに主体的に取り組む姿が確かに育っている。これからも、子供たちの声に耳を傾けながら、「心豊かで主体的に生きる力」を育む学校づくりを推進していきたい。

論考

心豊かで主体的に生きる力を育む生徒指導

「子供が主語」の学校づくり

せたな町・北檜山中 村田真一

一 はじめに

小中学生の不登校児童生徒数は約三〇万人で、一〇年連続で増加している。この喫緊の課題に対して、ICTを活用した学習支援や学校外の施設での学びなど、多様な教育機会を提供していくことが求められている。社会も激動期に入り、これからの子供たちは答えなき問いに挑んでいかなければならない。こうした社会を生き抜いていくためにもこれからは子供の主体性を伸ばすことを軸として、学校教育を推進していくことが必須である。全ての子供の可能性を最大限に伸ばしていくことを学校の使命として、「子供が主語の学校づくり」をいかにマネジメントしていくかが重要と考える。

二 具体的実践事項

1 重点教育目標に正対した教育活動

校訓「自立」「共生」を踏まえ、今年度、重点教育目標として「自ら」「コミュ（コミュニケーション）」の先にある成長・貢献を見ずえてくとした。「自ら」「コミュ」は昨年度から掲げ、やってみることに積極的に挑戦する生徒は増えてきた。今年度はさらなるステップとして、やりたくないことでも自らの成長や周囲への貢献につながることであれば積極的にやってみる。こうした姿勢を全教育活動で育んでいく。また、「コミュ」＝「対話」と捉え、多数決などではなく、「話し合い活動」によって、建設的な妥協点を探る経験を積ませることとした。

全ての教育活動において、こうした「自ら」「コミュ」を最上位目標としてそれを実現するための目標や手だてを設定していく。

2 生徒指導の充実「させる」「支える」へ

生徒指導提要在改訂され、「させる指導」から「支える指導」へ転換していくことが求められている。そのことから「生徒の発達

を支える視点にたつた指導（発達支持的生徒指導）」、「生徒指導の諸課題の未然防止をねらいとした意図的・組織的・系統的な教育プログラム（課題予防的生徒指導）」の充実を図ることが重要と考える。それを意図して、次のことを実践している。

(1) 発達支持的生徒指導の具体として日常的に教師から生徒（個人及び集団においても）への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、話を積極的に進めていく。

(2) 課題予防的生徒指導の具体として昼休みにおける定期的な生徒主催の『全校レク』の実施（はじめが起きにくい学校づくり、いじめ根絶の校風づくりの一環として位置づけている）。

(3) 困難課題対応的生徒指導として別室登校生徒への対応
本校では不登校傾向生徒が数名おり、学年団で空き時間の教諭が個に応じた対応を行っていた。ただ、同じ時間帯に複数の生徒が来たときなど対応が困難であった。そこで、次のような対応に転換した。

↓別室登校生徒への対応を学校全体で組織的・計画的に実施
管理職を含め、学年団に限らず、空き時間の教諭による別室登校への対応を計画的に行う。毎週配付される時間割に予め対応する教諭名を記載、全校体制で支援にあたっている。

三 おわりに

教職員が「まずはやってみる」が合言葉となり、新たなことにもトライ&エラーを繰り返しながら積極的にやってみる姿勢が多くなった。率先垂範で「自ら」挑む姿勢が生徒たちにも伝わり、各種検定や大会などに挑戦する生徒が増えた。また、不登校傾向及び時間登校の対応に全体で計画的にあたることにより、「学年団」から「学校」の問題として先生方が捉えるようになってきた。本校の教職員は平均年齢が三〇・五歳と非常に若く、生徒との距離感が近すぎる面もある。生徒の多くは教師に親しみをもって接しているが、指導場面では指導が浸透しにくい状況もある。保護者対応などでも戸惑うことが多い。上手くないことも多いが、先輩教師の助言を受けながら、一人一人が経験値の向上に努めている。こうした教職員の生徒への真摯なまなざしと保護者・地域の方々のサポートにより、「子供が主語の学校づくり」を推進していく。

認め合い、高め合い、支え合える生徒の育成

日高町・富川中 杉山 一彦

一 はじめに

本校では、「自ら考え行動し創造する生徒」を学校教育目標に掲げ、予測困難な変化の激しい社会において、生徒一人一人が自己肯定感を育み、他者を尊重しながら社会の一員として心豊かに生きる力の育成を目指している。その根幹を成すのが、「認め合い、高め合い、支え合える生徒の育成」『大切な私とあなた』自尊と他尊』という重点目標である。この目標達成に向け、生徒指導の機能を最大限に生かした教育活動を推進している。生徒指導は単なる問題行動への対応だけではなく、生徒一人一人の未来を切り拓くための積極的な営みであるという理念のもと、日々の教育活動に取り組んでいる。

二 自己肯定感と他者尊重の基盤を築く

生徒指導という問題行動への対応という側面が強調されがちだが、本校が重視するのはその未然防止や生徒の健全な成長を促す「積極的な生徒指導」である。中でも特に生徒の「自尊感情」と「他尊感情」を育むことには最重要課題として注力している。自尊感情は自身身を大切に思う心であり、自信をもって様々なことに挑戦する力の源となる。一方、他尊感情は他者の価値や存在を認めて尊重する心であり、より良い人間関係を築く上で不可欠な力である。この二つの感情が育つことで生徒は互いの違いを認め合い、集団の中で安心して自分を表現できる「居場所」を見付けることができると考えている。

具体的な取組として、学級・学年経営、そして各授業において、生徒が安心して自分の思いや疑問を語り合えるような温かい集団づくりを心がけている。その際には、生徒の自主性を促すことを意識した、教師の主体的な姿勢と、生徒の多様な意見や価値観を受容する指導が重要となってくる。また、本校の伝統である歌声活動も、生徒同士が心を一つにして一つのものを作り上げる貴重な機会であり、互いを認め合う心

を育む上で大きな役割を担っている。

三 「富中生が身に付けるべき九つの力」を育む教育活動

本校の教育活動は、生徒が将来、社会で生き抜くために必要な資質・能力を育むことを目的としている。それらは、「富中生が身に付けるべき九つの力」として具体化されており、各教科等の学習活動と生徒指導が一体となって育成を目指すものである。

この「九つの力」は、「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びにむかう力・人間性等』の涵養」と、三つの柱で構成されている。例えば生徒指導の場で、生徒が自分の考えを整理して表現したり（思考力・表現力）、相手の意見を傾聴し、協力して問題解決にあたりたりする（判断力・人間性等）ことは、これら「九つの力」を育む実践そのものである。

特に、日々の学校生活における「礼節」指導はこの実践の要となる。「先手の挨拶」や「傾聴力」「靴を揃える」「しつかりした返事」といった当たり前のことを当たり前に実践する習慣は、他者への敬意や思いやりを育む基盤となる。これは、単なるマナー指導ではなく、自己を律し、社会に生きる一員としての自覚を促し、生徒一人一人の人間性を高める大切な教育活動と位置付けている。また、小・中の連携も強化し、九年間の一貫した指導を視野に入れた「学びと生活習慣の円滑な接続」を目指している。

四 おわりに

本校が目指す「認め合い、高め合い、支え合える生徒」の育成は、一朝一夕には成し遂げられるものではないが、教職員が日々の地道な教育実践を粘り強く積み重ねていく中で、少しずつ生徒の姿として着実に表れてきている。生徒一人一人が「自分は大切な存在だ」と感じ、同時に「仲間も大切な存在だ」と心から思える学校。そのような温かい人間関係の土壌があつてこそ、生徒は安心して挑戦し、共に未来を切り拓いていく力を育むことができる。私達はこれからも地域社会と連携し、生徒一人一人の可能性を最大限に引き出す教育を追求し続けていく。

自分を大切にできる生徒指導をめざして

清水町・清水中 嘉藤 貴 充

一 はじめに

本町は十勝平野が日高山脈へと隆起する一帯に位置し、第九の町として知られている。五年に一度開催される第九の合唱は、町民をはじめ、道内から愛好家が集い、年末の厳冬を彩る行事となっている。町内には二小二中があり、本校は清水小学校からの児童が全入する中規模校である。清水町教育委員会は第九にちなみ、「心響」という理念を掲げ心通わせ、互いに響き合う感性豊かな教育を推進している。リアクティブな生徒指導は年間を通すと散見されるが、生徒は温厚で人懐っこく素直である。

二 小中一貫教育における生徒指導の取組

本町は小中九年間の義務教育を連続した教育課程として考え、基礎学力・体力の定着、自らの夢や目標の実現に向けてたくましく歩む力、思いやりをもち、豊かな感性を身に付けた人となる基盤づくりを目指している。小中一貫教育推進の一環として、乗り入れ授業をはじめ、小中同一の研修テーマを設ける、職員の福利厚生とは別のスポーツ交流会を実施するなど、小中の実質的連携が推進されている。小中一貫教育における生徒指導に関わる具体としては以下のようになっている。

小中学校区ごとに小中一貫教育推進委員会を構成し、全職員が事務局・学習部・生活部・研修部に所属し、以下について運営している。

1 事務局

英語・理科の通年乗り入れ授業・道外道内視察研修補助・小中学校教職員によるレクレーション・教職員の要望に細かく応える
研修会（本年度はDXに関して5コース）・町子供作品展

2 学習部

十勝清水学の学習指導系統表の更新・中学校全校合唱の見学と

3 第九交流・新入生説明会・外部機関を含めた新入生引継ぎ生活部

性の学習指導系統表の更新・学級指導系統表の更新・安全指導系統表の更新・小中合同挨拶運動

4 研修部

小中統一した校内研修テーマの設定・授業参観交流（年二回）・合同研修会

三 スクールミッションとWBC

「自分のことが好き」自分以上に他の人を大切にはできない。だからまず自分を好きになろう。「友達が好き」友達がいるから味わえる日々の喜びがある。「学校が好き」学校という箱（建物）はもろろんのこと、行事の日程を決めたり企画したり、集団だからできる体験と喜びがある：：以上、文化祭閉祭式の校長挨拶の要旨である。これは学調のWBCに加えて、全校生徒を対象にした本校独自の質問に紐付いている。それは「自分のことが好きですか」という質問である。学調の質問項目「自分にはよいところがある」と「自分のことが好き」では、肯定的回答に至る障壁が格段に違う。そこを乗り越えて、肯定的回答を95%にするのがスクールミッションである。なお、自己肯定感（効力感）を軸にした学校改革もあるが本校では「自分が好き」をキーワードにした。

四 おわりに

定量的な根拠が重要であると同時に、教育では定性的なアセスメントも重要である。定性的アセスメントは主観的になりやすく、時間と労力がかかるというデメリットがあるが、心に響く生徒指導には欠かせない。校長は生徒指導提要に基づきつつ定性的アセスメントができる人材を育成していくことが学校経営の要諦と考える。

肯定的回答の割合	自分にはよいところがある	自分のことが好きだ
本校（R 7 全校）	89.8%	68.4%
全国（R 7 中三）	86.2%	—

自己肯定感を育み、

自他を大切にすする生徒の育成

釧路市・大楽毛中 安部 新路

一 はじめに

本校は平成の大合併前、旧釧路市の最西部に位置している。全国で有数の製紙工場を地盤に発展してきたが、工場の縮小化等に伴い、現在は地域人口が減少し、各学年とも通常学級は単学級となっている。令和四年に策定された「釧路市がめざす学校のすがた基本計画」に基づき、本校は令和八年度に校舎一体型の義務教育学校になることが決定されている。校区小学校と学校評価などの情報共有するなか、校区児童生徒の共通課題として「自己肯定感」が低いことが分かり、今年度はこの向上を重点の一つとした。

二 課題解決に向けて

1 課題の共有

今年度のグランドデザイン内に自己肯定感向上が重点事項であると明記し、年度当初の職員会議で説明した。これにより、職員との認識を共有化し、小学校ともグランドデザインを事前に情報交換し、同内容をそれぞれに盛り込み重要課題と位置付けた。

2 組織マネジメントの整備

生徒指導部を中心として、釧路市全中学校で取り組んでいる「アセス」を実施後細かに分析し、職員会議で各クラスの傾向を共有した。また、課題を抱える生徒個々の現状を把握し、その改善策を学年部会で討議し、組織的な取組を意識させた。

3 生徒指導手法の個人研修

徳島県等で取り組んでいるスクールワイドPBS（ポジティブ行動支援）やペップトークなど、生徒に今まで行いがちで

あったマイナスの言葉がけではなく、ポジティブに働く手法を個人ミニ研修の資料として提供した。教師にとって好ましくない行動を注意するのではなく、全体できてきている良いことを褒めていく。これを繰り返すと好ましい集団が形成されるというのがPBSの理論である。

4 学校評価への位置付け

評価項目に生徒が自分に自信をもって行動しているかを位置付け、数値化することにより現状の可視化を図った。

三 現状と課題

前期の学校評価を集計したが、結果は満足のいく値ではなかった。原因をつき詰めると、次の課題が浮き彫りとなった。

1 教職員の温度差

2 生徒への声掛け言葉基準の曖昧さ

3 生徒同士の言葉の問題

1 に関しては、ベテラン層になると過去の経験から、全体への強い指導を行う傾向が見られ、期末期首面談等で改善をアドバイスしている。2に関しては、各個人に資料を渡し任せきりにしていたので、本校職員としての具体に欠けていた。教頭を中心にコアチームを作り、本校のスタンダードを現在検討中である。3に関しては、小学校、ともすれば幼稚園、保育所から人間関係が変わらない生徒の環境があり、ソーシャルスキルトレーニングが不足している。特別活動等で言葉選びや相手の表情を読み取るなどの対人スキルアツプを生徒指導部が中心となり実行している。早急に改善につながればと考えている。

四 終わりに

道半ばで、思うように組織が動かない場合が見られるが、「校長が変われば学校が変わる」を胸に、日々職員とともにに精進してきた。

論考

心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習

心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習

余市町・旭中 久米 達夫

一 はじめに

余市町は、後志地方の北西部にある積丹半島の付け根に位置しており、札幌・積丹・倶知安方面への交通の要衝となつている。基幹産業は漁業及び農業で、特に果樹栽培が有名であり、中でもリンゴそして近年ではワイン用のブドウの栽培が盛んに行われている。また、本校に限らず、余市町の小中学校は、人口減少そして少子化の影響で、年々児童生徒数が減少しており、本校では学年一クラスとなることが常態化してきている。またコロナ禍以降、PTA活動が縮小されて学校と家庭のつながりが薄れてきているものの、幸い家庭・地域の教育力は高いこともあり、生徒たちは素直で落ち着いた学校生活を送っている。

本校では、地域と連携した体験学習(探究学習)を推進する中で、「互いに認め合い高め合う」生徒を育み、「ふるさとよいち」に誇りと愛着をもてるよう豊かな心を育んでいきたいと考えている。

二 本校の取組

1 地域の魅力(余市町のよさ)、自己の適性・働くことの意味

生徒が自分たちの住んでいる余市町の良さを知ること、郷土への誇りや愛着を育むため、第一学年では、余市町の地域おこし協力隊の方に余市町の魅力についての講演をしていただき、他地域の人から見た「余市町のよさ」を知る機会を得ている。また、生徒の興味のある仕事分野から町内の企業訪問を行い、その中で「余市町のよさ」そして職業観などについてインタビューを行う。

余市町は、ニッカウキスキーをはじめとした観光資源に恵まれていることから、見学旅行では小樽商科大学で「これからの観光のあり方」について特別講義を受け、余市町の未来について考えるきっかけとしている。また見学旅行の午後は、小樽市内のグループでアポイントをとった企業訪問を行い、その企業の取組と余市町企業との取組の相違点を考える機会としている。

2 余市町への貢献・職業観と自己実現

第二学年においては、毎年町内企業の多大なる協力のもと、二日間の職場体験学習を行っている。生徒たちは、受け入れ先の企業に依頼の電話・礼状の送付、そして二日間の職場体験、職場体験学習のまとめと発表の学習を行っている。この一連の学習を通して、思考力・判断力・表現力を育むとともに、余市町に貢献する心を育て、地域と自分との関わりについて主体的に考えていくことにつなげていく。なお、本校の職場体験学習のために今年度、町内三三の企業が生徒を受け入れてくれた。地域の子供たちに対する期待の高さが窺える。この取組から、生徒たちは地域で働くことに肯定的な考えをもつとともに、自分の将来の目標とそれに近づくための道筋を考えることができる。

3 余市町の活性化・職業選択と自己の生き方

第三学年の「自己探求学習」では、東京への修学旅行の中で、「企業訪問」を実施している。事前に、グループで官公庁や大企業にアポイントを取り、企業を訪問し、担当の方に「職業選択について」や「働く意義」などについて学び、今後の自己の職業選択や自分の生き方について考える取組を行っている。また、生徒自身が主体的に「余市町の町づくり」を考える取組を行っている。生徒は「余市町の活性化」に視点を当てたテーマをもとに、提案型レポートを「余市町役場総合政策部」の方にアドバイスをもらいながらグループごとにまとめ、地域・保護者の方々に発信する学習を行っている。生徒の発表の多くは「観光産業の活性化」を視点とし、観光客を集める方法についてまとめるなど、探究・提案・発信型の学びを進めている。

三 おわりに

本校の生徒たちは、素直で心優しく、授業や行事、部活動等に真面目に取り組むことができる反面、活動に対して受け身であるという一面が見られる。この総合的な学習の時間を中心として、生徒が、自分事として「まちづくり」に関わり、さらに「ふるさとよいち」を愛し誇りにすることができるようこの体験活動を発展させていきたい。

「神中タイム」を要とした

人間関係形成能力等の育成

旭川市・神楽中 辻 並 浩 樹

一 はじめに

本校は、昭和二十二年に神楽村立神楽中学校として開校した。その後、旭川市との合併により昭和四十三年に現在の旭川市立神楽中学校として校名を変え、令和六年度末で一四、六三八人の卒業生を輩出している。少子化の影響を受け、近年、生徒数は減少しているが、今年度の全校生徒数は三七六人であり、旭川市立の二五中学校のうち八番目の生徒数である。学校教育目標「未来を主体的に切り拓くたくましさ豊かな情操を培う」のもと、四七人の職員が、「挑戦」と「協働」を合い言葉に「知・徳・体」のバランスの取れた生徒の育成に努めている。

そうした中、学校教育目標の具現化に向けた中期目標（令和六年度から八年度）において、他者と関わり他者に自分の考えを伝えたり他者の考えを受け止めたりするなどの人間関係形成能力やコミュニケーション能力を育むことを重点とした教育を推進している。

二 本校の取組

1 要となる学習活動の設定

道徳教育が、特別の教科道徳を要として全教育活動を通じて行われるのと同様に、本校で育成を目指す人間関係形成能力等の要となる学習活動が必要と考えた。そのため、令和六年度から総合的な学習の時間で、年間一五時間の「神中タイム」を実施している。全校一斉に体育館で行う学習を中心としており、「まずは聴く力を高めよ」などをテーマに、話の聴き方や他者と関わるとき気持の在り方等について学ぶ学習や、全校縦割りの小グループになり、与えられたテーマについて考えを交流する活動などを行っている。



2

多様な他者から生き方や考え方を学ぶ体験的な学習
令和六年度及び七年度の重点教育目標である「主体的・協働的に学び、粘り強く心と体を鍛え、地域を愛する生徒の育成」を踏まえ、令和六年度から、地域にある人・もの・ことなどを活用した教育活動の推進に努めている。特に、地域人材などの多様な他者から学ぶ機会においては、前述の「神中タイム」で身に付けた他者との関わり方を実践する場となるよう工夫している。

(1) 職場体験学習（二学年）

コロナ禍で中止していた職場体験学習を令和五年度から再開するにあたり、以前は市の中心部にある商店街で体験場所を確保していたが、教職員が校区の幼稚園や商店、事業所等を一軒一軒訪問して協力を依頼し、二二箇所の体験場所を確保し実施している。生徒が自分の住む地域について、その良さを理解するきっかけになるとともに、受け入れ先の事業所等からも「こちらも良い刺激をもらった。来年もぜひ来てほしい」との感想をいただくなど、地域が本校生徒を知る貴重な機会にもなった。

(2) 地域貢献活動（三学年）

通学路を中心に、地域の草取り、ごみ拾いを地域の市民委員会の方々と行う活動である。一生懸命作業に取り組み生徒の姿を見ていた地域の方々からお褒めの言葉をいただくことで、地域の環境保全に寄与しようとする態度の醸成につながっている。

三 おわりに

昨年実施した学校評価（生徒アンケート）で、「自分の住んでいる地域が気に入っているか」との質問項目に対する肯定的な回答の割合が九六%であった。前年度比二%の増加であり高い傾向を示した。今後も、「神中タイム」を要として生徒の人間関係形成能力等を育み、多様な他者から生き方や考え方を学ぶことを通して、地域を愛し、地域から愛される心豊かな生徒の育成に取り組んでいきたい。



ふるさとを愛し

未来を担う力を育成する体験学習

利尻町・利尻中 三原 美和子

一 はじめに

利尻町は、二校あった中学校が、生徒数の減少が著しい状況となり、存続問題が検討されるようになった。平成二十四年、両校を対等合併し、新設中学校を立ち上げることが決まる。平成二十七年に場所が決定し、学校名・校訓・学校教育目標・校歌・校章・制服等が決まる。教育課程編成は二年間にわたり行った。そして、平成二十九年四月より「利尻中学校」がスタートした。この中学校は、地域一体となった学校を目指し、学校運営協議会を設置している。旧杵形中と仙法志中が進めて来た伝統を踏まえつつ、小中連携・中高連携による教科指導の系統性と、家庭学習習慣の定着を目指している。個別最適な学び・協働的な学びの一体的充実を進め、小中高一二年間で、子供たちが、未来を生きる力を育む教育活動を展開している。

二 本校の取組

1 地域学習を通して利尻の現状や課題を把握する(一年生)

一年生では、利尻島の魅力を再発見するため、他の島について学習する。春に、近隣の礼文島について調べ現地へ行き調査や体験を行う。利尻と礼文は一緒に訪れる観光客が多く、どちらも人気の観光地である。しかし、礼文には行ったことがない生徒が多く知らないことが多い。三年前から、礼文町教育委員会との連携・御協力により、現地観光と体験学習が可能となった。礼文島の魅力を自分たちの目で見て確かめられることは大変ありがたい。そこで感じたことを基に、わが町の強みや弱みを見付けることにつなげている。その後は、少し離れた小笠原諸島・与那国島・小豆島についても調べ、可能であればオンライン交流を行い学習を進めている。利尻島の魅力を新たな視点で再発見することから、地域への関心を高め、中学生ならではの観光振興・地域活性化のアイデアを考え実践していきたい。

2 地域の福祉活動や職場体験を通して、自己の将来を考える(二年生)

二年生では、春に、地域の高齢者生活福祉施設への訪問や、高齢者疑似体験を行い「福祉」を学ぶ。利尻は、高齢者が多く生活する地域である。その実態や課題に目を向け、高齢者にとって住みよい町にするために、自分たちができることを考える。秋には職場体験学習を行い、進路を考える。二日間の体験学習に向け、適性に合わせ行き先を決定し、依頼状・礼状・履歴書を書くことや礼儀・マナーを学ぶ。体験後は、まとめたことを発表し、働くことの意義や、自分の生き方を主体的に考えることにつなげる。進路を考える中で、地域への思いを深めることにも関連させている。

3 観光活動や進路学習を通じて、故郷に愛着と誇りをもつ(三年生)

三年生では、修学旅行で行う観光大使活動を通して、積極的に利尻町の観光振興や町の良さを広く伝えるためのアイデアを考える。活動は、千歳空港や札幌駅で行って来たが、今年は、より多くの人が集まるエスコンフィールドで行うことになった。手作りのパンフレットで町の観光名所や特産品の宣伝をすることや、配布方法を工夫し「行ってみたい」と興味が多く考えて実施する。また、上級学校訪問や自主研修を通して、自分の進路について考えを深める。それらの活動を通して、生まれ育った利尻町を改めて見つめ直し、自分の生き方を考えながら、郷土を愛する精神を学ぶ機会にしている。

三 おわりに

本校の校訓は「愛郷立志」、学校教育目標は、「ふるさとを愛し未来を担う生徒の育成」である。はじめで素直に取り組む生徒が多く、地域は学校に協力的であり、行事には多くの方が来校する。総合的な学習の時間、特別活動(学校行事)の体験活動を中心に、主体的に考え取り組む力を高め、地域連携に取り組んでいる。これらの教育活動を通して、地域に愛着をもち、地域社会を担う人材育成ができれば、と考えている。今年度も、地域の教育資源を積極的に活用し、「心豊かで主体的に生きる力」を育成し、地域の期待にこたえていけるよう努力したい。

「八雲町、もっと知ろう！」

探究と課題解決に向けて

八雲町・八雲中 増田 正弘

一 はじめに

八雲町は、日本で唯一太平洋と日本海に面した町である。平成十七年十月一日をもって熊石町と合併し、新八雲町となった。そこで「二海（ふたみ）郡」という新しい郡名が付けられた。八雲町市街地（八雲駅前）から熊石地区（旧熊石町の中心部あたり）まで、約三六・三kmある。

八雲町の人口は令和七年十月末日現在、一四、二七四人で、世帯数は七、九三九世帯、人口及び世帯数ともに減少傾向にある。地域の特色として、現在は、主産業は漁業と酪農であるが、地の利もあって、官公庁が多く、経済的にも北部渡島の中心地としての地位を確かなものになっている。町内には小中学校合わせて一校あり、中学校は四校設置している。

そこで、本校では熊石地域の歴史、産業、文化、暮らし、自然、観光を学習し、現地を訪れ直接触れることで、八雲町のことをより深く理解できるものと考え、第一学年での総合的な学習に取り入れている。

実際の熊石地域への訪問では、八雲町役場の御理解と御協力を賜り、助言等をしていただき見学場所の選定をさせていただいている。

二 本校の取組

1 総合的な学習の時間の【重点目標】「横断と探究の充実」

2 総合的な学習の時間の【指導の重点】

- ・ 学習方法の工夫
- ・ 地域人材と素材の活用
- ・ 幅広い学習の場の工夫
- ・ キャリア教育の充実

3 総合的な学習の時間の【具体的な指導方針】

- (1) 各教科で基礎基本的な知識・技能の徹底を図り、各教科で得た力をもとに、横断的に、また主体的に学ぶ態度を育てる。

- (2) 個々の生徒が、自らの課題意識をもち、仲間同士で、学び合い、高め合いながら、課題を解決する力を育てる。
- (3) 職業や上級学校についての知見を深めるとともに、自己のよりよい生き方を考える力を育てる。
- (4) 生命現象の神秘やその素晴らしさを探究し、考える力を育てる。
- (5) 必要な情報を収集し、まとめ、理解しやすく発表する力を育てる。

特に一学年の総合学習の時間では、「探究的な学びの素地を養う。」「協働的な学習場面を設定する。」そして、「基礎基本的な知識及び技能の確実な習得と活用を図る。」ことをねらいとし、生徒が八雲町をより深く知るためにも、熊石地域の探究と課題解決に向けての学習に取り組むことにしている。

例年、第一学年が十月の中旬に熊石地域をスクールバスで訪れている。主な研修場所は、八雲町熊石歴史記念館、熊石漁港ふれあい広場（海洋深層水）、八雲町熊石サーモン種苗生産施設、ふれあい交流センターである。それぞれの施設の訪問時に、担当者に質問し、歴史、文化、産業等について学ぶことになる。活動後のまとめとして、グーグルのスライド、キャンバ等で研修した内容をまとめる。プロジェクト等を活用しながら、学年で発表し合い、互いに学び合い、更に八雲町のことを知ることができる。

三 おわりに

本校では、これまで熊石地域の歴史や文化、産業、自然など、多様な視点からの学習を通して、地域の魅力や課題について理解を深めてきた。実際に現地を訪れ、人や自然と直接ふれあう体験を重ねることで、生徒たちは自らの目で確かめ、考え、発見する力を育んできた。

こうした学びを通じて、生徒たちは「ふるさと八雲町」への関心と愛着を一層強くし、自分たちの住む地域をよりよくしようとする意識や探究心を高めている。今後も、これまでの成果を大切にしながら、地域とのつながりを更に広げ、課題解決に主体的に取り組む学習を継続していきたいと考えている。そして、生徒一人一人が、ふるさと八雲町を誇りに思い、自らの生き方を見つめ、将来にわたって学び続ける姿勢を育んでいくことを期待している。

国際交流の中で、

主体的に異文化理解を深める体験活動

西興部村・西興部中 堀内篤宏

一 はじめに

本校は北海道東北部、オホーツク管内の西北端に位置する西興部村に所在する全校生徒一九人の小規模の中学校である。西興部村は秀峰ウエンシリ岳を望み、厳しい自然の中で、「郷土の歴史と自然を愛し、健やかな心と体をつくり、たがいに学びあい、力をあわせ、個性ある文化と住みよい郷土を築く村民に」を教育目標とする。人口九〇〇人余りの村である。本村の子供たちは村から様々な支援を受けており、本校の生徒は隔年でアメリカ合衆国アラスカ州ジュノー市でのホームステイにて、様々な体験学習に参加している。この海外体験学習は平成四年度の北方圏センター主催のオーロラスクール事業を端に発して、平成九年からは、ジュノー市教育委員会や帰国した英語指導助手の協力により独自の海外体験学習事業に発展している。現在では中学一・二年生が隔年でアラスカ州ジュノー市にて、ホームステイによる海外体験学習を行っている。

二 本校の取組

1 アラスカ州ジュノー市訪問前の事前学習

西興部村教育委員会と連携を図りながら、村内で農業実習等を行っている外国人との交流を通して、外国の歴史や地理、生活、文化、習慣などについて班ごとに課題を設定し、情報を収集するなどの探究的な学習や体験的活動を行うことで、西興部と外国との国際交流に積極的に関わろうとする態度を育んでいる。英語指導助手や地域の方々の協力を得て、スライドや標本を使用して、アラスカ州の自然（主に動植物）や風土などを学習している。この学習の中では、アラスカ地域で暮らす外国人とそ



ている。

2 アラスカ州ジュノー市での体験学習（ホームステイ）

海外体験学習事業「アラスカ・ジュノーへの翼」は移動も含め、七日間の日程で実施されている。この事業の近年の悩みは円安だそう。ホテルだと三泊すると約一〇万円を超えるとのこと。引率者もホームステイで対応しており、ホストファミリーのお世話になっている。

さて、主体的に生きる力をはぐくむ体験学習は、アラスカ州ジュノー市へ到着するまでも多々ある。羽田空港での両替である。通貨は米ドルである。身分証を提示しての両替は初体験である。そして、入国審査である。現在はグループ毎の審査で引率者が入国目的等を説明しているが、簡単な質問は生徒にもされる。ジュノー市では多くの異文化体験をする。歓迎会を体験した後は、食文化（いろいろな食事を体験）、産業（鉱山跡地見学、鮭養殖場見学等）、自然（氷河体験ハイキング、ホエルウオツチング等）等、心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習を経験している。



3 本村に縁ある人との交流や講演を通しての学習

本村では、身近な国際交流・国際理解に力を入れており、数年前より西興部村に縁ある人との交流や講演を通しての学習を行っている。例えば、本校卒業生で、ニューヨークで脚本家をしている先輩、テネシー州で看護師資格を取得し、テネシー州クラークスビル市の病院で看護師をしている先輩、ブラジルで農場を経営している方々の卒業後にどのような経歴で今の職業をしているのか、どのような努力をしたかを交流や講演を通して学習している。

三 終わりに

本校は小規模校であり、教育委員会や地域との近さを生かした教育活動の推進を行っている。今後も地域の教育資源を積極的に活用し、地域連携や小中連携を通して、心豊かで主体的に生きる力を育成するとともに学校に対する地域の期待にも応えていきたい。

特集

テーマ

学校教育の今日的な課題から

～更なる学校力の向上を目指して～

1

「話合い」から「学び合ひ」への変革

～「分からない」「できない」と言い合える風土を創り上げる～

旭川市・愛宕中 濱 中 昌 志

2

エージェンシーを育む学校づくり

～自ら考え、主体的に行動し、責任をもって社会変革を実現していく力の育成～

留萌市・港南中 田 谷 典 久

3

体を通して未来を育む

～教育の総合力で子供を支える学校づくり～

浜中町・茶内中 宇 野 正 幸



「話合い」から「学び合い」への変革

「分からない」「できない」と言い合える風土を創り上げる

旭川市・愛宕中 **濱 中 昌 志**

一 はじめに

日本遺産に登録された旭川市を中心とするこの地域は、古来より上川アイヌの人々にとって神聖な地とされ、その精神文化は今なお脈々と受け継がれており、雄大な自然と共生しながら力強く営まれる市民の暮らしは、本市の教育活動にとって掛け替えのない基盤であり、全ての学校がその思いを踏まえた教育実践に取り組んでいる。

昭和十二年に「愛宕」と名付けられた本校所在の地域は、明治期に入植した屯田兵の有志によつて建立された「愛宕神社」に由来し、その後、昭和六十三年に創立された愛宕中学校では、「愛宕」の「愛」の字になぞらえ、愛情あふれる地域ぐるみの教育を推進するとともに、開拓の精神を受け継ぎ、「未来を拓く創造性豊かな生徒の育成」を目指している。

本校では、育成すべき資質や能力を「探究する力」「気遣う力」「貢献する力」「やり抜く力」とし、校区内の愛宕小学校、愛宕東小学校とともに「共育」を合い言葉に、一貫・連携・協働した教育活動を推進している。

二 本校の概要

先の見えない時代においては、地域とともに目指す「ウェルビーイング」の実現に向け、生徒同士の学び合いや、地域社会での多様でありながら体験活動などを通じた学校経営の改善が求められている。



愛宕中学校外観

こうした背景を受けて、本校では、学力・体力の向上に加え、日常生活における「当たり前の行動」を「できるようにになりたい」「できるように頑張ってほしい」との願いから、生徒、教職員、保護者、地域住民が自らの「立ち振る舞い」を意識しながら行動する「振る舞い教育」を実践し、学校だけでなく地域全体を学び舎と捉える「スクール・コミュニティ」に取り組んでいる。

また、これまでの「教え合い」「話合い」から「学び合い」への転換を図り、学校全体で「分からない」「できない」と言い合える校風づくりを進めており、教師間では以下の

合言葉を共有し、授業改善に取り組んでいる。

- ・「ハツとして、聞きたくなるようにする」
- ・「ハツとして、してみたくなるようにする」
- ・「ハツとして、考えたくなるようにする」

こうした取組を通して、「全ての生徒への学びの保障」と「教職員の働き方改革」を二本柱とした実践が二年目を迎えている。

三 「学びの保障」に向けた実践

1 VUCA時代を生き抜くために

本校では、これからの時代を生き抜く力として、次のような力に着目した教育実践に取り組んでいる。

- ・ 文章を正確に読み解く力
- ・ 自分の頭で考え、表現する力
- ・ 対話や協働を通して納得解を導く力

とりわけ「情報を適切に収集・活用する力」「柔軟に課題へ対応する力」「コミュニケーション能力」などについては、教員自身が描く「学びのストーリー」を構想するプロセスに必ず取り入れることとし、校内研修を通して全教職員の共通実践としている。

2 生徒が主役となる授業づくり

全ての生徒に確かな学力を保証するためには、「楽しい学校」すなわち「楽しい授業」がそこに実在することが不可欠である。本校ではその実現のため、以下の二点を重点として取組を進めている。

(1) 短期の検証改善サイクルの導入

教育活動においては、エビデンスに基づく短期的な検証と改善を重視し、単元ごとに学級差のデータを収集・比較しながら、授業改善へとつなげているが、特に、次の視点を意識している。

- ・ ICTの効果的な活用
 - ・ 生徒の選択幅、選択肢のある授業設計
- (2) 課題設定の見直しと「学び合い」の重視



ICTを活用した授業風景

本校が育成を目指す生徒の資質・能力は、「探究する力」「気遣う力」「貢献する力」「やり抜く力」であり、今年度は、「学び合い」と「ジャンプ課題」の設定を軸とした授業改善を進めている。「探究する力」「やり抜く力」については、生徒が挑戦し続ける課題を通し

て、粘り強く学ぶ力を育成することを意識している。

また、「気遣う力」「貢献する力」については仲間と協力して学び合う経験から育むことを意識している。

3 「ジャンプ課題」の設定

「ジャンプ課題」は、教師が新しいことに取り組むという趣旨ではなく、既に実践している「生徒が夢中で取り組み続けられる課題との出会い」をこれまで以上に大切にし、アップデートすることに重点を置いている。

具体的には、

- ・ 簡単には解決できない課題
 - ・ 何とか解決できる感じがする課題
 - ・ 挑戦しがいがある課題
 - ・ 学力の違いに関わらず夢中になれる課題
 - ・ 新たな発見や気付きがもてる課題
 - ・ 想像力や発想力をかき立てる課題
 - ・ 自らが基礎基本の重要性に気づく課題
- などのほか、教科の本質や特性であったり、「見方・考え方」を大切にしたりすることを重視している課題としている。これらの課題の提示は、全教師が年に一回行う研究授業「一人一授業」で交流が図られている。

4 令和七年度「上川管内EBE協議会」

前述の実践に加え、本校では、上川教育局が主催する「上川学びフォーカス」に参

画し、エビデンスに基づいた実践の検証を行っている。その中で、以下の項目について、肯定的回答の向上を目標に取組を推進している。

(1) 「課題解決に向けて取り組んだ」の問いに

- (肯定的回答が八〇・二%を八〇・三%に)
- (2) 「自分には良いところがある」の問いに
(肯定的回答が七五・六%を八三・三%に)
- (3) 「ICTを活用し楽しんで学習を進めた」の問いに

- (肯定的回答が七五・六%を八二・四%に)
- (4) 「ICTを活用し自分の考えや意見を分かりやすく伝えた」の問いに
(肯定的回答が七〇・二%を七七・六%に)

それぞれ向上させるため、「一人一授業の公開」による授業改善を着実に推進して、その成果を検証していきたい。

四 「働き方改革」の見える化

着任当初、生徒や保護者対応、学校業務が優先といった雰囲気に加え、部活動や成績処理、日常の事務処理等で、過労死ラインに達する教職員が複数いるなど、働き方の見直しが急務であった。

また、これまでの伝統や前年度踏襲の学校運営からの脱却が必要であり、授業改善はもとより、生徒や保護者への対応の時間確保のためにも、次の実践について「できるところから」「減らせることから」を合い言葉に、昨年度の二学期から進めている。

1 チーム担任制の導入

時差勤務やチーム担任制の導入は、単に仕組みとしてだけでなく、文化として根づかせることが重要である。例えば、

- ・スケジュールの見える化
- ・突発対応にチームで備える体制
- ・何でも一人で抱え込まない

などは、教員のメンタルヘルス向上と持続可能な教育の両立に不可欠である。そのため、特に、次の四点に注力している。

(1) 管理職自身の姿勢と発信

校長や教頭自らが「働きすぎを美德としない」メッセージを日常から発信することが改革の定着には不可欠であり、早めの退勤など、行動で示している。

(2) 小さな成功事例の共有と称賛

チーム担任制の導入により早出や遅出などの時差出勤等も定着しつつあり、「時差出勤で早く帰宅できた」「部活後すぐに退勤できた」などの好事例を日常的に共有している。

(3) 生徒視点のメリット

「相談しやすい先生がいる」「担任が複数いるので、生活のことや、学習のことを気軽に相談できる」など、肯定的な声を耳にする。

(4) 保護者視点のメリット

複数の教員が対応できるため、連絡の機会が増えるなど、相談しやすくなる。

また、多面的な視点で評価が受けられ柔軟な対応が可能となる。さらには、教員の負担軽減への理解が深まり、前向きな対応であると受け止められる。

(5) 調査結果を踏まえた改善

生徒アンケートでは約八割がチーム担任制に肯定的であったが、「誰に相談すればいいか分からない」「先生によって言うことが違う」といった声もあり、現在、改善を進めながらチーム担任制を展開している。

五 おわりに

上述した「学びの保障」と「働き方改革」は、片方だけでは成立しない。生徒と向き合う時間を生み出すためには、教職員のウェルビーイングの確保が前提であり、この二つを同時に推進することが、学校改革の本質であると考える。

今、求められているのは、学校を構成する全ての関係者「教職員」「家庭」「地域」が一体となり、子供たちの学びを支える「チーム学校」として歩むこと、互いが学び合い、高め合う「スクール・コミュニティ」の考え方による地方創生にある。本校における、これまでのレガシーを踏まえた昨年度からの実践は、今年度の全国学力・学習状況調査にお

いて、一定の成果として確認できた部分もあったが、これを一過性のものでせず、根拠となるエビデンスをもとに実践をアップデートし、持続可能な学校づくりを目指していきたい。



必要とされている自分を実感

最後に、私が教職員と共有している「子供たちのやる気スイッチ」を紹介し、本稿の結びとしたい。

子供たちの「やる気スイッチ」

- 「褒められたとき」
- 「面白さを感じたとき」
- 「やり方が分かったとき」
- 「明確な評価を得たとき」
- 「自分で選択できたとき」
- 「目的に希望がもてたとき」
- 「見通しがもてたとき」
- 「成長を実感できたとき」
- 「積み重ねが可視化されたとき」
- そして、
- 「自分が必要とされていると感じたとき」
- こうした瞬間を大切に、これからも教職員の専門性を高め、子供が主役の、子供たちとともに歩む学校経営に尽力したい。



エージェンシーを育む学校づくり ～自ら考え、主体的に行動し、責任をもって 社会変革を実現していく力の育成～

留萌市・港南中 田谷 典久

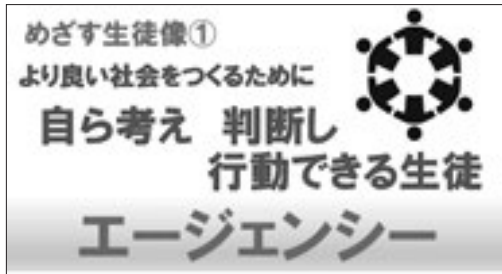
一 はじめに

本校は、日本海と暑寒別岳連峰を望む留萌市南西部の高台に位置している。留萌市は管内の中心都市であり、港湾関係や水産業が盛んな地域である。かつては校区の大部分が官公庁・商店街・住宅地であったが、商店街の移動により過疎化が急速に進んでいる。それに伴って、生徒数も大きく減少しているが、保護者の教育に対する関心は高く、PTA活動がボランティア制に移行した現在も、行事には多くの会員が主体的に参加するなど大変協力的である。

昨年度より、学校の重点目標として「主体性の伸張」を掲げ、全ての教育活動において自己決定の場を設けることで自己指導能力の向上に取り組んできた。今年度は更に目的意識を伴った主体性の伸張を目指し、「エージェンシー（自ら考え、主体的に行動し、責任をもって社会変革を実現していく力）」の育成に力を入れている。その達成のため、教職員の意見を取り入れながら組織改革にも着手し、教育活動全体における教職員自身の主体的な姿勢が生徒の良きロールモデルとなっている。

二 今年度の運営方針について

昨年度は、生徒主体による行事の取組や生徒会による校則改正など、積極的に自己決定の場を設けて主体性の育成に取り組んできた。しかし、校則改正のための生徒総会では自己中心的な発言も見られ、「何のための主体性なのか？」という疑問の声も、教職員や生徒から多く上がってきた。そこで今年度は、「より良い社会をつくるための主体性」であることを明確に打ち出し、その方針を教職員や生徒に浸透させるために校長自らプレゼンテーションを行った。



校長自ら生徒にプレゼンテーション



また、具体的な方策として、自己決定の場を与えるだけでなく、「目標設定↓自己決定↓振り返り」の3ステップ（左図）を全ての場面で実践していくことを教職員・生徒間で共有した。

五月の体育祭では、生徒会が主体となって競技種目を考案したり、放送係の生徒がアドリブで実況を行ったりするなど、エージェンシーを意識した生徒の姿勢が、様々な場面で成果として現れていた。



とができています。

保護者もその姿に心を動かされ、前年度より多くの方がボランティアとしてグラウンド整備に参加するなど、教職員・生徒・保護者が一体となってより良い学校をつくろうとする雰囲気醸成することができています。

三 エージェントを育む組織的取組

新しい生徒指導提要では「全ての教職員が、全ての教育活動を通じて、全ての児童生徒を対象に、その自発的且つ主体的な成長・発達の過程を支えていく働き掛けを生徒指導の基盤とする」と示されているように、従来の教務部⇨学力向上、指導部⇨指導力向上といったセクト的な発想では生徒のバランスのとれた成長は望めない。

そこで様々な課題に対して、焦点化しながら組織的に取り組むために、校長がリーダーシップを発揮し、分掌体制をチーム体制へと改編した(下図)。

教育課程チームは主体的に取り組む学習態度の育成、授業改善チームは主体的・対話的で深い学びへの授業改善、生徒支援チームは発達支持的生徒指導の充実、特別活動チームはデータを活用した非認知能力の育成など、全てのチームがエージェントの向上に向けて組織的に取り組んでいる。

効果的に課題解決に取り組むために4つのチームに組織を改編！

教育課程チーム	授業改善チーム	生徒支援チーム	特別活動チーム
主体的に取り組む家庭学習の推進	管内研究所と連携した授業改善	発達支持的生徒指導の充実	データを活用した非認知能力の育成
生徒が主体的に取り組めるような様々な取組	管内研究所員による校内研修の実施	授業における発達支持的生徒指導の紹介	非認知能力育成支援システム(エデュパス)の活用
全てのチームが、エージェント向上に向けて取り組む！			

Edv Pathで測れること① SEL/EQ

自分や他者の気持ちを理解し、自分を動かす

自己理解	社会/他者理解	責任ある意思決定	セルフマネジメント	対人関係スキル
自分自身を理解する	社会や他者を受け入れる	自分自身の立場を見つけ決定する	目標達成のために計画し実行する	自分の考えを整理し、誇りを巻き込む

Edv Pathで測れること② GRT

物事をやりぬく力

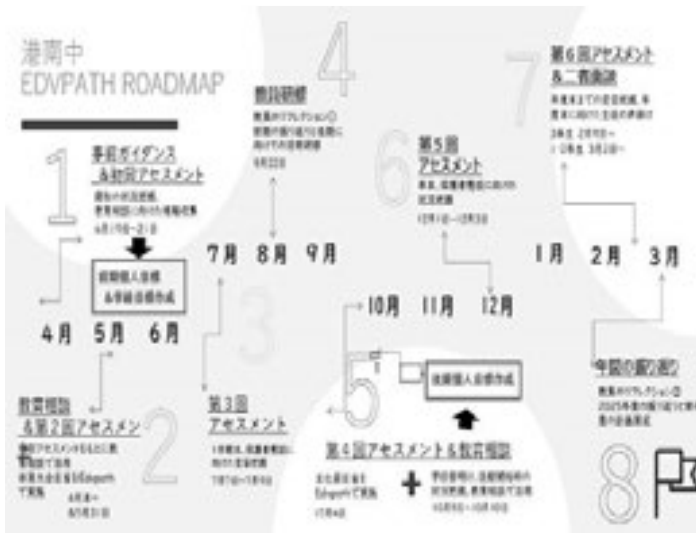
Grit 度胸	Resilience 復元力	Initiative 自発性	Tenacity 執念
困難なことに向かい向かう	失敗しても諦めずに続ける	自分で目標を定めて実行する	達成することへのこだわり



四 非認知能力育成支援システムの活用

本校では昨年度より、主体性やエージェントなどテストでは測定できない個人の特性による能力(非認知能力)の定着を可視化して支援するため、非認知能力育成支援システム「エデュパス」を活用している。

「知識・技能」ではなく、「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力・人間性」といった見えにくい学力を九つの項目(左図)で可視化し、生徒支援に活用している。



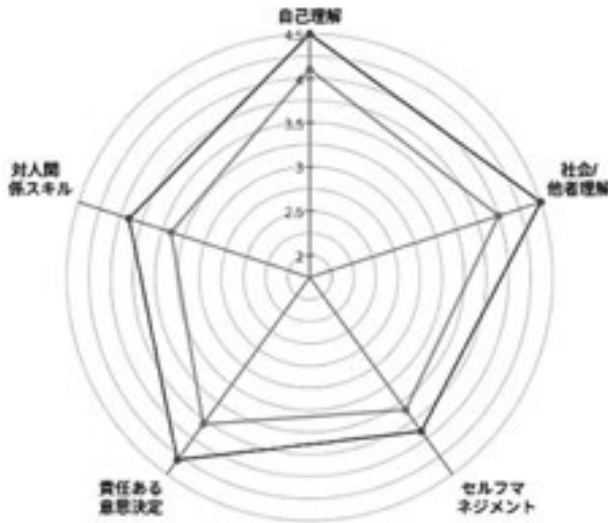
エデュパスの年間指導計画

また、左の年間指導計画に基き、教育相談や生徒アセスメント・教員研修・保護者面談においてエデュパスを有効に活用し、教師の主観だけでなく客観的なデータに基づいた支援を行っている。

- ①自己理解
- ②セルフマネジメント
- ③責任ある意思決定
- ④自発性
- ⑤執念

特に今年度は、エージェンシーの向上に重点を置いているため、次の五項目に着目して支援にあたっている。

五 終わりに
「VUCAの時代」と言われるように、先が見通せない状況の中で未来を生き抜く力として、エージェンシーの重要性がOECDを



グレー～4月 黒～7月

その結果、グラフ（左図）にあるように、セルフマネジメントや責任ある意思決定などの項目において大きな成長が見られた。この結果を教職員だけでなく、校長自らが一学期終業式で生徒に示したことによって、二学期からのさらなる意欲につながることができた。

また、保護者にも学校だよりで結果を定期的に伝えることで、協力的な支援体制が着実に醸成されている。

はじめ様々な分野で叫ばれている。本校でも、昨年度から主体性やエージェンシーの育成に力を入れ、生徒会を中心とした校則改正や生徒主体による教育活動を推進してきた。その結果、生徒会役員立候補者が大きく増え選挙になるなど、エージェンシーの定着が「生徒の姿」として現れている。

これらの過程で、生徒たちに大きく影響を与えたのは、学校をより良いものにしようという変化を起こす教員の姿であった。「北海道における教員育成指標」にも、教師の学びが子供の学びのロールモデルとなることが重要と明記されている。教員の成長なくして、生徒の成長はあり得ないことを強く感じさせられた。

「リーダーの器以上に組織は成長しない」と言われるように、教職員のロールモデルである管理職の資質能力向上が、これからの学校運営の鍵を握っていると言っても過言ではない。「令和の日本型学校教育」においても、学校教育を取り巻く社会の変化を前向きに受け止め、継続的に新しい知識・技能を学び続けていく姿勢が求められている。

我々管理職自身がこの姿勢を忘れず、より良い学校づくりのために主体的に行動し、責任をもって学校変革を実現していく力、すなわち「エージェンシー」を発揮することこそが、令和の時代に求められる学校づくりには不可欠だと考えている。



体を通して未来を育む

「教育の総合力で子供を支える学校づくり」

浜中町・茶内中 宇野正幸

一 はじめに

浜中町は、北海道東部・釧路管内の太平洋沿岸に位置する、人口約五、二〇〇人の町である。面積は約四二㎏におよび、湿原・草原・漁港など多彩な自然環境と美しい海岸線に恵まれ、四季を通じて雄大な北海道の自然を実感できる地域である。

また、『ルパン三世』の作者モンキー・パンチ氏の出身地としても知られ、町内には作品にちなんだモニュメントやイベントが展開されている。さらに、世界的に知られる霧多布湿原は、ラムサール条約に登録された国内有数の湿原であり、多様な動植物の宝庫として自然保護と観光の両面で重要な役割を担っている。

産業の基盤は漁業と酪農で、昆布・ウニ・サケなどの海産物は全国的にも高い評価を受けている。広大な牧草地を活かした酪農も盛んで、とりわけ浜中の牛乳や乳製品は、安全・安心・高品質で知られ、ハーゲンダッツの原料としても使われるなど、地域ブランドとして親しまれている。

二 本校の様子

本校の教育は「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の知・徳・体のバランスの取れた育成を目指し推進することを目標としている。その上で「夢や希望の実現を目指し、向上心をもって学び続け、心豊かで主体的に行動できる生徒の育成」を学校課題として掲げ、地域と連携し、キャリア教育、道徳教育等、様々な教育活動を通して、その具現化に取り組んでいる。

また、生徒の自主的な活動意欲は部活動にも表れている。運動部（地域展開活動を含む）の加入率は七二％に達し、文化系部活動を含めると九六％と非常に高い。多くの生徒が自らの力を高め、新たな挑戦に取り組み姿勢を示しており、その意欲の高さは本校の特色の一つである。

三 本校の取組から

○ 体育授業改善と非認知能力の育成

本校では、体育の授業を「できた」「分かった」「伝えられた」といった達成感を得られる学びの場へと改善している。従来の技能習得にとどまらず、生徒が自らの成長を実

感できるように、振り返りと課題記入を取り入れ、現在地と次の目標を可視化している。こうしたサイクルが成功体験を生み出し、学習意欲の向上につながっている。

また、体育は身体を動かすだけでなく、協調性や自己制御、挑戦する力といった非認知能力を育む重要な機会でもある。団体競技では、作戦や練習方法を生徒自身に考えさせることで、意見交換を通じた協調性や、緊張の中での判断力、新しい技に挑戦する意欲が自然に養われている。これらの力は、将来の社会生活や人間関係を築く基盤となるものである。

さらに、振り返り活動を通じた「学びの見える化」にも力を入れている。授業の最後に「今日できたこと」「仲間の良さ」「次に挑戦したいこと」をロイロノートに書き出し、仲間と共有することで、自己評価と相互評価の両面から学びを深めている。例えば、短距離走の単元では「速く走るためには前傾姿勢をもっと意識するべきだと感じた」「仲間のアドバイスで気付くことがたくさんあった。見てもらうことの大切さを学んだ」といった具体的な記述が見られ、技能面と非認知能力

の両面での成長が確認できる。

このように、体育授業を「実感を伴う学び」へと転換し、非認知能力の育成を明確な柱として位置付けることは、生徒の主体的な学びと豊かな人間性の育成につながる。今後も授業改善を重ねながら、体育を通して「生きる力」を総合的に培っていきたい。



○部活動の意義とその再構築

働き方改革の中で部活動の見直しが進む一方で、教育的意義を損なわない再構築が求められている。部活動は、協働性や粘り強さ、自己肯定感など、生徒の心と体を育てる重要な教育の場であり、学習指導要領が掲げる資質・能力の育成にもつながっている。たとえば、本校の運動部では、入部時などの場面で、生徒が部活動の意義や達成目標、その実現に向けて必要なことを話し合い、自ら決定する機会を設けている。こうした取組により、主体性や協働的な問題解決力の向上が見

られる。



また、文化部において、作品の出品や展覧会に向けた計画的な活動を通して、生徒の責任感や創造性が育まれている。持続可能な部活動運営には、「地域とともにある部活動」への移行が不可欠である。

外部指導者や地域クラブとの連携は、教員の負担軽減だけでなく、生徒にとっても専門的な指導を受けたり、地域社会とつながったりする貴重な機会となる。本校でも、地域展開型の部活動が一部で始動しており、専門的な支援を受けながら、生徒の意欲や技能の向上といった成果が見られている。このように、部活動は依然として生徒にとって重要な教育の場であり、その運営は社会全体で支える仕組みへと移行していくことが求められる。今後も、教育的な意義と持続可能な運営との調和を意識しながら、教職員・地域・保護者と協力し、生徒の成長を支える部活動の在り方を丁寧に見直していきたい。

○性の学習を通じた「体を大切に育てる教育」

養護教諭と町の保健師が連携し、「思春期の心と体」「恋する心よりよい人間関係を築くには」「生命の誕生く命の始まりから出

産まで」などをテーマに授業を実施している。授業前にアンケートを行い、生徒の実態や関心を把握した上で内容を構成している。



授業では、科学的に正しい知識の提供と、グループ対話を通して「相手の気持ちを考える」「自分を大切にする」意識を育てている。振り返りでは、「これから大切にしたいこと」を記入させ、教師が個別にフィードバックを行う。例えば「嫌なことは嫌と言える勇気をもちたい」「友達の気持ちを考える行動したい」といった生徒の声から、自他の尊重へと学びが深まっていることがうかがえる。性の学習は一回限りではなく、学年に応じて継続的・系統的に行うことが重要である。中学校段階では、性の多様性やジェンダー平等、インターネット上の性情報の扱いなど、社会的な課題も含めて考える力を育てている。こうした学びは、「体を守る」ことから始まり、「命を大切にできる態度」や「自他を尊重する姿勢」へとつながっていく。養

護教諭や保健師などとの協働によって、生徒は安心して学び、自らの人生を主体的に歩む力を育んでいる。

○食育指導と生活リズムの改善

本校では、食育と生活リズムの改善を一体的に捉え、学校と家庭が連携して取組を進めており、学年ごとに「受験期の新生活(三年)」「成長期の食事(二年)」「清涼飲料水との付き合い方(一年)」などのテーマを設定し、自分の食生活を見つめ直し、望ましい食事や生活習慣を理解して自ら管理・判断する力の育成を目指している。食育の授業は栄養教諭が中心となって実施しており、「朝食が脳や体に与える影響」や「栄養バランスの整った食事」などを具体的なデータや身近な事例をもとに学習し、給食の時間には、栄養教諭や養護教諭によるミニ指導を取り入れ、「食べること」自分の体を大切にする」と実感できるよう、日常の中で意識付け



を図っている。加えて、本校では年三回「生活リズムチェックシート」を全学年で実施している。シートには「就寝時刻」「朝食の有無」「スマートフォン使用時間」などを記録し、自分の生活習慣を振り返る仕組みを設けている。これをもとに担任や養護教諭が個別に声掛けを行い、生徒が自ら改善目標を立てられるよう支援している。ある生徒は「就寝が遅かったので、二時までに寝るようにした」と改善点を記録し、実際にその後のシートでは「授業中の集中力が上がった」と振り返っていた。このように、自己点検と意識付けを繰り返すことで、生徒が主体的に生活を整えていく力を育成している。食育指導と生活リズム改善は、学校単独では完結しない。家庭との協力が不可欠であり、学校だよりや懇談会、PTA活動を通じて保護者への情報発信も強化している。生徒・学校・家庭が一体となった取組を継続することこそが、子供たちの健全な成長と学力向上を支える基盤になると考えている。

四 おわりに

「体」から広がる、学びと成長の力

「体」を通じた学びは、学力や心の成長の土台となる。体育授業の改善によって「できた・分かった・伝えられた」という達成感が得られ、子供たちの自己肯定感が育まれる。部活動や学校行事では、協働性や継続力といった非認知能力が高まり、社会で生きる力につながっていく。そして、性の学習、食育、生活リズムの改善も、「体を大切にす

る」意識を育み、学習や人間関係に良い影響を与える。これらの取組は一見別々に見えても、「子供の健やかな成長」という共通の目標に向かっている。

今後も、教職員・保護者・地域が連携しながら、「体」を切り口にした実践を積み重ね、子供たちが自らの可能性を広げられるよう、学校力の向上をめざしていきたい。

今年 の道 の中

第六六回 北海道中学校長会研究大会 胆振・室蘭大会を終えて

札幌市・中島中 桑原 俊 二

(研修部長)

一 はじめに

第六六回北海道中学校長会胆振・室蘭大会は、大会主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の作り手を育てる中学校教育」いぶり五大遺産・鉄のまち室蘭より 子供たち一人一人の可能性を引き出す学校経営の推進」を掲げ、九月二十六日から二十七日の二日間、盛大に開催された。今年度からの二か年継続研究の初年度として、十勝・帯広大会の成果も踏まえながら、堅実に研さんを積むことができた大会であった。

開会式で、山田誠一会長は「令和の日本型学校教育にそぐわない大人の都合が強く反映された学校文化・校風が少しでもあったとしたら、それを『子供中心へ』と変化させることができる責任者は私たち校長しかない。子供たちの健やかな成長を願う心と哲学を備えもつ必要がある」と挨拶された。また、熊谷誠大会実行委員長からは、大会開催にあたっての熱い願い、参加者への歓迎と関係各位への謝意、そして大会成功を期する御挨拶があった。

二 全日中会長情勢報告

全日本中学校長会会長青海正氏からは、「次期学習指導要領の方向性」「部活動地域展開」「柔軟な教育課程編成の促進について」「全日本中学校長会の目的と使命」という四つの内容を中心に、教育情勢について説明をいただいた。

三 分科会

午後からは、五つの分科会に分かれ、各研究主題のもと提言が行われ、研究の視点に基づき熱心な協議が行われた。

【第一分科会】「カリキュラム・マネジメント」の推進

◎研究の視点 教育課程の実施状況を評価してその改善を図る検証改善

善PDCAサイクルの充実

1 育成すべき資質・能力を明確にし、小中連携を意識した検証改善
サイクルの確立を推進

2 管理職のリーダーシップの下で展開される教育活動の検証と改善の充実

◎提言者 千歳市立勇舞中学校 松橋 辰吾 校長

石狩管内では、カリキュラム・マネジメントについて、校長の取組と学校の変容の実践発表、会員相互の研究協議を行い、それぞれの市町村や学校の状況に応じた学校経営のための、職能の向上を図る活動を継続している。管内全小中学校が実施した「授業改革の推進（評価指標）」等アンケート調査も用いながら研究実践が発表された。

【第二分科会】新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実

◎研究の視点 地域に根ざした特色ある教育活動の推進

1 全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実

2 教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の工夫

◎提言者 苫小牧市立凌雲中学校 細部 善友 校長

苫小牧市内の小中学校校長が「チーム胆振」として「共通取組事項」や「共通取組場面」「学びに向かう力を高める取組」を進め、管内各学校の学力を向上させることを目指した研究の実践発表を行った。

【第三分科会】豊かな心と健やかな体を育む教育の充実

◎研究の視点 自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

1 いじめ問題、命を大切にす指導及び不登校生徒への組織的な支援の在り方

2 家庭や地域及び関係機関、専門スタッフ等との連携・協力を密にした生徒指導の推進

◎提言者 釧路市立共栄中学校 鈴木 穰 校長
いじめ問題や不登校などの教育課題を解決し、教育の質を向上させていくことを目指し、学校・家庭・地域相互や小学校・中学校の連携を核とした地域間での幅広い連携により、子供を育てる取組を実践していくために、「小・中ジョイントプロジェクト」に基づいた、義務教育九年間を見通した連続性のある学びと指導を目指す実践が発表された。

【第四分科会】「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

◎研究の視点 教職員としての豊かな人間性や指導力の向上

- 1 教職員のキャリアステージに応じた人材育成を図るため、校長としてどう関わるべきか
- 2 教育課題等に対応する専門性を育成するために、校長としてどのようにリーダーシップを発揮するべきか

◎提言者 八雲町立野田生中学校 植田 資世 校長
未配置教員や教員を目指す人の減少の深刻化など、「令和の日本型教育」を担う教員（人材）育成について、実態把握のためのアンケートなどをもとに、それぞれの教員のキャリアステージに応じた研修を行うなどの実践について発表された。

【第五分科会】学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き

方改革」の実現

◎研究の視点

- 1 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方
- 2 チームとしての学校と地域連携・協働体制の在り方
- 3 専門スタッフ等との連携による教員の働き方改革の実現

◎提言者 旭川市立広陵中学校 坂田 幸親 校長
「チーム学校」と「働き方改革」の両輪を着実に前進させるため、多様な知識・経験をもつ人材と連携しながら、社会のニーズに応える、柔軟で持続可能な学校経営を目指す新たなマネジメントを目指して、各校が実践を行い、それらを定期的に交流することで得た内容が発表された。

四 全日中提案説明

第七六回全日本中学校長会研究協議会香川大会において、全体協議会第二研究協議題「自治的な活動を柱とした人間尊重の教育」において提案される内容と、第五分科会「一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実」において提案される三人の校長から、提案内容の説明が行われた。

◎提案者1 札幌市立美香保中学校 伊達 峰史 校長

「多様な他者との協働を通して磨く相互承認の態度」

◎提案者2 倶知安町立倶知安中学校 佐々木 淳 校長

「特別活動を要として進めるキャリア教育」

◎提案者3 小樽市立西陵中学校 駒場 秀剛 校長

「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育」

五 記念講演

◎演題 『社会の創り手を育てる中学校教育に

今、必要なこと』そして、期待すること』

変革を成し遂げるリーダーシップ・アントレプレナーシップ
〜夢ある場所に人は集まる〜

◎講師 田辺 孝由樹 氏（パナソニックITS株式会社 代表取締役社長）

これからの教育は、「問題を見付ける」ことに価値がある。まさにアントレプレナーシップをもつ人材が求められるということを、自身の豊富な経験をもとに軽妙な語り口でお話しになり、時間がたつのがあっという間の講演会だった。

六 おわりに

全道各地から三二〇人の会員が参集し、各地域の実践をもち寄り、熱心な研究協議を重ねることができた。主管いただいた胆振管内校長会をはじめ、お力添えをいただいた関係各位に改めて感謝申し上げ、次期開催の道中研函館大会の成功を祈念し、本年度研究大会の報告とする。

自治的な活動を柱とした人間尊重の教育 ～多様な他者との

協働を通して磨く相互承認の感度～

札幌市・美香保中 伊達峰史

I はじめに

五七。この数字は、令和三年度に札幌市教育委員会（以下「市教委」という）から札幌市中学校長会（以下「校長会」という）事務局に送信された情報提供メールの回数である。コロナ禍ということもあり、月に四、五回のペースで情報提供があったことになる（令和四、五年度はそれぞれ三〇通）。このメールは、校長会事務局がその内容を確認し、その上で全ての校長に展開している。その内容は、教育課題に対する札幌市としての方針や、様々な案件に関わる背景・進捗など多岐に亘る。メールは市教委から校長会への一方通行ではなく、校長会事務局がその内容について各校長の意見を集約して市教委と調整を図ったり、各校長から指導主事に直接、意見具申・相談したりするなど、校長会と市教委が連携・協働を図っていく手だての一つとなっている。

学校も市教委も子供の学びや成長を支える教育現場である。子供を真ん中として、校長会と市教委は良好な関係を築いている。教育がもつ力、子供の力を信じ、学校教育と教育行政が一体となつてこそ、学校を社会の変革力にしていくことができる。

II 地域の状況

毎年度実施している札幌市全体の共通指標「学習などについてのアンケート」（以下「共通指標」という）の結果では、「自己承認」に関する項目に肯定的な回答をしているさつぽろっ子の割合が、「他者への承認」「他者からの承認」に関する項目よりも低い傾向が続いている。その改善に向けて、「子供一人一人が、『自分は大切にされている』と実感できる学校づくり」をキャッチフレーズとした次の学校観をどう具現

化していくかが全市共通の課題となっている。

学校は、「みんな違う」を原点として多様性を認め合い、「本物の経験」を通して、「自由」と「共生」を学ぶとともに、責任ある行動をとる力を身に付ける場です。そのような学校において、子供の相互承認の感度は醸成され、学校は、子供一人一人の「自立」を支える場となります。

このことも踏まえ、札幌市立中学校をはじめ、中等教育学校、北海道教育大学附属札幌中学校、北翔支援学校、義務教育学校、公立夜間中学校の一〇〇人の校長で構成されている校長会では、令和五年度から共同研究基本主題「新たな価値を見出し、持続可能な社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ、七つの部において調査・分析に努めている。

特に、指導部では、「生徒の主體的な課題解決を支援し、適切な自己決定の場を提供することで、自己肯定感、および自己指導能力を育んでいく指導の在り方・充実・深化」というテーマの下、指導部内二校において、生徒・教師・校長を対象としたアンケート調査を実施し、分析を行っている。

令和六年度は、二年間の調査・分析のまとめとして、「①生徒や教職員に自治的な活動についての校長の思いを伝え、その意味付け・価値付けを行うこと、②当事者意識が芽生える環境づくりを行い、校長が主体的な課題解決を全面的に支援すること、③生徒や教職員に委ね、信頼することが重要である」と校長会全体で共有した。

III 実践の概要

校長会と市教委の良好な関係性を大切にしながら、札幌市ではここ数年間で段階的に札幌市学校教育の在り方について整理を重ねてきた。そして、令和六年度から、「総論図」を全ての学校において共有し、これに基づく教育活動を推進している。「総論図」は、札幌市学校教育の大意をさつぽろっ子に育みたい資質・能力「学ぶ力（自ら課題を見付け、

自ら学び、自ら問題を解決する資質・能力」をベースに構造化したものである。各学校の実践のバックボーンとなる「総論図」について、研究協議題に関わる部分は次のとおりである。



〈総論図〉

1 人間尊重の教育

学校教育における子供の学びや成長は、学校が子供一人一人にとって、「自分が大切にされている」と実感できる場であることによって保障されるもの、という原点に立ち返り、令和四年度から、「人間尊重の教育」を札幌市学校教育の『基盤』と位置付け、相互承認の感度を高める教育活動を推進している。「自己承認」「他者への承認」「他者からの承認」から成り立つ相互承認の感度は、「学ぶ力」の基盤であり、子供一人一人の主体性を大切にしながら学びの中で、協働を通して磨かれていくものとしている。

2 さっぽろっ子自治的な活動

人間尊重の教育を具現化していく一つの手だてとして、本市として力を入れているのが、自治的な活動の推進である。令和四年度は、子供の手によって全市共通の子供の合言葉となるさっぽろっ子宣言「プラスのまほう」を策定した。※Positive、Love、Unique、Smileの頭文字をとって、「プラス」となる。

そして、令和六年九月には、さっぽろっ子宣言の実現に向けて、全市立中学校の代表生徒約二〇〇人が初めて一堂に会し、「第一回さっぽろっ子サミット」を開催した。開催に向けては、中学校四校の生徒会役員からなる子供運営委員会（以下「子供運営委員会」という）が、全ての小中学校の子供から集めた意見を基に、「みんなの笑顔があふれる楽しい学校へ」わたしたちにできること」というテーマを決めるなど、企画・運営の全てを行った。サミットに参加した代表生徒は、事前にパートナー校の小学生と対話の場をもち、その内容を踏まえてグループ協議に臨んだ。

3 札幌らしいコミュニケーション・スクール

IV 実践の具体

1 A校の実践

本市では、令和六年度から令和十年度にかけて準備が整った学校から順次コミュニケーション・スクール（以下「CS」という）を導入することになっている。「小中一貫した教育」と連動した仕組みとし、中学校区ごとの基本単位であるパートナー校において一つの学校運営協議会を設置する。

校長会では、さっぽろっ子自治的な活動と学校運営協議会をつなげ、「子供の声」を学校運営に反映させていくことで、CSを「子供と社会をつなげる仕組み」として育てていきたいと考えている。

(1) 校長のアプローチ

A校の校長は、教職員が当事者意識をもって学校づくりに参画していけるよう、問題意識の共有を組織マネジメントにおける肝としている。そこで、期首面談を丁寧に行い、教職員一人一人の教育活動に関わる問題意識をキャッチするところから着手した。そして、それぞれの問題意識をカテゴリー化して校内研修会で提示するとともに、学校として着目する資質・能力の明確化を促した。

そこから教職員は、「生徒を本当に社会につなげているか」「生徒の成長の機会を奪っていないか」という共通の問題意識を見だし、それらを踏まえた議論を積み重ね、着目する資質・能力を、『粘り強く挑む力』『心をつなぐコミュニケーション力』に決めた。

こうしてA校では、相互承認の感度を醸成していくことはもとより、この二つの資質・能力を育成していくことも目的として、そのことを生徒とも共有しながら、自治的な活動の推進を図っている。

(2) 自治的な活動推進校として

A校は令和六年度、市教委の「人間尊重の教育」推進事業における自治的な活動推進校（以下「推進校」という。）

に指定された。全市の取組に携わる経験は、生徒にとっても教職員にとっても、自治的な活動の充実を図る上での起爆剤になると考え、推進校に応募してはどうかと校長が教頭に相談したのが始まりである。生徒会役員の生徒は、子供運営委員会のメンバーとして、「さつぽろっ子サミット」の企画・運営に関わることになるため、過度な負担をかけることにならないかという教職員の声もあつたが、結果として、「生徒のためになるなら、やってみよう」という意思統一が図られた。これは、推進校に応募することの目的等を伝える一方で、教職員間の合意形成については、教頭・主幹教諭・生徒会担当教師に委ねた結果である。

(3) 社会につながる自治的な活動

A 中学校区では、令和七年度からCSを導入する。A 中学校区のCSの特長を、「子供の『ほしい』を支える」「子供の声を聴いて、子供と一緒に考える」「子供の本物の経験を後押しする」「『子供にとって』を考える」「熟議を重ねる」「プロセスの共有を重視する」「子供の自治的な活動をA 中学校区応援団につなげる」の七つに整理している。加えて、専門的な知識、技能をもっている方、または子供の学びや成長を支えたいという家庭や地域の方に任意で登録いただき、学校の要請に応じて子供の自治的な活動等を支援していただく組織「A 中学校区応援団（仮称）」を設置することも、特長の一つと言える。

そのようなCSの導入を見据えて、十月初旬に、第一回「A 中学校区サミット」を開催した。パートナー校の代表児童生徒、保護者や地域住民が参加した。「さつぽろっ子サミット」に携わった生徒会役員の生徒が、その経験を通して学んだことなどを報告した後、児童生徒と大人混合のグループに分かれて意見交流を行った。A 中学校区の子供たちに関わる大人が、「子供の声を聴き、一緒に考える」という貴重な機会となった。こうしたCSの枠組みづくりについては、パートナー校の管理職・実務担当教

諭がプロジェクトチームとなり、教職員の理解と協力を得ながら、軌を一にして進めている。

2 B校の実践

(1) 校長のアプローチ

B 校の校長は、いわゆる「新たな価値の創造」を、「既存の教育活動を関連付けて骨太にすること」と捉え、そうした視点からの働き掛けを粘り強く行うことで、変革に抵抗感を示す教職員の意識改革に努めている。「走り出してみる」「走りながら考える」というスモールステップの積み重ねにより、「前向きに、少しずつ行けるだけ進んでいきましょう」という校長の思いが、職員にも生徒にも浸透し始めている。

(2) 自治的な活動の充実

B 校では、「さつぽろっ子サミット」に三人の生徒会役員が参加した。他校とのグループ協議を通して、人と人がつながることの大切さを改めて実感した生徒は、その視点から自校の取組をより骨太にできないかと考えた。そこで、このことを自校にもち帰り、生徒会役員で対話を重ねた結果、これまで行ってきた挨拶運動と地域のゴミ拾いボランティアを組み合わせることにした。

異学年交流が深まっただけでなく、地域の方との交流が広がったことに手応えを感じた生徒は、さつぽろっ子宣言「プラスのまほう」のSloganに資する取組として、今後も充実を図っていききたいと意気込んでいる。

V 成果と課題

1 成果

(1) 「さつぽろっ子サミット」での熱い思い

サミットでは、有志の市立高校生約四〇人が「高校生アドバイザー」として、各グループの協議をファシリテートした。最後の全体講評で高校生の代表が、「学校に戻って、このサミットの内

容を全校生徒や小学生に伝え、今後の取組に生かすことはもちろん、この温度感を共有してほしい」と参加者に伝えた。

サミットをきっかけとして、自分たちの思いや願いを自らの手で実現していこうとする意欲や、リーダーとしての自覚や責任感を高めた各中学校の代表生徒は、この熱い思いをもち帰り、自信をもって自校の生徒会活動に取り組んでいる。

(2) 子供の手による横展開

子ども運営委員会からの提案により、さっぽろっ子自治的な活動に係る情報を共有するために、全市Classroomが立ち上がり、各校の実践報告を児童生徒間で共有し合っている。令和六年度は、一六〇件にも及ぶ実践事例が挙げられている。

(3) 人間尊重の教育フォーラム

令和六年十二月末に、市教委主催の人間尊重の教育フォーラムが開催された。この場で、子ども運営委員会の代表が四〇〇人以上の市立学校管理職・教員に向けて、自治的な活動に関わるプレゼンテーションを行った。A校の生徒が次のように話している。「推進校としての経験を通して、自分の意見を伝えること、視点を『みんな』に向けての大切さを学びました。『みんな』とは、誰一人取り残さないという意味です。『みんな』が楽しめる学校づくりをしていきたいです。先生たちも力を貸してください」と。

このように、例年開催されている人間尊重の教育フォーラムは、子供の声を聴く場として成長している。子供の思いや願いに心を揺さぶられない管理職・教員はいない。

(4) さっぽろっ子の意識

共通指標の結果から、相互承認の感度に関する子供の意識が徐々に高まっていることが分かる。さらに、自分の声を届けるということについても、意識の高まりが見られる。

2 課題

自治的な活動を推進し、コミュニティ・スクールを育てるために

は、小中学校における教職員の連携・協働が不可欠であると、A、B校の校長共に改めて痛感している。小中一貫した教育において、教職員の連携・協働を図るための時間・空間・仲間をどうやって生み出していくか、これは全市的な課題と言える。

Ⅵ 終わりに

人間尊重の教育を、単に断片的な実践に留めるのではなく、自治的な活動、コミュニティ・スクール、小中一貫した教育、さっぽろっ子サミットといった施策を深く関連付け、有機的に結び付けた統合的な実践として展開し、そうした実践を二百万都市札幌の市立小中学校約三〇〇校全てで、まさに軌を一にして取り組んでいることに、誇りをもっている。

札幌市中学校長会では、自治的な活動を柱とした人間尊重の教育は、まさしく生徒指導提要有にある「発達支持的生徒指導」の側面をもっており、いじめ・不登校・少年非行・多様な背景をもつ児童生徒への指導等、様々な教育課題の解決に向けた礎になるものと認識している。

社会の変化に伴い、子供たちが抱える困難や課題が多様化している。そして、それらの多様化に伴い、その対応もまた多様化している。だからこそ、引き続き、「子供の声を聴く」を全ての教育活動を貫く重点として学校経営を進めていくとともに、校長会・市教委間、校長会や校内などにおける対話を大切にしながら、「多様なレンズによる集合知の構築」をオール札幌で図っていきたい。

札幌市全体の共通指標「学習などについてのアンケート」のさっぽろっ子の結果

安全校生徒を対象として実施し、中2のデータを掲載	R4年度	R5年度	R6年度
自分にはよいところがある。	75.8%	78.8%	82.0%
人のよいところを見付けようとしている。	90.2%	88.8%	90.4%
自分が必要とされていると感じている。	61.1%	63.0%	68.4%
人の役に立ててうれいと感じることがある。	91.0%	92.0%	93.3%
人の役に立つ人間になりたいと思う。	91.2%	92.3%	93.3%
自分が思っていることや感じていることを人に伝えている。	72.5%	73.8%	76.3%
自分の意見を進んで発言しようとしている。	48.4%	51.1%	58.4%

一人一人の社会的・職業的自立に向けた

キャリア教育の構築に向けて

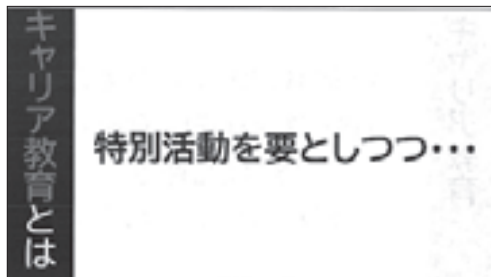
特別活動を要として進めるキャリア教育

倶知安町・倶知安中 佐々木 淳

I はじめに

学校は社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることを目的として、キャリア教育の推進・充実が求められている。主体的な学びにつながる「見通しを立て、振り返る」活動の方策として「特別活動を中核としつつ、『キャリア・パスポート』などを活用して子供たちが自己評価を行うことを位置付けること」（二〇一六年中央教育審議会答申）とある。さらには、キャリア教育は全ての教育活動をを通して推進されることから、校長は、全職員に対してその教育的意義や教育課程における位置付けについて明示し、校内推進体制の整備にあたることが肝要である。各教科等の内容においても、キャリア教育に関する資質・能力を培うことを意識し、自らのキャリアやこれからの学び、生き方の見通し、これまでの活動の振り返りなど、教育活動全体の取組をキャリア教育に結び付けることが重要となる。また、生涯にわたって自分の良さを活かすという自己実現を目指す指導を充実させることを図る上で、キャリア・パスポートの工夫・改善も必要とされている。

このことから、後志小中学校長会では、各学校における学校経営方針等へのキャリア教育への位置付けについて再確認を図るとともに、改めてキャリア教育における総合的な学習の時間と特別活動の関連につい



て、教職員への意識改革や教育課程改善等の課題に取り組んできた。

II 地域、学校の状況

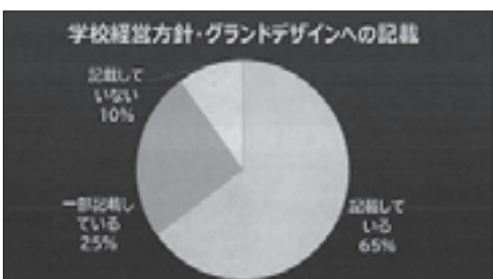
後志管内は札幌市の西側に位置しており、小樽市を含む二〇市町村で構成されている。全体では人口減が続いているが、ウインターリゾート地を抱える赤井川村・ニセコ町をはじめ六町村においては前年度に比べて人口増加が見られる。特に外国人人口は二年連続で増加しており、管内人口に占める割合は三・二八%となっており、地域経済の担い手として存在感を増している。

後志小中学校長会は、小樽市を除く一九町村の小中学校長で構成しており、中学校は二四校ある。うち一校は一学年四学級の中規模校、その他は一学年二学級以下の小規模校となっている。中学校でも複式校や教頭未配置校がある。それゆえ、各校では少ない教職員で校務を担っており、校長会としても他校との連携や教科研究会の充実等、職員研修の工夫を行っている。また、今後二〜三年で義務教育学校の設置も増加の見通しであり、キャリア教育のあり方や教育課程編成についても校長会全体で情報共有を図りながら進めていく必要がある。

III 実践の概要

1 後志小中学校長会の研究

令和五年度より研究主題「組織力を高め、人を育てる学校経営」と定め、小中学校全体で管内を四つのグループに分け、共同研究している。全国や北海道の各校長会の研究課題へは、小中学校別々のプロジェクト委員会を設置し、管内研究とは分けて調査研究している。このような研究スタイルは、後志地区の校長会を縦と横につなげている。

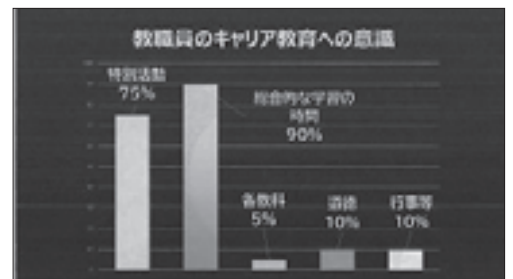


2 実態調査

(1) 令和五年度（研究当初）の実態

これまで「キャリア教育」というテーマを中心に研究してこなかったため、各校では「キャリア教育」を、経営方針の中でどのように捉え、職員への参画意識を高めているか、現状を把握するために調査した。

- ・学校経営方針での「キャリア教育」の記載については、①記載している六五%、②一部記載している二五%、③記載していない一〇%であった。



- ・記載されている「キャリア教育」の内容は、①特別活動一六%、②総合的な学習の時間六八%、③キャリア・パスポート五%、④教育課程の見直し一〇%であった。

- ・教職員の「キャリア教育」への意識（複数回答）については、①特別活動七五%、②総合的な学習の時間九〇%、③各教科五%、④道徳一〇%、⑤行事等一〇%であった。

ここで、学習指導要領の総則では、「キャリア教育」は「特別活動を要として」と書かれているが、特別活動の割合が低いのは、キャリア・パスポートの記載等が位置付けられていたり、地区内の研修会等において教育活動全般で行われているという理解が進んでいるためと思われる。

また『キャリア教育Ⅱ総合的な学習の時間（職場体験等の職業学習）』という意識も高く、後志地区が抱える課題があるとおさえ、「キャリア教育」の改善に向けて生徒や地域、職員への取組を共有した。

(2) 令和六年度の学校経営の振り返り

管内調査（令和五年十二月、令和六年七月）を実施し、各校長の課題意識の変容を捉えようと試みた。特に二回目の調査において、次年度経営方針の準備として教育課程の編成（総合的な学習の時間の見直しなど）にとりかかる学校の増加が見られる。

また、校長のリーダーシップを意識したこととして、次のことが挙げられている。

- ① 生徒にとって
 - ・生徒のニーズ把握とマッチング
 - ・個々の自己理解につなげる
- ② 地域にとって
 - ・首長や関係機関との連携
 - ・町内の検討委員会

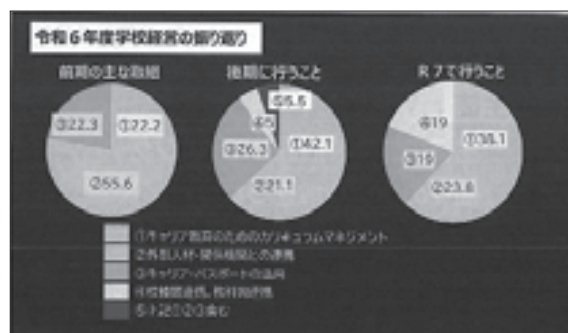
- ③ 職員にとって
 - ・新しいものに変えていく意識
 - ・特別活動の目標を外部人材と確認
 - ・職員にとつて

- ・実施可能な内容の絞り込み
- ・丁寧な説明と調整
- ・教育課程の位置づけを明確化
- ・外部人材活用の啓発
- ・担当者の意識改革

3 実践例

A校では、「見通しを立て、振り返る」活動としての特別活動と、「探求的な学び」である総合的な学習の時間の区別と関連を教職員が認識できるよう、まずは教育課程における総合的な学習の時間を見直した。取組そのものとしては、発達の段階を考慮しながら三年間で探求的な学習に深化できるよう計画・実施した。

一学年では「地元ではたらく大人に触れる」活動を主に言い、

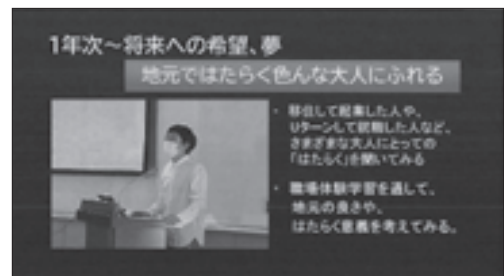


将来の希望や夢をもたせることを目標にした。また、大人にふれる学習を通じて、自分自身について改めて考え、自分の在り方や未来について考える取組とした。

二学年では、町に移住した起業家等の外部人材を活用して「起業体験」を行った。学級で仮想会社を起業し、企業理念や社訓、事業内容、役職と役割分担を子供たちが考え、実際に町内企業に営業に行き、期限内に計画どおり事業を進めることで、仲間と協働して課題を乗り越える楽しさを体感することができた。

三学年では、「持続可能なまちづくり活動」をそれぞれが提案し、実際に町内企業とタイアップして「空き家問題を解決するリノベーション活動」や「町の図書館を充実させるためのフリーマーケット」等の事業を展開し、課題発見から解決に向かうことで達成感を味わうことができた。この取組を通して、町の諸問題を自分事として捉え、自分の得意なことややりたいことを更に磨きたいという意見が上がった。また、キャリア・パスポートの記載も体験に基づいた自分の生き方について記入する生徒が増え、質問紙調査「人の役に立ちたい」の項目に対する肯定的な回答が際立って高い結果となった。

教育課程における総合的な学習の時間の位置付けを見直し、教職員が主体となってキャリア教育の内容を精選することにより、特

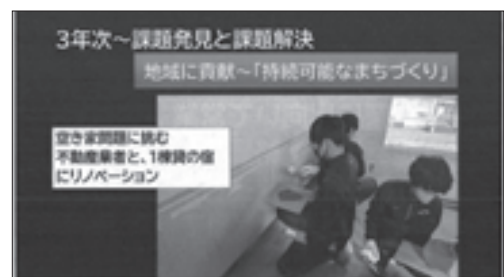
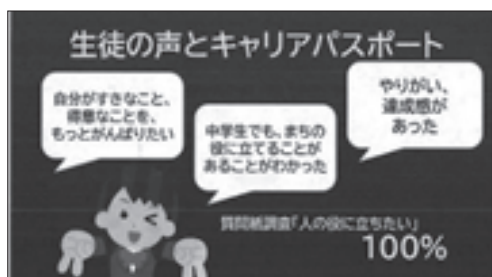


別活動との区別や関連を図り、キャリア教育は「特別活動を要としつつ」「教育活動全体を通じ」（学習指導要領解説総則第1章の第4の1の(3)）という意味の理解を深めることにつながった。

また、総合的な学習の時間の内容を編成し直したところ、教務主任を筆頭にキャリア教育は教育課程全体で扱うこと、総合的な学習の時間で探求したこと、それが各教科等と横断的に学習すること、そして何より、そのように各教科や総合的な学習の時間で学んだことは、学級活動を中心にキャリア教育へつながっていくこと、など「キャリア教育＝総合的な学習の時間」だけではないことが浸透した。

B校の学級活動の内容(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」の配当時数は、一学年が二時間、二学年は六時間、三学年は一時間である。この時数の中で学習方法や進学情報の活用などを行っていくが、「キャリア教育」の視点が「学級や学校の生活づくり」や「適応と成長及び健康安全」においても含まれることを位置付け、意識を高めた。

C町では、キャリア・パスポートの導入時に校長会から小中学校の継続性を意識したキャリアノートを、町内教育課程編成を担う教頭会を中心に作成を指示した。キャリア・パスポートを通年で



ポート・フオリオとして特別活動で活用することで、生徒自身がいつでも学びの内容や自身の変容（成長）を意識できるように可視化した。

D校では、多国籍な背景で育つ生徒への対応に向けて、校長が英語科教諭や町内の支援員を中心に、キャリア・パスポートの英語版を作成して使用している。

Ⅳ 成果と課題

1 成果

各校長が経営方針にどのように位置付け、職員と協働するのかを考えることにつながったことから、

以下のことが成果としてあげられる。

- (1) 子供が「仲間と協働して課題を乗り越える楽しさを体験」によって、単に職場体験を行うのではなく課題発見から解決まで取り組んだ達成感を味わうこと、自分の得意なことをやりたいことを磨きたい気持ちや、人の役に立ちたいという意欲をもつことができ、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力を身に付けることができた。
- (2) 職場体験活動のみをもってキャリア教育と捉えるのではなく、特別活動を要としてキャリア教育を教育課程に位置付けようとして改善することができた。
- (3) キャリア・パスポートを、それぞれの地域の実情に応じて、作成や改善、工夫することができた。



2 課題

今後の課題は、以下のように考えている。

- (1) 「キャリア教育」は、一人一人のキャリア発達や個人の自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものであるから、各学校がこの視点に立って教育のあり方を幅広く見直す必要がある。

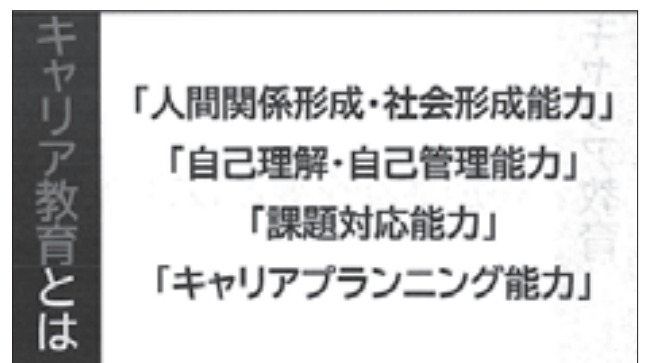
- (2) 「基礎的・汎用的能力」を構成する四つの能力を念頭に、どのような力を身に付けさせたいかを明確にする必要がある。

- (3) キャリア・パスポートについて、小学校や高等学校との接続、生徒のキャリア発達に役立てるため、一層の改善を図る必要がある。

V 終わりに

後志小中学校長会では、各町村単位が小学校と中学校の連携を基盤に、現在課題となる教職員の人材育成と組織的な学校づくりを目指し活動している。義務教育学校の設置も多く計画され、九年間を見通した教育課程編成も喫緊の課題と捉えている。

わが町村の子供たちを大切に育てようとする地域であり、また、外国などの多様な文化の入り混じる地域だからこそ、子供たちに身に付けさせたい資質・能力をしっかり定め、一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育の構築が必要である。



一人一人の社会的・職業的自立に向けた キャリア教育と進路指導の充実 社会的・職業的自立に向けて

必要な基盤となる資質・能力を育成する

系統的なキャリア教育

小樽市・西陵中 駒場 秀剛

I はじめに

今日、社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきた。学校は、新たな時代を生きる子供たちに、学校と社会との接続を意識し、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を身に付け、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしく生きる力を育むことが求められている。

小樽市中学校長会では、生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、キャリア教育を一層充実させていくために、それぞれの学校における実践を交流し合い、その成果や課題を共有することで、自校の系統的なキャリア教育の充実を目指してきた。

II 地域の状況

小樽市は、道内で産出された石炭の積み出し港として港湾が整備されたことにより、商業都市として道内でいち早く栄えた。当時の石蔵や運河など、多くの歴史的建造物が今も残されており、現在は、運河を中心に観光都市として広く知られている。また、令和七年二月には、明治期の発展から高度経済成長期にかけての衰退、観光都市としての復活のストーリーが認められ、『北海道の「心臓」と呼ばれたまち・小樽』として日本遺産に認定されている。

一方で、人口減少により適正配置が進められており、ここ一〇年で市

内の小学校一校、中学校三校が統廃合された。現在、小学校一六校、中学校一校、小中併置校一校となっているが、各学校とも小規模化が進んでおり、市内各中学校の教育課程上の課題や工夫について共有、協議しながら、安定した教育活動の推進に努めている。

III 実践の概要

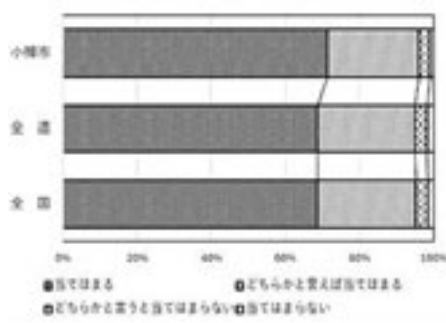
1 研究の概要

令和六年度の全国学力・学習状況調査の「将来の目標を持っている」「一人の役に立つ人間になりたい」の質問において、小樽市は「当てはまる」「どちらかという当てはまる」という肯定的な回答が、全国平均を上回った。これは、これまでの小樽市の中学校がそれぞれに取り組んできたキャリア教育の成果であると考えている。しかし、「将来の夢や目標を持っている」の質問を見ると、およそ三〇%の生徒が否定的・どちらかといえれば否定的な回答をしている。これを受けて、小樽市中学校長会では、よりよいキャリア教育の在り方を目指して改善していくべきと捉えた。

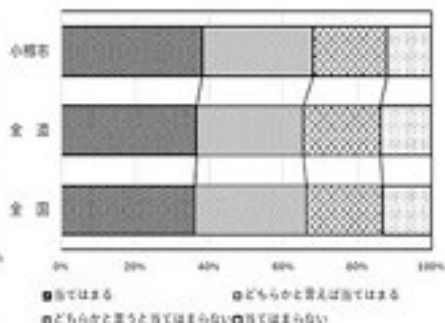
そこで、私たちは「資質・能力を意識した系統的なキャリア教育」

「外部講師を活用した地域の特徴を生かしたキャリア教育」「進路の選択ができる力を養うキャリア教育」の三つの観点を設け、今まで各中学校で実践してきたキャリア教育を分類し、研究を進めてきた。

人の役に立つ人間になりたい



将来の夢や目標をもっている



令和六年度は、研究初年度ということで、各学校で取り組んでいるキャリア教育についてアンケートを取り、各校の実態を捉え、特色ある実践について交流をした。

2 各校の特色ある実践

(1) 単元配列表の作成

A 中学校（生徒二六〇人、学級数一〇）では、「キャリア教育は特別活動を要として、教育活動全体を通じて資質・能力を身に付けなければいけない」ということが、学校全体に理解される必要があると考え、「単元配列表」の作成を行った。

A 中学校では、総合的な学習の時間と各教科等を関連させた単元配列表を作成した。その中で、キャリア教育を通して培いたい「将来の生き方や生活について見通しをもつ力」「情報を整理して自分に合った進路を選択する力」と各教科等で学習する内容を結ぶことで、学級活動だけでは時間的な制限のある活動に厚みをつけた。

関連した資質・能力を見える化したことで、各教科で培う資質・能力まで意識できるようになった。今後は、単元配列表の作成が教職員主体で進めていけるように体制づくりを整えていく。

(2) 大学生を講師とした実践

B 中学校（生徒数一八一人、学級数八）では、「中学生に近い世代との交流から、キャリア教育の形成を図りたい」という願いをもっていた校長が、小樽市内ですでに活動していた札幌学院大学の「町おこし研究会」と連携して、『キャリア支援ふるさと特別授業』を実施している。

札幌学院大学の町おこし研究会は、「地域コミュニティの活性化」を目指すサークルで、高齢者にスマートフォン熟练操作を教える「スマホ教室」、冬に高齢者が歩きやすい道路を確保するために楽しく雪かきを行う「国際スポーツ雪かき選手権」などを企画して、持続的に「地域が地域を支える」コミュニティづくりを行っている。

『キャリア支援ふるさと特別授業』では、サークルの活動内容と「地域の雪問題を解決する取組」について紹介し、その後、「自分たちにできる町おこし」について、中学生と大学生が一緒にワークショップを行っている。

この実践を通して、B 中学校では、年齢の近い大学生が生き生きと活動する姿に、子供たちが将来への期待感を膨らませ、町おこし研究会のイベントに参加する生徒も増えている。その一方で、中学校に対して町おこし研究会の様々な取組への参加要望が多く、取捨選択することが必要となっている。

(3) 地域の教育資源を生かした教育活動

C 中学校（生徒数一六人、学級数四）は、令和四年度から小中併置校となることを機に、当時の校長が、小中一貫教育の絶好の機会と捉え、地域に根ざした校区だからこそできる特色のある取組、地域と学校の双方に利のある取組を目指して、『ふるさとキャリア教育』を企画した。

令和四年度の小中併置校スタートに向けて作られた「グラウンドデザイン」にも、少人数の利点を生かしながら義務教育九年間を通じた教育活動を実践することが明記され、「小中九年間のつながり」「ふるさとキャリア教育」「小中合同行事」などのキーワードが散りばめられている。

『ふるさとキャリア教育』は、漁業、農業、史跡の三つのテーマを三年サイクルとし、小学校と中学校が、同じテーマで探究的に学ぶカリキュラムで。地域の方を講師に招いたり、体験活動を行ったりする中で、地域のことを深く知り、地域の一員として「誇りと愛情」を強くするとともに、小中合同での活動であることから、小学生の中学校へのあこがれと期待が高まるなど、将来への見通しがもてるようになってきている。その一方で、この学校は不登校生徒を積極的に受け入れていることもあり、継続した学びが難しいという課題を抱えている。

(4) キャリア教育を柱とした総合的な学習の時間

D 中学校（生徒数二三八人、学級数一〇）では、授業だけでなく、日常生活や身近な社会との関わりから、自ら課題を設定できることがキャリア教育にとつては重要で、「その中で基礎的・汎用的な能力をはぐくむ必要がある」という理念の下、キャリア教育を特別活動と「総合的な学習の時間」を結び付けて、探究的・横断的な学びとして再構築した。

D 中学校の総合的な学習の時間は、全てがキャリア教育、すなわち、生き方に関わるものとして捉えて「進路選択の探究」「生き方の探究」「自己表現の探究」の三つに分類し、総合的な学習の時間を中心としながらも、特別活動や各教科等との連携を図った実践を行っている。

各教科等で培われた見方・考え方が、総合的な学習の時間の中で汎用的な能力として統合されてきており、現在は、小中九年間を見通した活動を目指し、校区の小学校と連携して各領域の関係を精査している。

3 今年度の取組

今年度は、昨年度共有した情報を基に、各校で導入したり、改善したりしながら検証し、より効果的なキャリア教育を目指して研究を進めてきた。

ここでは、私が勤務する西陵中学校（全校生徒一五〇人、八学級）での取組状況について紹介する。西陵中学校では、単元配列表の作成、手帳を活用した「設計を見直したり、目標を修正したりする能力」をはぐくむ実践、卒業生を講師とした将来を見通した目標をもたせる実践について導入を試みた。

(1) 単元配列表の作成

単元配列表については、本校における認知度が低かったこと、横断的な学習が進んでいないこともあり、まずは少人数の希望者によるミニ研修を実施した。他校の単元配列表を見ながら、そのねらいや作り方について理解を深めるとともに、キャリア教育と

自分の教科のどの単元とを関連付けることができるか交流した。参加した職員からは、「横断的な学習のイメージができた。」「各教科と関連付けることで、時間を有意義に使うことができる。」「など前向きな声が聞かれた。

今後、この輪を広げていきたいと考えている。また、先に紹介したA中学校のように、学級活動の一時分、ごとの目標を分類化するなど、簡単で分かりやすい単元配列表を作成できるように、継続して検討していきたい。

(2) 手帳を活用した「設計を見直したり、目標を修正したりする能力」を育む実践

昨年度の学校評価アンケートにおいて、生徒、保護者、教師共にキャリア教育の基盤となる「計画性」「見通しをもった学び」の項目がアンケート全体の中で低かったことから、今年度から同様の取組をしている学校を参考に「中・高生向けビジネス手帳」を活用することにした。

登校してから朝の会までの一〇分間で行っていた朝読書の時間を半分にし、その前半五分を、ノートや端末に今日の予定や昨日の家庭学習の振り返りを書く時間とし、読書と合わせて「あさかつ」の時間とした。その時間の中で、今日の予定を確認したり、いつまでにやるべきかを計画を立てたり、昨日の家庭学習の反省をしたり、計画づくりや振り返りを行っている。

短い時間であることから、効果に疑問をもつ教員もいたが、前期の学校評価アンケートでは、「計画性」「見通しをもった学び」の項目で改善傾向がみられた。時間は短くとも日常的に取り組むことで、生徒自身が「見通しをもつことができていく」と自覚しており、継続的な取組が効果的であることが分かった。

担任が、生徒へ前向きな言葉掛けをしたり、内容を確認して

R7 年度前期学校評価アンケートの結果
「計画性」「見通しをもった学び」の項目

	令和6年度	令和7年度
生徒	48.1%	60.2%
保護者	50.0%	44.6%
教職員	57.1%	62.5%

対話の切り口にしたりするクラスでは、アンケートの結果が高くなっていることから、学校全体で、効果が上がっているクラスの事例を共有して、生徒の資質の向上につなげていきたい。

(3) 卒業生を講師とした将来を見通した目標をもたせる実践

昨年度、本校の学校運営協議会で「将来を見通して学ぶ力」を生徒に身に付けてほしいという意見が出され、そのための方策として「卒業生や大学生など、中学生に近い年代の話聞く機会を作れないか」検討された。学校運営協議会では、卒業生を活用することが希望された。しかし、実際にカリキュラムの中に組み入れようとする、講師の選定や依頼、高校生や大学生が来校しやすい時期や時間帯、生徒と話しやすい内容、グループセッションを誰が進めるか、など、多くの課題に直面した。

今年度は教育実習に来ていた大学生とのトークセッションを行うことで落ち着いたが、今後、継続する上での課題を、教職員と共有することができた。

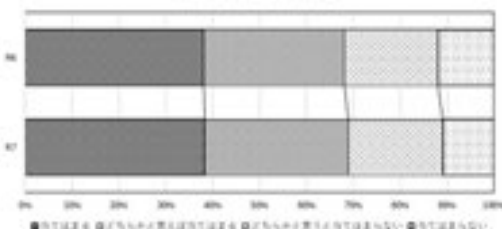
IV 取組・実践の成果と課題

1 成果

残念ながら、「将来の夢や目標をもっている」の項目については、今年度も否定的な回答が三〇%を上回ったが、肯定的な回答の割合が、わずかずつではあるものの改善されてきており、小樽市の中学校の特色ある取組が、「これからの人生をよりよくしたいこう」という生徒の意欲の高まりとして表れはじめている。

昨年度共有した情報を基に、各校で新たなキャリア教育を導入したり、改善したりしながら検証し、より効果的なキャリア教育を目指して研究を進めて

将来の夢や目標をもっている (R6、R7 比較)



きたことは、今後の小樽市中学校のキャリア教育改善に向けて足場を固めることができた。

2 課題

キャリア教育は、特別活動を要として、教育活動全体を通じて行うものであるが、昨年度行ったアンケートでは、キャリア教育を「総合的な学習の時間」を軸として行っている学校が少なからずあり、今後、キャリアパスポートの効果的な活用も含め、特別活動を軸とした取組へ移行していくことが大きな課題である。

そのために、各校の情報を共有し、校長のリーダーシップのもとに、確実なカリキュラムの編成が重要となってくる。

V おわりに

キャリア教育を踏まえて、地域の行事に多くの子供たちが積極的に関わる姿を見かけると、学校教育が子供たち自身の未来だけでなく、地域の未来を担っていることを強く実感する。

変化の激しい社会において、「消費者教育」や「がん教育」など、教科以外にも学校教育に求められる活動が増えてきている中、特別活動の時間が果たす役割は大きい。その一方で、生徒への負担軽減から余剰時間が制限され、特別活動の時間の確保には頭を悩ますところである。このような状況であるからこそ、単元配列表を活用し、教科等横断的に取り組むことで、特別活動に厚みや深みをもたせることが重要となる。

小樽市中学校長会では、今後も子供たち一人一人のキャリア形成と自己実現に向け、小樽市立中学校で実践してきた特徴的な取組から得たものを整理し、単元配列表を活用しながら、特別活動を軸とした教育活動全体でキャリア教育と進路指導において個に応じた指導、援助、相談等が充実するように、力を尽くしていく。

令和七年度の活動及び次年度への展望

事務局長 高橋 正幸

一 はじめに
激動する国際社会において、我が国では、二一世紀にふさわしい、持続可能な社会の仕組みを構築するため、行財政改革、規制緩和、地方分権などの動きが進行している。

教育界では、教育基本法及び教育関連法規の改正、第四期の教育振興基本計画策定など一連の教育改革が行われ、学習指導要領の改訂により、「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められている。また、国が進めるGIGAスクール構想により、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、一人一人の個別最適な学びや、協働的な学びを充実させ、実現するなど、「令和の日本型学校教育」を構築することも求められている。さらに、第四期の教育振興基本計画では、「二〇四〇年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」並びに「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が計画のコンセプトとして位置付けられるなど、部活動の地域展開と併せて、中学校の教育の大きな変革となる取組も始まっている。

本道においては、教育課題の解決と地域

創生の実現に向けた「自立」・「共生」の基本理念を継承し、「子どもの可能性を引き出す教育の推進」「教育の質を高める環境の確立」「持続可能な教育の実現」の施策を柱とした新たな「北海道教育推進計画」が、令和五年度に策定された。

私たち中学校長は、学校教育の課題を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、子供たちの「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を形成する力」を育むとともに、生徒・保護者・地域の信頼と期待に応えるため、「こどももみんな」の考えをもとにした教育活動の推進や多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成など、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮し、学校からの教育改革を推進しなくてはならない。併せて、本来、学校が担うべき業務の明確化・適正化をはじめ、学校の組織運営体制の見直し、教職員の意識改革等により、「学校における働き方改革」の推進も図る必要がある。

また、東日本大震災や北海道胆振東部地震の風化防止に引き続き取り組むとともに、令和六年一月一日に発生した能登半島地震をはじめ、近年、災害等が多発していることから、今後起こりうる災害に対し、能動的に対

応できる生徒を育成するため、防災教育・安全教育の更なる充実を図る必要がある。

以上の認識に立ち、北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性、しなやかさを発揮しながら、会員相互の連携の下、「全日中新教育ビジョン」学校からの教育改革（令和二年五月）」の内容を踏まえ、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」の推進と全道の中学校が抱える教育課題の解決に向けて、全日本中学校長会綱領及び、本会会則及び、次の運営方針並びに活動の重点等に基づき、本会を堅実に運営してきた。

二 活動の経過

(1) 各課要請及び要望活動

各地区が令和六年度に行った各教育局への要望事項及び道教委への要望事項を取りまとめ、「令和七年度北海道文教施策・予算策定に関する要望書（以下、要望書と記載）」に盛り込む内容を検討し、北海道小学校長会・北海道公立学校教頭会（以下、道小、道公教と記載）とともに令和八年度の北海道文教施策・予算策定に向けた「要望書」案を三月末

までに作成した。理事研修会で協議・承認後、五月二十六日、道小・道中・道公教の各代表により、道教委へ手交による提出を行うことができた。その後、道教委より回答を得た。

〔「要望書」の柱〕

- ① 学校経営の一層の充実と教育課程の推進及び教育条件の整備・改善
- ② 教職員の資質の向上を図る研修の促進と内容の充実、強化
- ③ 意欲をもって職務に専念できるように、教職員の地位及び待遇の改善
- ④ 教職員の退職後の生活安定の確保
- ⑤ 国・道の施策としての、関係諸機関

への働き掛け

- (2) 道教委との意見交換会及び各課懇談会「要望書」に対する道教委からの回答をもとに、八月六日一二時三〇分よりホテルポールスター札幌において、意見交換会が会同で開催された。「教育DX」というテーマで、道教委からは中島教育長をはじめ、教育部長、学校教育監、道立教育研究所長、総務政策局長、ICT教育推進局長、指導担当局長、教育指導監（義務）と、運営者として関係課長の計一五人が参加された。道小・道中・道公教からはそれぞれの会長及び役員計四六人が出席した。続いて各課懇談会が、二五時より会場を「第二北海道通信ビル」と「北農健保会館」へ移し、会同で開催された。道教委からは関係課の課長以下一五人、道小・道中・道公教からは会長をはじめ、副会長、地区理事、事務局員等、七三人が出席し、第一～三分科会に分かれて、各地区からの提言や道

教委担当課からの具体的な説明を聞くことができた。

意見交換会では、道小 田邊 芳明 会長が、お礼に加えて、教育DXの推進状況や今後の展望について述べ、その後、① 教科等における一人一台端末の活用状況、② 教師の指導力と児童生徒の情報活用能力、③ 校務DXの三つの内容について、合わせて道小副会長五人、道中副会長三人、道公教会長からの発言があり、それぞれの内容について道教委からの意見や見解をいただき、意見交換を行った。教育DXに関する全道各地の取組状況の交流が図られ、学びの多い有意義な時間となった。また、学校現場における現段階での成果と課題を道教委幹部の皆様に御理解いただける貴重な機会となった。最後に、道中 山田 誠一 会長から、有意義な意見交換ができたことへの感謝の念が述べられた後、中島教育長からの挨拶をいただき閉会した。

続く各課懇談会では、参加者が三分科会に分かれ、それぞれのテーマについて、道小・道中・道公教より提言を行った後、道教委の各担当課の職員から回答をいただいた。学校現場の現状等を道教委の担当の方に直接伝える貴重な機会であり、どの分科会も実り多かつたとの感想が多く寄せられた。今年度も道教委から多くの担当課長に参加していただいたことで、教育行政を推進する上での課題や施策のねらいなどを直に伺うことができ、今後の学校経営に生かすことができる沢山の成果が得られた。

- (3) 第六六回北海道中学校長会研究大会

胆振・室蘭大会の開催

九月二十六日、二十七日、室ガス文化センター、室蘭プリンスホテル、むろらん広域センタービルを会場として、第六六回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会を開催した。

大会研究主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」に基づき、「いぶり五大遺産・鉄のまち室蘭より 子供たち一人一人の可能性を引き出す学校経営の推進」を大会スローガンとして、三二〇人を超える参加者が集まり、昨年度に引き続き会同形式で開催した。

初日の二十六日（金）の開会式では、道中会長の 山田 誠一 大会長、熊谷 誠 大会実行委員長の挨拶に続き、御来賓の北海道知事、北海道教育委員会教育長、室蘭市長、全日本中学校長会会長より御祝辞を頂戴した。開会式の後、全日本中学校長会会長 青海 正氏による教育情勢報告があり、休憩後、札幌市地区による全日中研香川大会の全体協議会提案説明を行った。

【第七六回全日本中学校長会研究協議会 香川大会 全体協議会提案】

札幌市立美香保中学校 伊達 峰史 校長 午後からは、五分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿って研究協議が展開された。各分科会の研究主題と、提案者は次のとおりである。

【第一分科会】「カリキュラム・マネジメント」の推進

千歳市立勇舞中学校 松橋 辰吾 校長
【第二分科会】新たな時代に求められる

資質・能力の育成と学習評価の充実

苫小牧市立凌雲中学校 細部 善友 校長

【第三分科会】豊かな心と健やかな体を育む教育の充実

釧路市立共栄中学校 鈴木 穰 校長

【第四分科会】「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

八雲町立野田生中学校 植田 資生 校長

【第五分科会】学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

旭川市立広陵中学校 坂田 幸親 校長

各分科会ではグループ討議を取り入れ、熱心で深まりのある話し合いが行われた。その後、助言者より今後の学校経営に向けた御助言をいただいた。

二日目の二十七日（土）は、後志地区、小樽地区による全日中研香川大会の分科会提案概要説明を行った。

【第七五回全日本中学校長会研究協議会

香川大会 第五分科会提案概要】

倶知安町立倶知安中学校 佐々木 淳 校長
小樽市立西陵中学校 駒場 秀剛 校長

その後、パナソニックITSS株式会社代表取締役社長 田辺 孝由樹 氏による、演題「社会の創り手を育てる中学校教育に 今、必要なこと」そして、期待

すること「変革を成し遂げるリーダーシップ・アントレプレナーシップ」夢ある場所には集まるの講演があり、参加者にとつて爽りの多い時間となった。

閉会式では、第六七回北海道中学校長会研究大会 函館大会の 白川 卓 大会実行委員長からの挨拶があり、大会の幕を閉じた。今大会が、校長の今後の学

校経営に大きく資するものとなり、次年度大会への道筋をつける大きな成果を得た研究大会となった。

これまで約二年間、熊谷 誠 大会実行委員長を中心に、胆振管内校長会が連携しながら、誠心誠意準備をしてくださったことに心から感謝を申し上げたい。

(4) 地区別教育経営研究会・法制研修会

今年七月二十九日の旭川市地区の開催を皮切りに、十一月七日の空知地区まで順次開催された。今年度も五地区がオンライン開催、一四地区が参集しての開催となった。開催した研修会には、道小・道中事務局より役員や幹事を派遣し、各地区からの質問に回答するほか、各地区で教育局や市町村教育委員会から講師を招いての研修が行われた。また、会員の実践発表や校種別、課題別分科会での研究協議を取り入れるなど、内容が充実してきている。

(5) 道中組織と運営

組織体制・運営に伴う会則及び規約の改正以降、全道六ブロック体制で活動を行っており、事務局の経営・研修・対策・情報の四部の活動においては、石狩・旭川・札幌・空知・胆振の各地区で担っている。

副会長の互選により選出された室蘭市立室蘭西中学校 山田 誠一 校長が、四月九日の第一回理事研修会において、今年度の道中会長として決定し、総会にて承認された。五役においても、事務局次長を札幌・胆振、会計理事を小樽から選出し、「チーム北海道」として事務局の活動を進めている。

三 本年度の反省と次年度への展望

令和七年度の業務推進にあたっては、「こどもまんなかへ 堅実に歩む道中」というキャッチフレーズの下、多くの成果を上げることができた。特に道教委とは様々な日々の交渉はもとより、意見交換会・各課懇談会を新たな形での取組四年目となり、課長職の参加によって内容の濃い話し合いができたことが大きな成果であった。道中研胆振・室蘭大会においては、昨年度に引き続き合同形式での大会開催となり、大会実行委員会が中心となつて、道中事務局・研修部と事前から緻密な連携を図り「オール北海道」による運営で、多くの参加者に満足していただけた大会となった。また、今後に向けて持続可能な研究大会となるように、各地区の声を聴きながら、大会運営の方向性について一歩前進することができたことも成果としてあげられる。

事務局と全道二〇地区との間においては、日頃からできるだけ細やかな情報発信と情報共有に努めており、地教研では直に対話を行つて絆を深めることができた。今後更に、充実した活動に向けて改善を図っていきたいと考えている。

道小との関係においても、年九回の小中事務局合同研修会を通して、様々な情報や意見の交換を行うなど、「こどもまんなか」の考えをもとにした「堅実」な活動となるように努めた。

今後に向けて、まだまだ改善を要することや、様々な教育課題が山積しており、その対応も進めていく必要がある。これらの成果と課題と、そこに込められた思いや願いを、次年度の全ての取組につなげていきたい。

学校経営に法的根拠を据えた 教育活動の充実に努める

経営部

一 活動の方針

本会の運営方針・活動の重点を受け、学校経営に法的根拠を据え、教育活動の充実に努める。

- 1 教育制度、関係諸法規の情報収集と情報の提供、資料化に努める。
- 2 学校経営上の諸問題や管理運営に関する法制研究を行い、その解決に資する。
- 3 諸会議等を通じ、会員相互・地区との情報交換を図り、組織の連携・充実・発展に努める。

二 業務内容と進捗状況

1 諸会議の開催

(1) 経営部研修会

① 第一回経営部研修会

・ 四月二十五日(金) 方針、業務推進計画の検討

② 第二回経営部研修会

・ 二月六日(金) 年度反省、次年度への課題・展望とまとめ

(2) 道小・道中合同学習会

・ 七月十八日(金) 質問・要望に対する

る学習会 道小と連携

2 法制研修会・地区別教育経営研究会の開催 (今年度道中担当)

七月二十九日の旭川(中)地区を皮切りに、十一月七日の空知地区を最後に十八地区において実施(宗谷地区のみ中止)

3 学校経営の資料の編集(今年度道中担当)

4 法制研究集録第五五集の編集発行(今年度道小担当) 二月にHPに掲載

三 今年度の反省と次年度への展望

1 法制研修会・地区別教育経営研究会

・ 今年度は七月二十九日の旭川(中)から始まった。様々な人材を活用した講演や、提言・テーマに基づきグループ討議を行うなど、工夫を凝らした準備を頂き、開催することができた。その甲斐あって、どの地区においても限られた時間の中で、内容の濃い充実した研修が行われ、多くの成果を収めることができた。

・ 会同開催(一四地区)

・ ハイブリッド、オンライン開催(四地区：釧路・釧路市、胆振、根室、札幌)

(小)

・ 中止：宗谷(津波注意報発令のため資料配付・紙面交流)

・ 「道小・道中の活動、役割や組織について」「教育情勢について」は道小・道中役員が説明した。

・ 地区から上げられた質問の中では、学校経営や管理運営、更に人材不足や定年

延長に関わる問題の指摘があり、道小・道中の幹事が回答した。質問の回答の基盤となる教育情勢を派遣役員から説明を行うことで、派遣の役割分担が明確になり、地区参加者へ十分な回答となった。

・ オンライン開催となった地区では、早めに事前の接続テストを行うことができ、滞りなく進行できた。

- ・ 地区からの「質問事項」には、「要望書等に挙げられているものがある。また「学校経営の資料」により、新しい情報等も記載していることから、各地区において、これらのものと重複を避けるように「質問事項」を検討していただきたい。
- ・ 各地区においては、事前に地区の経営部内や役員会等、組織内で精査を行ったうえで、御提出いただくようお願いする。
- 2 学校経営の資料の編集
 - ・ 道中が主たる編集を担当し、七月中旬全道各地区校長会に配付を終えた。
- 3 法制研究集録第五六集の編集発行
 - ・ 道小が主たる編集を担当し、二月下旬にHP上に掲載した。

本年度の経営部の活動では、皆様の御理解と御協力により多くの成果を収めることができた。特に地区別経営研では、一八地区で開催し、教育情勢や課題について研修を深められたことは、大きな成果といえる。各地区の校長会の御尽力に心より感謝申し上げます。

(恵庭市・恵明中 安榮 智裕)

「豊かな人生を切り拓き

持続可能な社会の創り手を

育てる中学校教育」を目指して

研修部

基本主題『豊かな人生を切り拓き 持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育』のもと、全日中研香川大会、道中研胆振・室蘭大会において研究交流を深めるとともに、各地区における研究を基盤とした研究活動の充実に努め、校長としての識見や指導力の向上を図る取組を推進した。

一 活動の方針

- 1 第七六回全日本中学校長会研究協議会香川大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るために、開催地区並びに各地区研修担当者との連携を密にする。
- 2 第六六回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会の円滑な開催及び研究活動の充実に向け、胆振管内校長会との連携を密にする。
- 3 これまでの研究の成果と社会情勢や教育の動向を踏まえ、令和八年度以降の研究推進について基本主題や分科会研究主題についての検討を進める。
- 4 令和七年度の研究を総括し、令和八年度「研究の手引き」の作成作業を行う。
- 5 教育課程に関する情報収集に努め、中

学校教育における今日的課題を明らかにし、問題点の解明に寄与する。

二 業務の推進

1 諸会議の開催

(1) 第一回研修部研修会 四月二十五日

- ・ 研究方針、業務推進計画及び業務推進について

・ 第六六回道中研胆振・室蘭大会、第七六回全日中研香川大会について

- ・ 令和八年度「研究の手引き」の作成について

- ・ 教育課程に関する調査について

- ・ 各地区研究推進状況及び令和七年度の研究計画について

(2) 道中研合同研修会 七月十日

(3) 道小道中合同研修会 七月十八日

(4) 道中研究大会全体研修会（胆振・室蘭大会）函館大会 十一月二十一日

(5) 第二回研修部研修会 二月六日

- ・ 年度末反省、次年度への課題の検討と展望・まとめについて

- ・ 令和八年度以降の研究推進について

- ・ 令和八年度第六七回北海道中学校長会研究大会函館大会（九月二十五、二十六日）について

- ・ 令和八年度第七七回全日本中学校長会研究協議会長野大会について

- ・ 令和八年度「研究の手引き」について
- ・ 教育課程に関する調査について（令和七年度実施の振り返りと調査内

2 容のまとめについて

2 研究活動の推進

(1) 第六六回道中研胆振・室蘭大会と第七六回全日中研香川大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るため、当該実行委員会との連絡・情報交流を積極的に行う。また、道中研分科会提言及び全日中研提案に向けて、研修部として担当地区や発表者へのサポートを早めに行っていく。

- (2) その他の業務

- ・ 研究資料及び情報提供、研究校の紹介

- ・ 各地区研究推進の状況や成果の交流

- ・ 次年度に実施する「教育課程に関する調査」のまとめと配付

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

- ・ 令和九年度以降の研究と研究体制について

三 今年度の反省と次年度に向けて

道中研胆振・室蘭大会については、大会実行委員会と連携を図り、大会を成功裏に終えることができた。また、業務の推進にあたっては関係の皆様にご協力いただいたことに深く感謝申し上げます。今後も引き続き、円滑な業務を推進していきたい。

（札幌市・中島中 桑原 俊二）

学校経営の向上を目指した 調査研究活動の推進

対策部

令和七年度、対策部では本会の運営方針と活動の重点を受け、業務を推進してきた。今年度は令和八年度調査研究報告書の発行に向け、「不登校」調査の検討・協議を行い、また各地区の不登校状況の交流調査を行った。四月当初期限付き教諭配置の実態調査は継続して実施。各地区理事並びに地区対策担当者の皆様の御協力により、計画した業務を遂行することができた。

一 活動の方針

本会の運営方針及び活動の重点を受け、学校運営上の諸問題について調査研究を推進し、学校経営の向上に役立てる。また、会員の職責に見合う待遇改善に向けて業務を推進する。

- 1 生徒指導等に関する情報収集や調査研究から情報提供に努める。
- 2 会員の身分確立や福利厚生、給与等の待遇改善に関する課題解決に向け、関係機関との連携強化に努める。
- 3 その他、緊急性のある課題や各種調査、情報に関することへの対応に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

- (1) 対策部研修会
 - ・ 四月二十五日(金)活動方針、業務計画の検討
 - ・ 二月六日(金)業務反省、次年度の展望とまとめ
 - ・ 小中合同事務局研修会・学習会
 - ・ 七月十八日(金)道小との連絡・調整、情報交換
- (2) 各種調査の推進
 - (1) 令和七年度当初期限付き教諭配置に係る実態調査
 - ・ 四月十六日(水)各地区に調査依頼する検討・協議
 - ・ 四月二十六日(土)対策部研修会で調査素案の検討
 - ・ 十一月二十一日(金)第四回理事研修会において方向性の確認、令和七年度の各地区の交流調査の実施提案。
 - ・ 十一月二十五日(火)各地区担当者への意向調査の実施、交流調査配布
 - ・ 一月二十一日(水)対策部担当者、各地区担当者に意向調査結果送付。
 - ・ 二月六日(金)令和八年度調査内容の決定、並びに令和七年度交流調査結果交流
 - (3) 全日中諸調査への協力
 - ・ 調査研究協力校として全道五六校に依頼
 - ① 生徒指導部調査(十月一日～十一日)
 - ・ 調査一 健全育成の推進・充実のための研究、当面する生徒指導上の課題への対応に関する調査
 - ・ 調査二 特別支援教育推進上の課題への対応に関する調査
 - ・ 調査三 部活動のあり方の検討に関する調査
 - ・ 防災教育・安全教育推進と充実のための研究に関する調査
 - ② 教育研究部調査(十月十五日～二十九日)
 - ・ 調査一 教育課程の編成・実施「主体的・対話的で深い学び」及び「学習評価」に関する調査
 - ・ 調査二 学びの保証に向けた取組についての調査
 - ③ 全日中教育ビジョン
 - ・ 学校からの教育改革についての調査(十一月十七日～二十八日)
 - ・ 策定より五年経過したため、継続的な有効性の検証調査
 - ④ 給与対策部調査(十一月一四日)
 - ・ 調査一 人事院勧告の概要
 - ・ 調査二 校長会の給与等に関する令和七年度予算要望の概要

三 活動の反省と次年度に向けて

業務推進にあたっては、部内の連携協力体制を維持し、当初の目的を達成することができた。各地区理事や各地区対策担当者、対策部担当理事の皆様、そして全道の校長先生の、御理解と御協力に、改めて感謝を申し上げる次第である。

次年度は調査報告書の発行にあたり、全体総括、アンケート集計、結果分析等役割を分担しながら連携を図る。

(八雲町・八雲中 増田 正弘)

情報交流の充実を目指して

情報部

情報部は、今年度も全国・全道の教育情勢を各地区に提供するとともに、各地区からの情報交流の充実を目指して業務推進にあたった。特に、本会の活動状況や教育関連情報については、会報「道中だより」、会誌「全道中」、そして道中ホームページによって随時お知らせしてきた。

情報部が提供する教育情報により、各地区校長会の取組に一層の充実が図られていること、また会員諸氏の職能向上に貢献しているれば幸甚である。

何かと御多用のところ、原稿執筆に御協力いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

一 活動方針

本会の運営方針と活動の重点を受けて、広報活動のより効果的な業務推進を図り、会員意識の高揚並びに組織活動の強化に努める。

- 1 広く、本会活動の状況や関係機関の情報、各種資料等を提供する。
- 2 各地区の活動や会員の研究成果、論説等の交流を図るとともに、各界から教育に寄せられる意見も掲載し、会員の職能向上に努める。

- 3 教育関係機関・団体との情報・資料の交流並びに相互の連携・協調を図り、教育世論の喚起に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

(1) 情報部研修会

第一回 令和七年四月二十五日

本年度の活動方針、業務推進計画の検討・協議

第二回 令和八年二月六日

本年度の業務報告 来年度への展望

他

(2) 編集会議(随時)

2 機関誌等の編集・発行

(1) 「道中総会・研修会要項」編集、発行

令和七年度「第九八回総会・研修会要項」の発行 四月二十五日

令和八年度「第九九回総会・研修会要項」の編集(令和八年四月発行)

(2) 会報「道中だより」の発行

第三九〇号 六月十二日発行

第三九一号 七月十日発行

第三九二号 十一月十三日発行

第三九三号 一月二十二日発行

行(今年度は、道小担当)

(3) 号外「道小情報・道中だより」の発行

十月二十日 北海道文教政策・予算策定に関する要望に対する回答

二月下旬発行 道教委との意見交換会・各課懇談会

(4) 会誌「全道中」第九五号の編集・発行

① 潮流

② 論考

③ 特集

3 北海道中学校校長会公式ホームページの更新及び内容の充実

本会活動の状況や各地区発行機関誌、会誌等の交流、研究大会に関する案内、関係機関の情報、法制研究集録や教育情勢等の各種資料の提供の場としての運用とタイムリーな更新に務めた。

4 全日中機関誌「中学校」の編集協力・原稿依頼

今年度は三本の割当があり、北海道各地の実践や教育への思い等についての寄稿を行った。

六月号 毛利憲二 前登別市立登別中学校長(現在は登別市立鷺別中学校長)「中学生と日本の伝統文化」

九月号 高橋正幸 道中事務局長「校長会だより」

十一月号 伊藤道彦 道中副会長(5ブロー)「私の学校経営」

④ 今年の道中各部門・各地区の活動

⑤ 北海道風土記

⑥ 文芸

⑦ 資料等

三 活動の反省と次年度に向けて

全道各地区の御協力をいただいで業務推進にあたることのできた。関係各位の御理解と御協力を深く感謝申し上げます。

次年度もタイムリーな内容となるよう刊行物の発行、及び、ホームページの掲載に力を尽くしたい。

(増毛町・増毛中 嶋本 敏幸)

石 狩



石狩教育研修センター

「石狩は一つ!」、石狩管内教育関係機関の合言葉となっている。石狩管内小中学校長会は、管内七市町村の小中学校長九八人で組織している。管内小中学校長会では、石狩の教育風土に根ざした伝統を踏まえつつ、今年度も関係機関との連携を大切に、管内が一つになった教育を推進していく。

一 活動方針

- 1 信頼される学校経営のもと、管内教育の安定と充実・発展に努める。
- 2 職能向上をめざす研修活動の推進と教職員の資質向上に努める。
- 3 管内における教育諸課題を把握し、その解決に努める。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善や福利厚生の実現に努める。
- 5 組織の強化と実態に即した会務の推進に努める。
- 6 会員相互の交流活動の推進に努める。
- 7 全ての子供たちの未来を保障する資

二 各部の活動

1 研修部

質・能力の育成と教職員が育つ学校経営に努める。
協議題「改善を続ける組織をつくり、社会の負託に応える学校経営の確立」について研究を推進。

- (1) 管内校長会研究会の企画と運営
①春季学校経営研究会(四月)
子供と職員を守る危機管理、服務管理の在り方
②秋季学校経営研究会(十一月)
検証改善サイクルを活用した学校経営の在り方
全連小・全日中・道小・道中研究会への参加
- (2) ブロック別研修会の開催(九月)
①Aブロック研修会(恵庭市)
②Bブロック研修会(石狩市)
- (3) 研究集録第四一集の発行
- (4) 経営部

2 経営部

- (1) 石狩地区教育経営研究会の開催(十月)
学校経営等に関わる諸問題等について研究協議
- (2) 道小・道中経営部との連携と業務推進
- (3) 道小・道中対策部との連携と業務推進

3 対策部

- (1) 道小・道中対策部との連携と業務推進
- (2) 会員の福利厚生活動の推進
- (3) 管内関係機関・団体との連携

三 諸会議

- 4 情報部
 - (1) 会報『石狩』の発行(二〇・二二一号)
 - (2) 会報『たがやし』の発行(五七号)
 - (3) 道小・道中広報誌への原稿執筆協力
- 1 定期総会(四月)
- 2 役員研修会(月一回) 当面する課題対応
- 3 幹事研修会(年九回) 市町村幹事・関係機関による協議、交流
- 4 市町村代表者等研修会(七月)

四 地区役員

- | | |
|-------|-----------------|
| 会 長 | 千葉 則理(江別・江別第一中) |
| 副 会 長 | 工藤 雅人(恵庭・恵庭中) |
| 副 会 長 | 高橋 真(千歳・末広小) |
| 事務局 長 | 後藤 章夫(恵庭・恵庭小) |
| 次 長 | 山口 歩(千歳・千歳中) |
| 会 計 | 高橋 潤一(江別・大麻西小) |
| 監 査 | 東 祐史(北広島・東部小) |
| 監 査 | 小森 享(石狩・樽川中) |
| 監 査 | 高橋 浩子(江別・江別第二中) |
- 五 道中役員
- | | |
|-----|----------------|
| 次 長 | 前田 真志(江別・中央中) |
| 理 事 | 安榮 智裕(恵庭・恵明中) |
| 幹 事 | 北村 剛(石狩・花川南中) |
| 幹 事 | 岡田 一之(北広島・大曲中) |
| 幹 事 | 野澤 孝志(恵庭・恵み野中) |
- (恵庭市・恵庭小 後藤 章夫)

後 志



岩内岳
(岩内町)

後志小中学校校長会は、一九町村より小学校長三六人、中学校長二四人の計六〇人で構成されている。

当会では、結成以来、それら世情や自分の役割、地域の特質等をふまえ、後志教育の充実・発展を目指し、組織の総力を傾注して真摯な研究と実践を積み重ねてきた。

「一人一人の校長の力を結集する」を基本に保護者や地域社会の負託と信頼に応え、後志教育の一層の充実・発展に寄与するために取り組んでいる。

一 運営方針

1 国や自治体における教育関連の動向を注視し、迅速な情報収集・情報共有に努める。

2 地域や会員が抱える課題に向き合い、その解決に寄与する取組に努める。

3 関係教育機関、関係団体との積極的な調整に努める。

二 活動方針

1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営

営の充実

- 2 「生きる力」を育む「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善
- 3 児童生徒理解の充実と、時代の変化に即した生徒指導や個々の教育的ニーズに応える特別支援教育の推進
- 4 会員の共同研究の推進と研究成果の交流による校長自らの研さん
- 5 教職員の一層の資質能力の総合的な向上

三 活動状況

- 1 経営部
(1)後志地区教育経営研究会の開催
(2)学校経営上の諸課題や管理運営上に関する法令資料の作成と研修会の実施
(3)各町村校長会の教育法令、制度に関する課題の集約
(4)道小・道中経営部との連携・協力
- 2 研修部
(1)第一七次研究推進計画の推進
(2)研究の手引き、研究紀要の発行
(3)後志小中学校長会研究大会の開催
(4)町村及びブロックの研究推進
(5)全道・全国の研究大会等への参加、全道・全国の研究大会への提言に向けた取組

3 対策部

- (1)各種調査の実施と集約・還流活動
- (2)教頭及びミドルリーダーを各対象とした「スキルアップセミナー」等の開催
他

4 情報部

- (1)「会報後志」の発行(年二回)
- (2)道小・道中機関誌への寄稿協力
- (3)「情報部だより」の発行

四 年間活動《諸会議》

- 1 総会 (四月)
- 2 理事研修会 (年六回)
- 3 事務局研修会 (年八回)
- 4 監査委員会 (年二回)
- 5 後志教育局との意見交換会(年二回)
- 6 教育長部会・校長会役員合同研修会 (年二回)

五 役員

- | | |
|--------|--------------|
| 会 長 | 柴田 真琴(仁木中) |
| 副 会 長 | 丸岡 哲也(古平小) |
| 副 会 長 | 半田 健一(黒川小) |
| 副 会 長 | 西岡 健幸(都 小) |
| 副 会 長 | 林 尚起(赤井川中) |
| 事務局 長 | 明村 秀之(東 中) |
| 事務局 次長 | 金崎 徳子(蘭越小) |
| 事務局 次長 | 大崎 未生(岩内第一中) |
| 監 査 | 島 朋朗(京極小) |
| 監 査 | 加藤 数馬(北陽小) |

(岩内町・岩内第二中 庄司 真人)

小樽市



重要文化財
「旧日本郵船
小樽支店」

小樽市中学校長会は、市の方針「知・徳・体のバランスのとれた人材の育成」に基づき、小樽の未来を託すことのできる人材育成を目指す教育推進のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実に成果をあげてきている。

これまでの成果を踏まえ、「小樽市立学校」の二校をあらゆる校長として、その使命と重責を担って「自走」するとともに、日々、市教委との連携や横のつながりを大切にしながらか「共走」し、自校や市内の共通課題解決のためにタッグを組み、前進させて次代に継承していく。

一 活動方針

- 1 市の教育ビジョンを基盤とした着実な取組
 - (1) 選択と集中による実践・検証
 - 2 二つの部の充実
 - (1) 研究内容の充実
 - (2) 学び合いの深化
 - 3 自主自立の確立
 - (1) 校長としての使命を自覚した自立した学校経営

二 活動にあたっての教育ビジョン

- 1 学校運営組織の機能化
 - (1) 指導的立場としての教務主任の機能化
 - 2 小中一貫教育
 - (1) 分掌内への小中一貫教育担当の位置付け
 - (2) 中学校区内での担当者会議・全教職員による部会の実施
 - 3 人材育成
 - (1) 主幹会のバックアップと主幹間の定期的な交流
 - (2) 教頭・主幹・主任等の他校体験・見学と、長期的展望に立った小樽市の管理職候補の育成
 - 4 業務改善
 - (1) 校内組織の機能化をベースにした業務の見直しと推進

三 各部の取組

- 1 研究部
 - (1) 小樽市中学校教育の充実・発展のため、校長としての職能の向上を図る。
 - (2) 教育の質の向上を目指し、評価・評定システムの改善を図る。
- 2 組織・法制部
 - (1) 学校経営に関する機能の向上を図る。
 - (2) 法制研修及び経営活動を通して、今日的な課題の解明に努める。

四 活動の状況

学校教育と社会教育を一本化した包括的

な計画である「小樽市教育推進計画」で示された基本理念「主体的に学び 小樽の未来を創る 心豊かな人づくり」を踏まえ、毎年、中学校長会としての共通目標を立て、各学校で具体的な実践を進めている。

今年度は、「学校運営組織の機能化」を重点とし、教務主任がより一層、指導的な役割を果たせるような体制の整備や教頭の業務内容の見直し等に取り組んでいる。

また、各校の課題に合わせた働き方改革をはじめ、小中一貫教育の推進等を含めた研究活動を進めている。

五 年間活動(行事)

- | | |
|--------------------|-----|
| 総会 | 一回 |
| 定例校長研修会 | 一二回 |
| (今年度は全て集合形式の会議とした) | |
| 四役研修会 | 一二回 |
| (うちオンライン会議一二回) | |
| 四役部長研修会 | 四回 |
| 小樽後志代表校長会議 | 一回 |
| 道中第一ブロック連絡協議会 | 一回 |
| 小中高校長協議会及び研修会 | 五回 |
| 経営・法制研究会等 | 三回 |

六 役員一覧

- | | |
|--------|---------------|
| 会長 | 代永 研 (菁園中学校) |
| 副会長 | 伊藤 仁弥 (朝里中学校) |
| 副会長 | 田中 孝二 (長橋中学校) |
| 事務局長 | 吉岡 智尋 (北陵中学校) |
| 研究部長 | 山本 俊次 (桜町中学校) |
| 組織法制部長 | 本庄有希子 (忍路中学校) |

(小樽市・北陵中 吉岡 智尋)

上 川



初 夏
中富良野町北星山から
朝焼けのなかふらの

令和七年度、上川管内校長会は、第五一回総会研修会を盛大に開催し、総勢八二人の会員とともに新たな歩みを始めた。特に、一人の新会員と他管内からの二人の異動会員を迎え、組織としての一層の活性化が期待される。

本会は、斐田佳奈恵会長の二期目のリーダーシップのもと、急速に変化する社会情勢の中で多くの課題に直面する学校現場において、持続可能な運営体制を構築し、地域社会の教育発展に寄与すべく、全会員が結束し、組織一丸となつて取り組んでいる。

一 活動方針

上川管内校長会は、校長一人一人が教育現場のリーダーとして、時代の変化に対応した学校運営を実現するため、「つながりの深化」「自己研さんの充実」「持続可能な組織体制の構築」とともに、新たなスローガン「『うまくやること』の実践」を活動方針の柱とし、学校経営の質的向上を目指し、次の四点を活動方針としている。

1 「つながりの深化」では、会員と教育

関係者の結束力を高め、心理的安全性を確保し、連携を深めて地域全体の教育課題解決を目指す。

2 「自己研さんの充実」では、校長がリーダーとして学び続け、情報共有や研修、学びの場を通じて資質向上と現場への応用を目指す。

3 「持続可能な組織体制の構築」では、効率的運営と次世代リーダー育成のため、事務局業務を見直し、研修編成の柔軟化、若手校長への支援を進める。

4 「うまくやること」とは、校長が対話と協働で教育環境を整え、円滑で質の高い学校経営を実現することである。

二 各部の活動（主な業務）

1 経営部

(1) 組織強化に関すること

(2) 法制研究会・教育経営研究会の開催に関すること

(3) 学校経営に関する法制上の課題把握と関係法規の研究・具体的問題の収集処理に関すること

(4) 道小及び道中経営部との連携に関すること

2 研修部

(1) 研修組織及び運営に関すること

(2) 道小・道中研究大会及び全連小・全道中研究協議会に関すること

(3) 会員の研修に関すること

(4) 道小及び道中研修部との連携に関すること

3 広報部

(1) 会報の編集と発行に関すること

(2) 各種調査の企画・実施に関すること

(3) 学校の統廃合に関すること

(4) 道小及び道中対策部・情報部との連携に関すること

4 事務局

(1) 学校経営に関する資料の整備と交流に関すること

(2) 地区ブロック研修会に関すること

(3) 後継者育成のための諸施策の立案と実施に関すること

(4) 教育局・教育委員会連合会・市町村校長会など関係諸団体との連携に関すること

(5) 各部との連携に関すること

三 役員一覧

会 長 斐田佳奈恵(当麻中)

副 会 長 佐藤 正和(多寄小)

副 会 長 中間 靖之(東神楽中)

副 会 長 千葉 良彦(富良野西中)

副 会 長 越野 崇(中富良野中)

運営委員長 小林 真弓(北野小)

運営委員 井上 隆一(名寄南小)

事務局長 豊田 央(鷹栖小)

事務局次長 石坂 剛(愛別小)

庶務理事 成田 浩幸(東川第二小)

会計理事 島村 圭吾(麓郷小中)

経営部長 秋保 利弘(東川小)

研修部長 馬場 泰栄(南富良野小)

広報部長 桑原 久美(上富良野小)

(中富良野町・中富良野中 越野 崇)

旭 川 市



旭橋
「ライトアップ」

旭川市中学校長会は、本年度、新採用五人の新会員を迎えた。会員二六人が千葉雅樹会長を中心に、「知恵を結集し、さらに、前へ」を基本姿勢とし、旭川市教育大綱の基本方針「主体的に学び力強く未来を拓く人づくり」の具現化を図るために、組織の一層の活性化を進めている。

教育改革の動向を見極めながら、会員相互の真摯な研さんと連携を図り、次のような運営方針を掲げ、中学校教育の充実・発展に努めている。

一 活動の方針(要点)

- 1 中学校校長の職能の向上と旭川市の中学校教育の振興を図る。
- 2 旭川市教育委員会を始め、北海道中学校長会、関係機関・団体等と緊密に連携を深め、教育諸課題への適切な対応に努める。
- 3 校長としての学校経営力の向上を図り、市民の負託に応える中学校教育の創造に努める。

- 4 定年年齢の引き上げ及び役職定年制の導入、後継者育成等の喫緊の課題への対応に努める。

二 活動の重点(要点)

- 1 校長の職能向上や組織と機能の充実
- 2 創意と活力ある学校づくりの推進
- 3 信頼される開かれた学校づくりの推進
- 4 生徒指導上の諸課題の解決

三 各部の主な活動

- 1 研究部
 - (1) 六月研修会の開催・運営
 - (2) 上川管内小中学校長研究大会の運営
 - (3) 道中研究大会胆振室蘭大会への参加
 - (4) 全日中研香川大会への参加
 - (5) 二月研修会の開催・運営
- 2 厚生部
 - (1) 福利厚生関係業務の推進
 - (2) 親睦関係業務の推進
 - (3) 叙位・叙勲関係業務の推進
- 3 広報部
 - (1) 会報「校長会だより」の編集・発行
 - (2) 会誌「第五六号」の編集・発行
 - (3) 道中の広報活動への協力
- 4 生徒指導部
 - (1) 小学校・高等学校及び関係機関との交流の充実
 - (2) 定例校長会議における「生徒指導情報交流」「実践交流」の充実

- (3) 地区ブロックにおける生徒指導体制及び小学校との連携や交流の充実
- (4) 各関係機関との緊密な連携と協力体制の構築
- (5) 道中関連の調査協力(生徒指導関係)

5 学校教育対策部

- (1) 旭川市小・中学校長会法制研修会の開催
- (2) 学校運営及び法制上の諸課題への対応
- (3) 道中地区対策担当者業務への対応

四 役員一覧

- | | |
|--------|-------------|
| 会 長 | 千葉 雅樹(緑が丘中) |
| 副 会 長 | 岩瀬 一弘(旭川中) |
| 副 会 長 | 辻並 浩樹(神楽中) |
| 監査委員 | 濱中 昌志(愛宕中) |
| 監査委員 | 飛弾野文彦(光陽中) |
| 事務局 長 | 大熊 修一(六合中) |
| 事務局 次長 | 坂田 幸親(広陵中) |
| 事務局 次長 | 坂東 裕美(神居東中) |
| 事務局 次長 | 青山 天生(永山南中) |
| 会計委員 | 高綱 智美(春光台中) |

(旭川市・六合中 大熊 修一)

宗 谷



宗谷海峡につながる
白い道

宗谷校長会は、一〇市町村、五一校（うち単置中学校一七校、小中併置校四校）の校長で構成している。結成以来、「宗谷の風土に根ざした豊かな自然に育む子ども」をテーマに掲げ、会員相互の研さんと職能向上に努めながら管内教育の充実・発展を図っている。

一 運営方針

- 1 校長としての使命を自覚し、自らの職能向上に努めると同時に指導性を発揮し、教職員の研修活動の活性化を図り、保護者や地域の期待に応える学校経営の充実に努める。
- 2 会員相互の理解を深め、活動の活性化を図り、宗谷教育の充実・発展に努める。
- 3 関係機関や団体との連携を更に図り、教育諸課題の解決にあたるとともに、教育条件整備に努める。

二 活動の重点

- 1 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に基づく活力ある学校経営を推進する。

三 各部の活動

- 1 研究部
- 2 研修活動を充実し、職能向上と、教職員の資質能力の総合的な向上に努める。
- 3 関係機関・団体と連携し教育諸条件と教育諸課題の改善と整備・充実に努める。
- 4 校長会の組織を強化し、活動の活性化を図る。

1 研究部

- (1) 宗谷校長会の活動方針に基づき、事業計画を立て、その遂行にあたるとともに、地域社会の期待と要請に応え、教育課程についての研究と当面する教育課題に向き合う学校経営を究明する。

- (2) 『未来に夢をもち、ともに生きる豊かな社会を創る人材を育む学校教育の推進』を研究主題とする第一四三次年継続研究の一年次の取組を行う。「学校経営」「教育課程」「資質向上」に関わる信頼される学校づくりの共通課題を明らかにし、実践的研究の充実に努める。

- (3) 関係機関・団体との連携を図り、宗谷における教育研究の一層の発展・充実に努める。

- (4) 道小、道中、全連小、全日中の研究大会などに積極的に参加し研究大会での提言については宗谷校長会として協力共同で取り組み組織的な発表とする。

- (5) 宗谷の重要課題である学力保障を推進するため『学力向上プラン』による

実効性ある手だてを講じるとともにその有効性を常に評価検証し改善を図る。

2 経営・情報部

- (1) 学校経営上の諸問題の解明に努める。

- (2) 学校経営の管理運営に関する調査及び研究に努める。

- (3) 意欲を高め、やりがいのある人間関係づくりのための学びを高める。

- (4) 会報と会誌を編集・発行するとともに、各種原稿依頼に迅速に対応する。

3 対策部

- (1) 関係機関・団体との連携を一層強め、会員の福利厚生の実と向上を図る。

- (2) 道小・道中からの諸調査を迅速且つ正確に行うとともに、本会独自の調査活動が必要に応じて行う。

四 役員一覧

会長 吉崎 健一（稚内東中）

副会長 塩原 悟（稚内東小）

宮崎 哲也（中頓別小）

大谷 智昭（拓心中）

事務局長 門脇 憲司（潮見が丘小）

事務局次長 黒木 敏郎（豊富小）

三野宮誠一（稚内南小）

森河 真（稚内中）

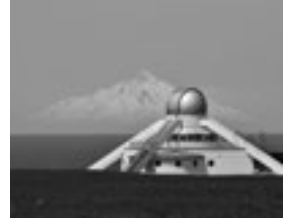
中村 繁仁（天北小中）

末村 哉子（声問小）

計 佐藤 健（幌延中）

会 計（稚内市・稚内東中 吉崎 健二）

留 萌



初山別村 天文台

留萌管内小中学校校長会は、『和心一統』の指標のもと、本管内の教育の充実と発展のために、組織の総力を結集して研究と実践を積み重ねていく決意を表明した。

一 運営方針

- 1 校長の使命と責任を自覚し、識見を高める研修の充実と情報の共有等を図る。
- 2 会員相互の信頼関係を深め、組織強化と活動の充実、先を見通した最善の対応を図る。
- 3 教育関係機関・団体及び地域社会との連携を強化し、諸課題の解決を図る。

二 活動の重点

- 1 教育改革を実現する学校経営に資する研修の充実と環流
 - (1) 職能向上と教育改革を実現する学校経営の改善に向けた留萌管内校長会教育研究協議会の開催
 - (2) 全道、全国の情勢や学校経営の充実・発展に向けた留萌地区教育経営研究会の開催
 - (3) 道小根室大会、全連小福岡大会、道中胆振・室蘭大会、全日中香川大会へ

の参加の促進

- (4) 新任校長研修会の開催と内容の充実
- (5) 研究記録や会報などによる情報の共有と環流の促進
- 2 組織の強化と活動の充実、業務の効率化の推進
 - (1) 本会の基軸となる理事研修会の活性化と事務局や各専門部及び市町村校長会との連携
 - (2) 校長会組織の強化と会員の意識向上、業務の効率化・DX化の推進
 - (3) 全道・全国校長会、管内教育機関・団体との連携
 - (4) 今後主管する全道大会に向けた関係団体との連携強化
- 3 教職員の待遇改善
 - (1) 教職員人事に関わる取組の推進
 - (2) 役職定年と定年延長に伴う処遇の改善と再任用の拡大、再就職の促進
- 4 管内の学校や教職員に関する今日的な課題への対応
 - (1) 管内的視野からのキャリアステージに応じた人材育成
 - (2) GIGAスクール構想の実現に向けた取組の推進
 - (3) 特別支援教育の充実を図る支援体制整備・条件整備への働き掛け
 - (4) CSや小中連携など、求められる学校づくりに対する組織的な取組の推進
 - (5) その他、管内的、全道的、全国的な課題への対応

三 各部の運動方針

- 1 研究部
 - (1) 留萌管内小中学校校長会教育研究協議会の開催
 - (2) 道小提言プロジェクト委員会の充実と研究推進
 - (3) 研究集録の発行
 - (4) 留萌管内教育研究団体連絡協議会の業務推進
- 2 組織部
 - (1) 留萌地区教育経営研究会の開催
 - (2) 教育条件整備や福利厚生の実態把握
 - (3) 組織・法制に関する研修会の充実
- 3 広報部
 - (1) 会報の発行・市町村会報の交流
 - (2) 道小・道中情報部との連携

四 役員組織

会 長	村井 亨 (東光小)
副 会 長	秋葉 良之 (留萌小)
事務局 長	矢藤 典彦 (小平小)
事務局 次長	嶋本 敏幸 (増毛中)
会計 委員	西條 直志 (緑丘小)
監査 委員 長	亀田 寛人 (留萌中)
監査 委員	木藤 健史 (遠別中)
研究 部長	西山 智章 (羽幌中)
組織 部長	工藤 智 (羽幌小)
広報 部長	安居 和 (増毛小)

(初山別村・初山別中 滝本 秀明)

檜 山



夷王山神社・勝山館跡
(上ノ国町)

檜山校長会は、檜山管内七町の小学校一五校、中学校一〇校の校長で構成している。本会は、昭和二十三年の創立以来、管内教育の充実・発展のために研究と実践を積み重ねるとともに、教育条件の整備等に努めるなど、組織の総力を挙げて取組を推進している。

一 今年度の運営方針

これからの激変して予測困難な社会において主体性をもって生きていくためには、変化へ対応する力や変化の中で自ら新たな価値を創り出す力を身に付けることが必要とされる。さらには、異なる価値観をもつ多様な他者と当事者意識をもって対話を行い、問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」を育てる必要性も高まっている。そのため、学校は「温故知新」を大切にし、これからの教育の在り方を追求する学びの継続のもとに、次世代の社会で活躍する子供たちの姿を踏まえた教育を実現していかななくてはならない。檜山校長会は、檜山の教育を恒久的に維持、発展させていくために、協働で役割と責任を果たしていく。そして、今日的な教育課題解

決のために「ふるさと檜山に誇りを持ち、自己実現に向けて未来を切り拓く児童生徒」を育む学校経営の在り方を究明し、保護者や地域住民の負託と信頼に応える教育活動の推進ならびに充実・発展に寄与したいと考えている。

二 今年度の活動方針（◎は今年度重点）

- 1 組織マネジメントを生かした活力ある学校経営の推進
- 2 ◎「生きる力」を育む適切な教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 時代の変化に即した生徒指導や特別支援教育の組織的推進
- 4 ◎教職員の資質能力の総合的な向上
- 5 服務規律の厳正な保持
- 6 ◎組織活動の活性化と充実
- 7 ミドルリーダーならびに管理職候補者等の育成
- 8 ◎防災教育と健康安全教育の充実
- 9 学校における「働き方改革」の推進

三 主な各部の活動

- 1 経営部
 - (1) 教育研究事業の推進
 - (2) 檜山校長会教育研究大会の開催
 - (3) 檜山校長会教育研究大会の事業反省と意見・要望等の調査
- 2 道小・道中の調査協力等の連携
- 2 研修部
 - (1) 檜山校長会研究計画の作成及び推進
 - (2) 檜山校長会教育研究大会分科会運営

及び大会集録の編集

- (3) 全道・全国研究大会への参加集約
 - (4) 道小・道中との連携
- 3 対策部
 - (1) 各種調査に対する取組
 - (2) 新採用校長研修会の開催・運営
 - (3) 各種資料の収集と整備
 - (4) 福利厚生の活動及び道小・道中との連携
 - 4 情報部
 - (1) 檜山校長会誌『清風』の編集・発行
 - (2) 道小「教育北海道」の執筆依頼・原稿の提出
 - (3) 道中「道中だより」・「全道中」の執筆依頼・原稿の提出

四 役員一覧

会長	佐藤 等(今金小)
副会長	宮腰屋 由(江差中)
監査委員	安田 善紀(南が丘小)
〃	村田 真一(北檜山中)
事務局次長	吉川 聖(上ノ国小)
事務局次長	米谷 優(江差北小)
事務局次長	関田 貴人(上ノ国中)
会計長	岡 健(江差北中)
経営部長	久慈 学(厚沢部小)
研修部長	松村 浩良(北檜山小)
情報部長	西山 恭史(瀬棚中)
対策部長	越前 秀一(乙部小)

(上ノ国町・上ノ国中 関田 貴人)

渡 島



会旗：「拓創」

渡島小中学校長会は昭和五十二年に渡島小
学校長会と渡島中学校長会の統合により会
員数一三二人で発足し、来年度は統合五〇年
の節目の年を迎える。八月には統合五〇周年
記念事業の準備委員会が組織され、先輩諸氏
が築き上げてきた実績と伝統を基盤に、渡島
教育のさらなる充実と発展を願う場となるよ
う、準備にあたっている。

今年度は管内一〇市町、小学校三三人、中
学校一八人、小中併置校一人、義務教育学校
一人の合計五三人の会員で組織されている。
四月開催の総会では、澤田真次会長より、会
員相互の連携を一層深めるための運営方針等
が示され、今年度の会務がスタートした。

一 運営方針

- 1 研修活動の充実
- 2 後継者育成に向けた取組の強化
- 3 「学校における働き方改革」の一層の
推進
- 4 会員の所属意識の高揚と持続可能な組
織及び活動の改善

二 活動の重点

- 1 新しい時代を担う渡島小中学校の学校
経営の充実に努める。
- 2 時代の動向に合わせ、迅速な情報交流
や協働研修の充実を図り、校長としての
識見や指導力の向上に努める。
- 3 次世代の渡島の教育を支える人材育成
を図り、後継者育成を進める。
- 4 教育の動向を踏まえ、教育関係機関・
団体及び地域との連携を強化し諸課題の
解決に努める。
- 5 渡島の教育全体の動向を各々の学校に
生かすために調査と情報発信に努める。
- 6 渡島小中学校長会会員の連携をより一
層図り、組織の強化と充実に努める。
- 7 教育環境・諸条件の整備と福利厚生
の充実に努める。

三 各部・事務局の主な業務計画

- 1 研修部
 - (1) 令和七年度研究の全体計画の推進
 - (2) 第十九期二ヶ年計画二年次の研究計
画の策定と推進
 - (3) 全連小・道中研提言への取組
- 2 経営部
 - (1) 総会・研修会における研修講話
 - (2) 学校経営研究資料の編集
 - (3) 函館・渡島地区教育経営研の運営
対策部
- 3 対策部
 - (1) 後継者「人材リスト」の更新
 - (2) 校長会全体のICT活用に関する情
報集約や発信

- (3) ホームページの更新と管理
- 4 情報部

- (1) 会報「渡島」、会誌「拓創」の発行
- (2) 「教育情勢渡島」の編集・発行
- (3) 道小・道中広報部への協力

5 正副会長・事務局

- (1) 会務の推進・連絡・調整
- (2) 予算・決算の作成、会計事務
各種会議、研修会等の開催
- (3) 夏季・冬季教育研修セミナー
・新採用会員研修会
・諸機関・関係団体との研究協議会
・函館・渡島地区教育経営研究会
・三地区校長会役員研修会
・統合五〇周年事業準備委員会
- (4) 教育実践表彰の企画・実施
- (5) 渡島管内教育関係管理職名簿発行
- (6) 全国・全道校長会との連携・協力

四 役員一覧

会 長	澤田 真次 (大沼岳陽)
副 会 長	増田 正弘 (八雲中)
副 会 長	五十嵐義幸 (七重小)
監 査	佐々木道彦 (島川小)
監 査	細川 和成 (七飯中)
事務局 長	伊藤 明彦 (森 小)
事務局 次長	渋谷 智実 (鹿部小)
会計 理 事	滝本 千晶 (大野小)
庶務 理 事	山岸 申弥 (大中山中)
庶務 理 事	大和 則幸 (久根別小)

(七飯町・大中山中 山岸 申弥)

函館市



函館市電と相馬社屋
(函館ハイカラ號)

函館市中学校長会は、今年度一九人の会員（新会員五人）でスタートした。山口哲也会長の人間性豊かなたたかきで確かな導きのもと、新しい学校に求められる持続的で魅力ある学校教育を実現するため、連携と協調のもと、しなやかに自走する。また、函館市の教育振興計画に基づき、組織力を生かして教育の充実に寄与したいと考えている。

一 基本方針

- 1 校長会の組織を機能させ、一丸となって教育課題、経営課題の解決に努める。
- 2 全教育活動を通して「生きる力」を育む「信頼される学校づくり」の創造に努める。
- 3 関係機関との連携を基に、教育課題の解決、教育条件の整備充実に努める。

二 活動の重点

- 1 関係機関、各種団体とのネットワーク及びCSを活かした学校力の向上
- 2 中学校教育の在り方についての研修と幼・小・中・高の連携強化

三 各部運営計画の概要

- 1 経営部
(1) 道中経営部との連携
(2) 運営要項の作成
(3) 小中合同特別研修への運営支援
(4) 後継者育成資料作成
(5) 函館・渡島地区教育経営研修会の運営、及び三地区校長会役員研修会への協力
- 2 研修部
(1) 道中研修部との連携
(2) 実践事例交流会の企画・運営
(3) 教育経営研修会(局長講話)の運営
(4) 渡島管内中高連絡協議会への協力
(5) 道中研究大会への参加・協力・提言
(6) 全日中研究協議会香川大会の参加協力
- 3 対策部
(1) 道中対策部・調査部との連携
(2) 道中等各種調査への協力・まとめ

四 主な活動の概要

- 1 定例研修会
職能向上を図るため経営課題や教育問題の報告と協議を行い、円滑な学校運営の推進を目指し研修の成果を上げている。
- 2 経営研修会
各種研修会の性格に応じた講演や提言により今日的課題への理解を深めている。

五 役員一覧

- | | |
|-------|---------------|
| 会長 | 長 山口 哲也(亀田中) |
| 副会長 | 長 阿部 真之(巴 中) |
| 副会長 | 長 中田 和子(旭岡中) |
| 監査 | 長 宮前 由一(恵山中) |
| 監査 | 長 堀切川 治(榎法華中) |
| 事務局次長 | 長 白川 卓(港 中) |
| 事務局次長 | 長 小田桐 智(本通中) |
| 事務局次長 | 長 辰巳 哲治(湯川中) |
| 経営部長 | 長 阿蘇 一貴(鱒川中) |
| 研修部長 | 長 池田 浩司(桔梗中) |
| 対策部長 | 長 菅原 学(南茅部中) |

(函館市・港中 白川 卓)

空 知



模擬坑道が再開した
夕張市石炭博物館

空知校長会は、管内二四市町、小学校五四校、中学校三五校、義務教育学校二校の九一人の会員で組織されている。

本年度は、第七次三か年計画の二年目のまとめとして、第六〇回研究大会を岩見沢市において開催した。

当会では、管内を一五ブロックに分け、共同研究体制で研究を推進している。今年度は、五つのブロックが提言を行い、分科会で熱心な協議が行われた。他のブロックは紙上での提言を行い、令和八年度の全連小札幌大会、道中函館大会での提言に向けて管内の研究成果を確認することができた。

来年度は第七次研究の最終年となる。全ての教育活動で「子供が主語」を実現するべく研究を進めていく。

一 活動方針

- 1 空知の校長としての使命を自覚し、研さんに励み、学校の自主性・自律性を発揮して、学校経営の充実・発展に努める。
- 2 校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、組織の在り方を再検討する

中で、組織運営の効率や業務削減、諸問題の解決に努める。

- 3 教育関係機関・団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたり、地域・保護者から信頼される学校づくりに努める。

二 活動の重点

- 1 学校経営の充実
- 2 研修活動の充実
- 3 調査活動の充実と諸課題の解決
- 4 広報活動の充実

三 活動の具休策

- 1 適切な教育課程の編成と実施
- 2 成果を上げる学校マネジメントの実現
- 3 信頼に応える学校経営の推進
- 4 会員相互の協力と教頭会との連動による取組の推進

四 各部の主な活動

- 1 経営・対策部
 - (1) 学校経営研究会の開催
 - (2) 空知教頭会の研修会等への支援
 - (3) 教育条件の整備拡充に資するための調査・要請活動
 - (4) 働き方改革に関する調査実施及び課題把握
 - (5) 当面の課題に対する対策と解明
- 2 研修・情報部
 - (1) 第六〇回研究大会の開催
 - (2) 各種校長会研究大会への参加
 - (3) 各種研究団体・研修会への協力
 - (4) 「研修だより」の発行
 - (5) 会報「空知野」の編集・発行

五 組織と役員

《空知校長会役員》

- | | |
|----------|------------------|
| ・ 会 長 | 小玉 剛 (岩見沢志文小) |
| ・ 副会長 | 富樫 孝行 (歌志内学園) |
| ・ 副会長 | 竹内 結美 (南幌中) |
| ・ 事務局長 | 松野 岳彦 (岩見沢明成中) |
| ・ 事務局次長 | 國行 宏昭 (岩見沢幌向小) |
| ・ 監 査 | 古畑 聡子 (岩見沢メープル小) |
| ・ 監 査 | 小林 晃彦 (滝川江陵中) |
| 《経営・対策部》 | |
| ・ 部 長 | 三好 考央 (北竜中) |
| ・ 副部長 | 木村 一典 (深川一巳小) |
| 《研修・情報部》 | |
| ・ 部 長 | 奥山 直人 (滝川第一小) |
| ・ 副部長 | 野村 勝紀 (夕張中) |
| 《地区幹事》 | |
| ・ 北地区幹事 | 杉田 嘉雄 (深川中) |
| ・ 中地区幹事 | 堤 雅宏 (砂川中) |
| ・ 南地区幹事 | 村上 咲枝 (美唄東小) |
| ・ 東地区幹事 | 八柳 圭 (長沼小) |
| 《道小役員》 | |
| ・ 幹 事 | 高原 直樹 (深川小) |
| ・ 地区理事 | 國行 宏昭 (岩見沢幌向小) |
| 《道中役員》 | |
| ・ 幹 事 | 小泉 寧 (新十津川中) |
| ・ 幹 事 | 松田 淳二 (三笠中) |
| ・ 地区理事 | 野村 勝紀 (夕張中) |

(夕張市・夕張中 野村 勝紀)

胆 振



地球岬から望む
噴火湾

胆振管内校長会は、管内一市町、併置校一校を含め小学校五八校、中学校三九校、義務教育学校四校の一〇二校、一〇〇人の校長によって構成されている。一市町中、苫小牧市が小・中ごとの校長会を組織しており、管内校長会としては一二校長会から成り立っている。

一 運営・活動方針

本会は、子供たち一人一人に「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」といった生きる力を育むとともに、保護者や地域住民の負託と信頼に応える学校経営を推進し、管内教育の充実と発展のために努力を積み重ねてきた。今年度は、授業改革を中心に据え、教職員の職能の向上、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、いじめ・不登校への迅速且つ柔軟な対応、特別支援教育の一層の充実に努め、児童生徒が未来社会を切り拓く資質・能力を確実に身に付けられるよう教育活動を展開している。

1 活動方針

- (1) 校長としての識見・能力を高めるため、自ら研さんに励むとともに、組織のリーダーとしての指導力を培い、時代の要請や学習指導要領の目標を実現するため、「チームとしての学校」の改善充実に一層努める。
- (2) 会員相互の信頼関係を基盤として、組織の充実・強化を図るとともに、校長会の総力を結集して、迅速且つ適切に諸問題の解決に努める。
- (3) 教育関係機関や関係団体との連携を強化し、働き方改革など今日的な諸課題の解決に努める。

2 活動の重点

- (1) 校長としての職能向上を図る研修の充実
- (2) 学校経営の適正化を図る研究・実践及び教育条件の整備・充実
- (3) 教職員の意識改革と資質能力の向上を通じた学校改善および働き方改革の着実な推進
- (4) 後継者育成に向けた事業の推進
- (5) 道小・道中、第四ブロック、各市町校長会との組織的連携の重視と行政機関並びに関係団体との連携の強化
- (6) 会員同士の親睦と福利厚生の充実に関する事業の推進
- (7) 諸事業の機能的・効率的な運営改善および予算執行の適正化

二 各部の事業推進概要

- 1 研修部へ研修の活性化と職能向上
- 2 経営部へ組織・法制上の諸問題の法令・法規の情報収集、組織力の強化
- 3 対策部へ各種調査、福利厚生事業推進
- 4 情報部へ会報・会誌「響箭」の発行

三 役員名

会 長	大谷 昌史(旭ヶ丘小)
副 会 長	中島 勉(美園小)
	熊谷 誠(沼ノ端中)
運営委員	井村 友美(泉野小)
	福岡 雄司(星の丘小中)
事務局長	近藤 大作(伊達小)
事務局次長	仲見 真樹(日新小)
	能登 敬久(開成中)
研修部長	河毛 幸至(錦岡小)
経営部長	今田 和也(大成小)
対策部長	宮村 直人(豊浦小)
情報部長	萩原 享(八丁平小)
会 計	猪子 雅司(幌別西小)
	清水 京子(上厚真小)

(苫小牧市・ウトナイ中 山岸 弘昇)

日 高



二十間道路 桜並木
(新ひだか町)

日高地区校長会は、管内の小・中学校三六校（中学校一四校）の校長で組織している。本年度の重点目標は、「日高管内の教育課題の解明・解消と職能向上を目指し、積極的に提言、発信、行動する日高地区校長会を実現する」ことを掲げ活動している。

活動の推進にあたっては、道小・道中や教育局、教委連、各町教委とのつながりを大切にし、会員の声を積極的に伝えるよう努めている。

また、会員相互の情報交流を二層密にすることで「情報の共有化」を図り、課題を共有しながら取組を進めている。

一 活動の重点

- 1 ビジョンを明確にした学校経営の推進
- 2 社会に開かれた教育課程の実施
- 3 教職員の資質能力の向上と後継者育成
- 4 校長としての職能向上と組織体制の強化

二 各部の活動

1 研修部

「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す学校教育の推進」を基本主題とし、「『学力向上』と『組織力向上』の実現に向けた校長のリーダーシップ」を研究課題とした研究活動を通して、校長の指導力の向上を図るための研修を推進している。また、会員相互の研修を深めるために、研究活動の実践状況の交流・協議・検証の場として、「課題別研修会」・「日高管内小・中学校長研修会」を開催している。

さらに今年度から地区校長会ポータルサイトを開設した。会員相互で研修の進捗状況をいつでも見ることができ、チャットによる実践交流も活発に行われている。

2 法制・広報部

「教育経営・法制研修会」を毎年実施し、その中で道小・道中の役員の方々より情勢報告をいただいている。今年度は「安全な学校づくりのための危機管理体制の在り方」について、北海道教育庁空知教育局義務教育指導監・眞田眞様から講話をいただき、校長としての職能の向上と、学校経営の充実・発展、組織の強化にあたって大変有意義な研修会となった。また、校長会会員の連携を高める会

報「採用校長の決意」と広報誌「教育ひだか」の発行は例年どおり行っている。

3 調査・厚生部

学校経営に必要な調査を道小・道中と連携しながら情報の共有化を図っている。福利厚生については、主体的に研修を深め、厳しい共済制度に対しても見通しをもち、支援を進めている。

4 その他

地区校長会では、「次代を担う後継者の発掘と育成の取組」として、『人材リスト』を作成し、後継者の育成に長年役立てている。このリストは、歴任校や経験年数、主任経験や分掌経験等から適任者を判断し、当該校長との面接や推薦などを通し教頭受験者数を増やすために行っている。また、これは多くの個人情報を含むことから、取り扱いのガイドラインを策定し、十分な配慮のもとに取組を進めている。

三 役員

- | | |
|--------|-------------------|
| 会 長 | 小嶋 範彦 (日高町・富川小) |
| 副 会 長 | 玉手 広昭 (浦河町・浦河小) |
| 副 会 長 | 中田実千代 (新ひだか町・三石中) |
| 事務局 長 | 木田 理博 (平取町・平取小) |
| 事務局 次長 | 佐藤 正寿 (新ひだか町・高静小) |
| 会 計 | 高杉 省一 (日高町・門別中) |

(新ひだか町・静内中 多田 謙二)

十 勝



広大な十勝平野

十勝地区は、管内一八町村の小・中学校長八八人で構成されている。本校長会は「校長の教育実践指標」を掲げ、会員相互の研さんに励むとともに、公教育の役割と使命の高揚に努めてきた。そして、創意と工夫に富んだ学校経営と教育活動の推進で、十勝教育の充実・振興に多くの成果を挙げてきた。

また、校長一人一人が一校を預かる責任者であり、「子供の成長に責任を負う」という姿勢の下、十勝教育の推進・発展に寄与するよう努めてきたところである。

今年度は『考える校長』を合言葉に、力強く、そしてしなやかに諸事業を展開している。

一 活動方針・重点

- 1 信頼に基づく創意工夫に満ちた活力ある学校経営に努める。
- 2 協働体制の確立と信頼関係の深化を図り、組織体としての機能の充実に努める。
- 3 研修を深め、主体性を確立し、教育上の諸問題の解決に努める。

- 4 地域社会・関係機関との連携を強化し、教育諸条件の整備に努める。
- 5 待遇改善・福利厚生等の向上を図るため、情報交換と要望活動の充実に努める。
- 6 十勝小・中校長会史第四集作成
- 7 信頼される学校経営に関わる情報共有

二 各部の活動

1 研修部

- (1) 第一九次教育研究三か年計画二年次の推進（第五六回十勝小・中校長会教育研究大会の開催）
- (2) 教育研究大会の研究集録の発行
- (3) 道中研修部との連携（地区活性化支援事業への参加等）
- (4) 全国・全道校長研究大会の参加促進
- (5) 情報紙等を通じた教育情報の提供

2 経営部

- (1) 第五九回十勝・帯広地区教育経営・法制研究会の開催
- (2) 「学校経営等調査」の実施と調査報告書の発行
- (3) 北海道教育公務員弘済会との連携

3 対策部

- (1) 「十勝教育・学校の顔」の発行
- (2) 「教育懇談会」の運営
- (3) 「退任校長感謝激励の会」の運営
- (4) 令和八年度「十勝・帯広 校長・教頭・主幹教諭名簿」の発行
- (5) 全道・管内学校給食研究協議会への協力

4 情報部

- (1) 会報「十勝川」の発行（年間三回）
- (2) 各町村校長会情報部との連携、各種情報の提供
- (3) 道中会報等への寄稿

三 諸会議

- 1 総会（四月）活動計画・予算・役員
- 2 町村会長会議（年三回）
- 3 常任委員会（月一回）

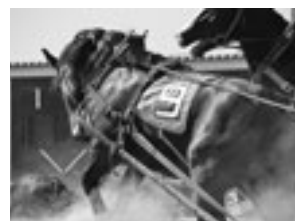
四 十勝小・中校長会役員

- | | |
|---------|-------------|
| 会 長 | 伊藤 道彦（豊頃中） |
| 副 会 長 | 佐々木典郎（音更中） |
| 副 会 長 | 笠松真一郎（更別小） |
| 事務局 長 | 岸 研吾（鈴蘭小） |
| 次 長 | 坂下 亮宏（上土幌小） |
| 次 長 | 安齋 亮太（上浦幌中） |
| 次 長 | 高橋 教之（大樹小） |
| 会 計 長 | 上野 精嗣（鹿追中） |
| 会 計 次 長 | 上野 精嗣（鹿追中） |

五 役員一覧

- | | |
|---------|------------|
| 代 表 者 | 伊藤 道彦（豊頃中） |
| 事務局 長 | 佐々木典郎（音更中） |
| 会 計 担 当 | 上野 精嗣（鹿追中） |
| 研 修 担 当 | 大石 浩之（大樹中） |
| 対 策 担 当 | 嘉藤 貴充（清水中） |
| 情 報 担 当 | 森 英樹（池田中） |
- （浦幌町・上浦幌中 安齋 亮太）

帯 広 市



ばんえい競馬

はじめに

帯広市中学校校長会は、今野典之会長を中心に、義務教育学校一校を含む一四校の校長で構成しており、今年度は二人の新会員を迎えた。全日中新教育ビジョン「学校からの教育改革」、帯広市教育基本計画の理念「ふるさとの風土に学び 人がきらめき 人がつながらる おびひろの教育」を踏まえ、本会の方針を「校長職 学び専門性を高め合う校長会」として創造力豊かで夢を語り合える組織を目指している。新しい時代に求められる学校づくりを実現し、帯広市民の負託に応えていく。

一 運営方針

- 1 校長相互の協力や信頼関係を深めるため、対話や議論を大切にする。
- 2 帯広市教委をはじめ、全日中、道中、十勝小・中学校長会、中高特連絡協議会等の教育関係諸機関・諸団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたる。
- 3 教育者としての校長、管理者としての校長を自覚し、学び続ける。

- 4 「新しい学校づくり」を進めるため関係機関と連携する。

二 活動の重点(今年度の重点課題)

- 1 中学校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。
 - (1) 校種間の学びをつなぐ取組の充実行動連携(エリアファミリー(幼保小中連携)、小中一貫教育)
 - (2) 危機管理上の迅速な対応(スピード感等を生かした協力体制)
 - (3) 教育機関、道中、十勝小・中学校長会、公私立高校等との連携強化
 - (4) 職能を高める研修の実施
- 2 教育課題の解決を図り、学校経営の改善に努める。
 - (1) 社会に開かれた教育課程の実現(閉ざされていた教育からCSの活用へ)
 - (2) 教職員の服務規律保持の徹底(同僚性の発揮、日常的な危機管理・コンプライアンス研修、全校統一した不祥事ゼロの誓い「KTSBAの日」の取組)
 - (3) 働き方改革の推進(北海道アクション・プランと帯広市立学校働き方改革推進プランの推進、部活動休養日・定時退勤日の完全実施、学校閉庁日の設定、校務運営システムの積極的活用、部活動の地域移行に関する検討委員会との協議)
 - 3 教育課程の整備・充実と地域に根ざした学校づくりに努める。

- (1) 妥当性や信頼性を高めた学習評価の実施及び円滑化を図る各校連携した取組

- (2) 生徒指導提要に基づいた、支える生徒指導の周知と実践
- (3) GIGAスクール構想に基づいた個別最適な学びの実現
- (4) いじめ・不登校等への適切な対応と生徒指導体制の強化
- (5) 多様化した高等学校教育並びに入学者選抜方法への適切な対応

- 4 円滑な教育活動推進のための教育諸条件の整備・充実に努める。

- (1) 教育委員会との連携、人事異動要綱に基づく適正な配置
- (2) 特別支援教育の充実のための教育課程編成
- (3) 教頭、主幹教諭等候補者の人材発掘

三 役員

- | | |
|-------|------------|
| 会 長 | 今野 典之(南町中) |
| 副 会 長 | 高橋 謙(大空学園) |
| 事務局 長 | 嶋 健(西陵中) |
| 事務局 長 | 村上 達也(川西中) |
| 研修部 長 | 大泉 昭人(翔陽中) |
| 会 計 | 志田 直樹(七 中) |

(帯広市・翔陽中学校 大泉 昭人)

釧路



釧路湿原の最深部
湿原の聖域と謳われる
「キラコタン岬」

釧路校長会は、令和七年度、採用九人、管外からの転入二人の新会員を迎え、六町一村、四一人（小学校長二人、中学校長一人、小中併置校長三人、義務教育学校校長二人）で構成している。

今年度、須藤光秋会長を中心に、本会が歴史的な背景をふまえて作り上げてきた釧路校長会の理念『調和のある学校運営を目指し』の方針を全体で確認し活動を開始した。

一 基本方針

本会は「釧路校長会綱領」を基底とし「学校運営にあたっての基本姿勢」で示す「五つの柱」を堅持して「調和のある学校運営」を目指す。また、各町村校長会や教育関係機関等との連携を密にし、教育諸課題の解決を図るとともに、現在の情勢にあった持続可能な本会の業務運営を検討していく。

【釧路校長会綱領】（平成二年三月制定）

私たちは釧路教育の充実、発展に重要な役割を果たし、子供の未来に責任を負う者として、ここにこの綱領を定める。

- 一、校長の使命を自覚し、常に厳しい自己研さんに努める
- 一、情熱と強固な意思をもって、公教育の推進に努める
- 一、たがいに強い連帯感をもって、職務の遂行に努める
- 一、職員相互の信頼関係を基盤とした学校経営に努める
- 一、釧路の風土に生き、未来を拓く子供の育成に努める

二 本年度の運営方針

- 1 会員相互のつながりを生かした組織体として、校長としての経営感覚を磨き、実践力を高める職能向上に努め、「学校を元気にする」校長会を目指す。
- 2 教職員として服務規律を徹底するとともに、学校における働き方改革を一層推進させ、魅力ある職場づくりに努める。
- 3 新しい時代に求められる資質・能力など児童生徒の「生きる力」を育成する学習指導要領の確実な実施に向けて、授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立等の取組を進め、自校の教育活動の質の向上を図る。
- 4 日ごろから想定されるあらゆる事故の未然防止、事故対応、事後の改善等に向け、

三 活動の重点

- 1 学校経営の充実
- 2 創意ある教育活動の推進
- 3 研修活動の推進
- 4 組織の充実と強化
- 5 関係機関・諸団体との連携強化

学校の危機管理体制を整える。
5 教育関係諸団体、特に町村教育委員会と町村校長会との連携協力を密にし、教育の動向や情報を共有して諸課題への対応、解決に向け迅速に行動する。

四 役員

会長	須藤 光秋（標茶町立標茶中）
副会長	斉藤 直彦（釧路町立別保小）
〃	名和 勝紀（鶴居村立鶴居中）
事務局長	笹川 義孝（釧路町立富原小）
〃 次長	辻川 智宏（標茶町立標茶小）
會計	葛西 敏之（浜中町立霧多布小）
釧路研所長	廣瀬 巧（厚岸町立真龍小）
監査	川上 正美（標茶町立虹別中）
〃	小林 一博（弟子屈町立弟子屈中）
研修部長	佐藤 義行（弟子屈町立弟子屈小）
経営部長	蠣崎 浩一（白糠町立白糠学園）
対策部長	太田 諭（釧路町立富原中）
情報部長	秋山 豊（標茶町立沼幌小）

（鶴居村・鶴居中 名和 勝紀）

釧路市



釧路湿原の豊かな自然の中で見ることのできる
愛らしいエゾリス

令和七年度釧路市中学校長会は、五人の新しい会員を迎え、一五人でスタートした。土江田会長のもと、義務教育の責任を直接担うという使命感をもち、「和をもって貴しとなす」を基本とした上で「和して同ぜず」を肝に銘じ、認め合って協力することと主体的に判断することを大切に、常に自身や組織としての在り方を見直し改善を図るとともに、会員相互が親和協力して資質能力の向上に努めている。

一 活動方針（概要）

- 1 課題と情報を組織として共有し、「職能の向上と（釧路市立）学校教育の振興」を図るため、相互の協力や信頼関係を深め、校長会全体の力を結集して活動の充実と諸課題の解決に努める。
- 2 関係各所（道小、道中等）との連携を密にし、教育諸課題の解決を図るとともに、教育諸条件の整備、教職員の社会的・経済的地位の向上を目指す。

二 活動の重点（概要）

- 1 釧路市が目指す学校教育を実現するための組織マネジメント
子供たちが主体となって生きる力を育むために、義務教育段階9年間の連続性と系統性を基軸に据え、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す。校長は、そのためのビジョンと戦略を明確に示し、組織体制を整え、心理的安全性の高い職場づくりを進める。
- 2 危機管理能力の向上
平常時の危機管理、緊急時の危機管理、収束時の危機管理の3つのフェーズで教職員が一体となって対応できるように、適切なリーダーシップを発揮する。
- 3 人材育成
(1) 学校教育の一層の充実を図るために、校長は、北海道教職員研修計画を踏まえ、日常の観察やフィードバック、授業評価、各種調査結果等を根拠に、対話や他者等とつなぐなどして、教職員が主体的に資質能力の向上を図るよう指導・助言する。
(2) 釧路市に勤務する教頭が一人でも多く校長採用・登録となるよう、校長会としてプロジェクトチームを編制し、責任をもって後継者育成に力を注ぐ。
4 不登校への対策と対応
児童生徒が主体となる「絆づくり」と教職員主導による「居場所づくり」を積極的に進め、全ての児童生徒にとって安

三 主な活動

- 1 釧路市全体のふるさとキャリア教育の推進
- 2 釧路市中学校教育課程改善研修の実施
- 3 中高特連絡協議会の企画・運営
- 4 学校経営研究協議会の実施
- 5 中学校研修や生徒指導情報交流の実施
- 6 道中・全日中研究大会への参加

四 役員

- 会長 土江田亮一（景雲中）
副会長 富田 直樹（北中）
事務局長 藤森美由紀（幣舞中）
事務局次長 河原 和範（春採中）
会計 中野 昌史（美原中）

（釧路市・幣舞中 藤森美由紀）

根 室



野付半島
(別海町)

一 はじめに

根室管内校長会は、採用校長三人を迎え、「継承と発展」を合い言葉に、管内教育を推進していくことを決意した。全三七校の校長が根室管内教育推進の重点を柱に「つながる」「そろえる」「ひろげる」を意識しながら関係機関と一体となって、課題を共有し学校経営の充実にあたる。

二 運営方針

1 教育をめぐる諸情勢を的確に捉え、ともに、校長の抱える問題を組織として共有化を図り、その解決に向けた情報提供や解決策の提案に努める。

2 信頼される公教育の確立を図るとともに、関係諸機関との連携を深め、国や道の諸改革の動向を踏まえて適切な対応に努める。

3 校長の経営力の向上を図り、地域に開かれた学校経営の改善・充実に努める。

4 会員相互の連帯意識を強め、信頼関係を基盤にした、組織の強固な体制作りを努める。

三 活動の重点(概要)

1 家庭や地域社会に信頼される学校

(1) 教職員の意識改革と資質能力の向上

(2) 家庭・地域社会との連携・協力の強化

(3) 教育委員会等との関係の強化

(4) 法規や服務に基づいた学校経営の推進

(5) 今日的課題に向けた組織体制の充実

2 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善

(1) 特色ある教育課程の編成・実施

(2) 学びに向かう力等を育てる指導の工夫

(3) 道徳教育・健康教育の充実

(4) 北方領土学習・ふるさと学習の充実

(5) 地域の人的・物的資源の効果的活用

3 研修活動の推進

(1) カリキュラム・マネジメント等における研修の充実

(2) 根室管内校長研究大会及び地区教育

(3) 全道や全国の研究大会への積極的参加

(4) 今日的な課題に対応する研修計画推進

4 教育諸条件の整備・充実

(1) 後継者育成の推進

(2) 人事課題に対する意思集約と発信

(3) 女性活躍推進

5 教職員の待遇改善への働き掛け

(1) 管理職の抜本的待遇改善

(2) 教職員の健康増進、働き方改革の推進

(3) 事務や栄養職員、退職者等の処遇改善

6 業務見直しと組織強化

(1) 活動の充実及び組織・事業の改善

四 主な活動内容

1 第六八回北海道小学校長会教育研究根室大会

(1) 当管内として二〇年ぶりの大会運営、さらに全国大会の前年度開催のため

十三分科会を二町にまたがり開催した。関係各位の御支援御協力により大きな

成果・財産を継承し大会を終了した。

2 定例理事研修会の開催

(1) 各市町単位校長会の活動を交流し、課題と改善策等を協議した。また、北海道教育庁根室教育局から教育の動向

や今日的課題について情報提供を頂いた。

3 「チーム根室」の取組

(1) 授業改善アンケート「自分をフリカ

エル」の実施と北海道教育庁根室教育局や管内教頭会と連携した取組の推進。

五 令和七年度役員体制

会 長 根本 渉 (別海・別海中央)

副 会 長 岡部 臣也 (別海・上西春別小)

副 会 長 増田 慎一 (中標津・中標津中)

事務局 長 植島 博幸 (中標津・中標津東小)

事務局 次 長 蝦名 武宣 (根室・柏陵中)

会 計 葛迫 勝秋 (別海・中春別中)

(別海町・中春別中 葛迫 勝秋)

オホーツク



津別峠の朝

係機関等との連携をより一層強化し、組織の総力をあげて課題解決に努め、地域・保護者の信託に応える学校経営を推進していく。

二 活動の重点

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の推進
- 2 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 児童生徒理解と時代の変化に即した生徒指導の充実と特別支援教育の組織的な推進
- 4 校長自らの資質能力の向上を図る研修活動
- 5 教職員の資質能力の総合的な向上
- 6 組織内や関係機関との連携による組織強化
- 7 教育諸条件の把握、その改善と整備・充実
- 8 教職員の処遇改善

三 各部の活動計画

- 1 研修部
 - (1) 全連小・道小、全日中・道中の各教育研究大会への参加に関すること
 - (2) オホーツク管内教育研究大会開催
 - (3) 各ブロック校長会研修会の開催
 - (4) 学校経営の充実を図る研修の推進
- 2 情報部
 - (1) 全連小・道小、全日中・道中と連携した広報活動に関すること

四 役員一覧

- 3 経営部
 - (1) オホーツク地区教育経営研究会の開催
 - (2) 「会員の顔」の発行に関すること
 - 4 対策部
 - (1) 道小、道中対策部と連携した調査
 - (2) 管内における課題の状況調査・集約を行い学校経営のための資料提供
- | | |
|-------|----------------|
| 会長 | 伊井 俊明 (網走中央小) |
| 副会長 | 大久保雅恵 (紋別上渚滑小) |
| 〃 | 中嶋 俊雄 (網走第五中) |
| 監査委員 | 可児 隆洋 (遠軽小) |
| 〃 | 森本 邦紀 (津別中) |
| 事務局次長 | 橋本 正之 (北見南中) |
| 〃 | 河村 一恵 (北見常呂小) |
| 〃 | 信田 雅守 (北見高栄小) |
| 〃 | 藤田 哲也 (北見小泉中) |
| 〃 | 尾島 康人 (北見光西中) |
| 会計 | 加藤 弘一 (北見三輪小) |
| 研修部長 | 池田 潤 (佐呂間小) |
| 情報部長 | 安田 吉雄 (網走第二中) |
| 対策部長 | 岡内 知也 (紋別小) |
| 経営部長 | 齊藤 孝雄 (北見北光中) |
- (北見市・小泉中 藤田 哲也)

オホーツク管内校長会は、オホーツクの教育の充実・発展のため、心豊かでたくましい子供の育成に鋭意努力を重ね、組織の総力を傾注して研究と実践に努めてきた。

今年度は、小学校六四校、中学校四二校、小中併置校一校、義務教育学校五校の計一二人の校長で組織されている。

一 活動方針

これからの社会は、最先端技術の高度化、デジタルトランスフォーメーションの加速など、急速な社会構造の変化が起こると予測されている。このような中で、児童生徒が主体性をもって未来を切り拓いていくためには、予測困難な状況に対応する力を育み、変化の中で自ら新たな価値を創り出す力を付けることが重要である。

本会は、このような現状を深く認識し、ふるさとに誇りと愛着をもち、ともに未来社会の創造に挑戦する児童生徒を育てるため、「チームオホーツク管内校長会」の旗印の下、管内校長会として各市町村校長会や関

札幌市



初夏の大通公園

札幌市中学校長会は、市立中学校九五校、市立義務教育学校二校と、北海道教育大学附属札幌中学校、北翔支援学校、市立札幌開成中等教育学校を加えた、計一〇〇校の校長で構成されている。今年度も、遠山 博雅会長の下、副会長六人、会計一人、事務局長一人が役員として会務を担うとともに、各部部长七人、監査委員二人、事務局員七人の計二五人で理事研修会の運営にあたる。

一 活動方針

市民の負託に応え信頼される中学校教育を推進すべく、「教育の動向を的確に捉える、保護者や地域、関係機関等との連携を図る、会の組織と機能を一層充実させる」を基本に校長としての研さんと職能の向上を目指す。また、「学びの保障と小中一貫した教育の推進」、「学校における働き方の見直し」等を含め、今年度の重点項目は以下の四つである。

- ・校長会の組織・運営の強化と研修の充実
- ・学校経営の改善と充実
- ・学校経営の条件整備と教職員の待遇改善
- ・教育関係機関や諸団体との連携強化

二 各部会の運営の方針

〈管理部〉

- ・学校経営上の管理、運営についての現状把握と分析を行い、課題の解決を図る。

〈施設部〉

- ・長期的展望に立った学校施設・設備の整備・充実、及びICT教育に関わる施設・設備や学習環境に関する諸課題の維持、管理、改善・充実に努める。

〈研究部〉

- ・研究基本主題による共同研究を総括し、校長としての職能向上を目指すことにより、中学校教育の充実・発展に努める。

〈指導部〉

- ・生徒の実態を的確に捉え、問題行動の質的变化にも適切に対応できる生徒指導の在り方について検討する。

〈保健体育部〉

- ・全市的立場で生徒の心身の健康保持、増進と体育・スポーツの充実を図る。

〈進路指導部〉

- ・持続可能な社会を創る力を育むキャリア教育の充実を図り、適正な学校経営を行うための研究と条件整備にあたる。

〈特別支援教育部〉

- ・特別支援教育に関する諸課題について研究協議し、その推進と充実を図る。

三 具体的な運営・活動

1 「例会・研修会」は全会員出席の会議と書面会議を合計年一〇回予定している。

2 「理事研修会」は、例会・研修会の前週に二五人の理事の出席で開催され、運

営に関する協議、議題の整理等を行う。

3 「部会」(七部)は、年間数回設定され、担当する諸課題に取り組んでいる。

4 「各区校長会」(一〇区)は、行政区ごとに設置され、区内の情報交流や課題に応じた協議、検討、研修等を行っている。

5 「学教連絡会」では、毎月、幼小中高の四種校長会等の代表と札幌市教委が、情報交流等を中心に連携を深めている。

6 「小・中学校生徒指導特別委員会」は、小・中学校長会代表と関係機関で構成され、生徒指導上の諸課題について、連携・協力を深めている。

四 研究活動

研究基本主題「新たな価値を見出し、持続可能な社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ三年継続研究が行われ、本年度は三年目となる。七つの部が教育課程や学校経営、生徒指導、教育環境等の視点から課題の究明に取り組んでいる。研究成果は一月の「全体研修会」にて全会員に発表され、三月に「研究紀要」として発行される。

また、札幌市中学校長会は、政令指定都市中学校長会で構成する「大都市中学校長会連絡協議会」に加盟している。今年度の千葉大会には一〇人が参加し、大都市が抱える教育課題について情報交換と協議を行った。

(札幌市・月寒中 太田 和幸)

北海道

風と花



夕焼け 室蘭市祝津公園



クルマユリ 羊蹄山



イワヒゲ 風不死岳



エゾチドリ ニセコアンヌブリ



文学碑公園 豊浦町



シラネアオイ 昆布岳



オオルリ 登別市亀田公園



ミツバオウレン オロフレ山



海陽丸 江差町

子供が主役のまち江別

江別市・江別第二中

高橋 浩子

江別市は石狩平野の中央に位置し、札幌に隣接する人口約二万人の市です。便利で快適な生活と、野幌森林公園に代表される豊かな自然環境があり、バランスのいい暮らしやすさが自慢です。

比較的平坦で、複数の川が流れる土地には縄文時代から人々の暮らしがあり、日本最北とされる古墳群も発見されています。明治以降は政府による開拓、北越殖民社による農村開拓、樺太に住むアイヌ民族の移住、鉄道と舟運の要所としての発展などもあり、しだいにまちとして整備されてきた歴史をもっています。「エベツ」はアイヌ語の「ユベオツ（サメのいる川）」または「イ・プツ（大事な場所への入口）」に由来するようです。

【教育を大切にすまち】

明治初期からの屯田兵に関する歴史を見ると、市内には「江別兵村」と「野幌兵村」がありました。筆者が勤務する江別第二中学校は、野幌兵村練兵場跡に建っています。隣接する開村緑地に記念碑があり、毎年七月に行われる開村記念式典には江別第二小学校と江別第二中学校の児童生徒が参列します。

野幌兵村では教育を重んじ、移住当初か

ら自分たちの手で学校をつくった記録が残っています。また、屯田兵制廃止にあたり、多くの兵村で土地が売却分配されたのに対し、野幌の土地は地域の教育や福祉、産業の振興のためにと共有資産として引き継がれた経緯があります。現代の教育を担う者として、身の引き締まる思いです。ちなみに現在の江別市は、小学校一七校、中学校八校、高校五校、大学四校がある文教都市です。

【れんが・やきものまち】

江別市では明治二十四年にレンガ製造が始まり、明治三十年代には北海道炭鉄道会社が野幌にレンガ工場を設立して、北海道のレンガ生産の中心地として発展しました。レンガ生産で培われた技術や集まった人材が、陶芸やガラス工芸へも派生したと言われます。毎年七月に「やきもの市」（多くの陶芸作家が集う北海道最大規模の陶器市）が行われているのも、こうした背景があるからでしょう。



銘菓煉化もち

市内にはレンガを使った新旧様々な建造物があります。「旧石田邸」は古くから市民に親しまれる象徴的な建物で、現在はガラス工



野幌屯田開村記念碑

芸作家の工房として活用されています。また、産業遺産である「旧ヒダ工場」はリノベーションされ、観光交流拠点 E B R I となっています。

【食と農のまち】

市の面積の約四〇%を農地が占め、稲作、畑作、酪農・畜産などの農業が行われ、様々な作物が生産されています。市内には地元産の野菜を買い取る「農産物直売所」が多数あるほか、給食にも地元の野菜がよく使われています。希少小麦「ハルユタカ」の産地としてもよく知られ、地元小麦を扱う飲食店や食品工場、美味しいパン屋さんが多くあります。

【子供が主役のまち】

少子化が進む時代ですが、江別市の年少人口の転入超過数は、全国の市町村の中で二位以内を維持しています（総務省の住民基本台帳人口移動報告による）。子育て世代が住みたいと思うまちなのです。令和六年には『子供が主役のまち宣言』を行い、その理念は市内の学校における教育活動にも反映されています。

◆ ◆ ◆
江別の学校の管理職は江別のことを知っておかねば、ということ、ほとんどの校長は「江別まち検定」初級をもっています。



ガラス工芸館

愛が別格・きのこの里

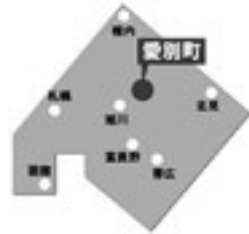
愛別町

愛別町・愛別中

村澤泰志

【はじめに】

愛別町は、上川管内のほぼ中ほどに位置し、明治に団体移住者の開拓によりその歴史が始まった。当初より



稲作をはじめとする農業を中心に発展し、近年は、きのこ栽培や肉牛などの畜産の導入により地域産業は大きく飛躍を遂げ、きのこの里としても知名度を上げている。

また、愛別町は、「子供の笑顔かがやく恵みの大地 あいべつ」を基本テーマとして町民と行政が一体となって、ふるさと愛別を豊かにする諸施策を積極的に展開している。ここでは、これまでの愛別町の歩みの中から、縁のある人物や名所、文化の一端を紹介する。

【緑の人】

中井延矢（なかいのびや）石の彫刻公園

中井氏は愛別町出身の、珍しい石の彫刻家として知られている。また、近隣の旭川市な

ども作品を見ることが出来る。愛別町開拓一二〇年記念事業の一環の折り、町内に点在していた作品一二点を北町農村公園内に集め、いつでも気軽に鑑賞ができるようになってる。



【名所 日本遺産認定

石垣山（いしがきやま）】

十勝アイヌと石狩アイヌの古戦場といわれてきた「石垣山」では、柱状節理の岩肌と、季節が訪れるとヤマアジサイの群落が見事に咲き誇り、見渡す景色は圧巻である。その光景は、幕末の探検家、松浦武四郎の『石狩日誌』にも記されている。



現在は、上川（石狩）アイヌの文化や歴史が垣間見られる場所として、構成文化財に認定されている。また近年では、その岩肌を求めてロッククライミングの名所ともなっている。

【愛別町最大の集い

きのこの里フェスティバル】

愛別町農村公園で、毎年九月中旬に開催される町最大のイベントであり、毎年約八、〇〇〇人規模の集客がある。



圧巻は、直径三・五m、深さ二mの「ジャンボきのこ鍋」で作られる大量のきのこ汁。多くの参加者に振る舞われて、満足感いっぱい笑顔が会場に広がっている。さらには、愛別のおいしい米一〇〇升を大釜と薪でイッキに炊きあげる「百姓一揆炊き」や愛別産の牛肉を使った特別メニュー、町内の特産品の他、周辺市町の商会からのキッチンカーなど出店もあり、イベントに花を据えている。きのこの里の秋の味覚を満喫できることから、多くの賑わいで活気に漲っている。

ぜひこの季節には愛別町に足をお運びになり、別格の秋の味を存分に御賞味いただきたい。

雄大な天塩川と 豊かな自然に

包まれた街 天塩町

天塩町・天塩中

小林 剛

天塩町は、アイヌ語の「テシユ」が転訛したものとわれている。「テシユ」とは、梁（ヤナ）という魚を捕るための仕掛けのこと
で、天塩川河口に多く見られたそうである。
北東は天塩川を境として幌延町、南東は中川町、南は遠別町に接している。人口は、昭和三十年には一万人を超えていたが、その後減り始め、令和六年度現在で約二、七〇〇人となっている。学校数も、ピークでは町内に一七校あったが、現在は天塩小学校と天塩中学校の二校となっている。

【文化遺産・自然】

天塩町には、縄文時代から擦文時代にかけての竪穴式住居跡が二、三〇基並ぶ貴重な遺跡、「川口遺跡」がある。町は、この文化遺産を保存し後世に伝えるために、昭和六十一年度に竪穴住居三基を復元した。また、



住居跡から考えられるデータを元に、当時に近い竪穴住居を平成十三年から毎年一基ずつ改修している。本来の遺跡の上に住居を復元している川口遺跡は学術的価値が高いと言われている。

また、天塩の歴史を知る重要施設として、「天塩川歴史資料館」がある。「赤レンガ」として町民に親しまれていた旧役場庁舎を利用し、地域の歴史や、文化、教育資料など二、〇〇〇点を超える貴重な資料を展示している。

地域を流れる雄大な天塩川は、全国四番目に長い河川である。士別市から天塩町にかけて流れ、本流の長さは二五六kmに及ぶ。また、天塩川河口河川敷につくられた「天塩川河川公園」は町民憩いの場であり、対岸の砂州から広がる日本海や、水平線からそびえる利尻山を見ることができ、夕暮れ時には巨大なパノラマが始まり、素晴らしい景観を望むことができる。



【特産品】

天塩町の特産品の一つは、「シジミ」である。天塩のシジミは、味と粒の大きさでは日本一と言われている。天塩町の漁業の中心はニシン漁、サケ漁だったが、ニシン漁の衰退とともに「獲る漁業」から、「育てる漁業」への転換が図られてきた。計画的な施設整備などの取組が進められたことにより、天塩川本流・支流やパンケ沼などでシジミ漁が盛んになり「天塩名産」として全国有数の知名度を誇るようになった。特に、より海に近い天塩川産の青シジミは、味も濃くて高級品として定着したが、漁獲量が一般シジミの半分、地元でのみ販売される貴重なものとなっている。

また、天塩町は酪農が盛んであり、一万数千頭余りの乳牛を飼育し、年間五万トンの牛乳を生産している。天塩の酪農産業は、町の発展を担う基幹産業の一つとして歩み続けており、道北圏の専業酪農地域として「北海道の酪農王国」と称されるようになった。町内では道の駅を中心に、新鮮な牛乳、ソフトクリームやチーズなど、様々な乳製品が販売されている。

雄大な天塩川、美しい夕日が広がる日本海など、自然にあふれる街、天塩町。オロロンラインを通る際にはぜひ足をお運びください。

歴史とロマンの街・函館

函館市・銭亀沢中

村井雄一

【函館市の概要】

北海道の南、渡島半島の南東部に位置する。青函トンネルにより、北海道と本州を結ぶとともに道南地域の中心都市として発展してきた港湾都市である。

函館港は幕末に横浜港・長崎港とともに日本国内で最初の交易港として開港した。戊辰戦争の最後の戦いである箱館戦争の戦地としても知られる。また、夜景や函館山、五稜郭などの観光名所で名を馳せる観光都市でもある。



【函館山】

標高は約三三四m、南西部には溶岩台地が広がり、裾部は断崖となって海に面している。また、北東部は緩やかな斜面で、浸食の進んだ幾つかの深い谷がみられるとともに豊かな森林が覆う。牛が寝そべっているように見えることから臥牛山（がぎゆうざん）とも呼ばれる。約二、五〇〇万年前の海底火山

の噴出物を土台とし、その後の火山活動による隆起・沈下を繰り返して大きな島となった。それがやがて海流や風雨で削られて孤島になり、流出した土砂が堆積して砂州ができた。これにより約五、〇〇〇年前に渡島半島と陸続きとなった。火山活動は約二〇〇万年前に終了しており、現在の函館の街はこの砂州の上に展開される。



【五稜郭】

五稜郭は、箱館開港時に函館山の麓に置かれた箱館奉行所の移転先として築かれた。

一八六六年（慶応二年）の完成からわずか二年後に江戸幕府が崩壊すると、箱館戦争で榎本武揚率いる旧幕府軍に占領され、その本拠となった。一九一四年（大正三年）から五稜郭公園として一般開放されて以来、函館市民の憩いの場でありながら、函館を代表する観光地の一つとなった。学術上の価値が高く、我が国文化の象徴として、北海道では唯一の特別史跡に指定されている。



【世界文化遺産・縄文遺跡群】

ユネスコ世界文化遺産となった北海道・北東北縄文遺跡群。函館市には「垣ノ島遺跡」「大船遺跡」がある。「垣ノ島遺跡」で

は、国内最大級の盛り土遺構や墓に副葬された足形付き土板など、当時の高い技術や精神性を示す貴重な遺物が数多く見つかった。また「大船遺跡」は、縄文時代の拠点集落であり、床を深く彫り込んだ堅穴住居が特徴である。沿岸地域における生業と精神文化を示す貴重な遺跡であることが証明された。



遺跡に隣接する函館市縄文文化交流センターには、国宝である「中空土偶」が常設展示されている。

【函館の魚】

函館といえばイカ。「函館市の魚」として指定されるほどであるが、近年は温暖化の影響か漁獲量が激減している。代わりに獲れるようになったのが、暖かい海に生息するブリやアオリイカなど。「海が変わってきた」とは、函館の漁師や釣り人が最近よく口にする言葉である。特にブリは、私たちがとって食べ慣れない魚であったが、スーパーに並んだり、学校給食のメニューになったりと、大変身近になってきた。

青物特有の強烈なファイトにロマンを求める釣り人が急増、函館のゲームフィッシング・ターゲットの地位を確立しつつある。



魅力あふれる歴史と風土

自然と温泉の郷 登別

登別市・登別中

横山 康彦

【はじめに】

登別市は北海道の南西部、胆振地域に位置している。札幌からは車で一時間四〇分、新千歳空港からは一時間の距離である。登別市街地から登別温泉街までは車で約一〇分。さらに、一五分ほど進んだところに、登別の奥座敷とも言われるカルルス温泉がある。

【登別の歴史と風土】

明治二年、太政官布告により仙台藩白石城主の片倉邦憲に幌別郡支配を命じ、翌年に片倉旧臣・職人が移住してきたのが登別市のはじまりである。北海道有数の温泉地である登別温泉は江戸時代から知られており、最上徳内著の『蝦夷草紙』にも記されている。

また、市東部の登別温泉・カルルス温泉がある地域は、支笏洞爺国立公園となっており、「観光都市」として全国的にも有名である。さらに、太平洋と緑豊かな台地からなる自然の恵みに囲まれ、酪農・畜産を中心とした農業、三つの漁港からなる水産業が盛んで、豊かな自然から豊富な食材が得られる街

である。

【観光都市 登別】

登別市は、その豊かな自然と多種多様な温泉が織りなす「観光都市」として、国内外から多くの人々を魅了し続けている。登別の代名詞ともいえるのが、「地獄谷」に代表されるダイナミックな景観である。噴気孔からは常に硫黄の匂いが立ち込め、まるで地球の息吹を感じているかのような迫力ある体験ができる。秋には紅葉、冬には雪景色と、四季折々に表情を変える地獄谷は、何度訪れても新しい感動を与えてくれる。

また、登別は日本有数の温泉地としても知られている。硫黄泉、食塩泉など、九種類もの泉質をもつ温泉が湧き出ており、自身の体調や好みに合わせて「湯めぐり」を楽しむことができる。宿泊施設では、源泉かけ流しの露天風呂など、趣向を凝らした施設が充実しており、日頃の疲れを癒し、心身ともにリフレッシュシユできる。あらゆる要素が凝縮された観光都市・登別は、訪問客の心に深く刻まれる思い出を提供し、何度でも訪れたくなるような魅力にあふれている。



【伝承芸能 熊舞】

本校では、登別を代表する伝統芸能の一つ

である「熊舞」を教育課程に位置付け、取り組んでいる。二人一組の熊役が篠笛や太鼓、鐘の音に合わせて立ち上がったたり、巧みに転がったりする姿は見る人を圧倒する。昭和五十六年に登別温泉街で働く

若者たちによって創作されたこの「熊舞」は、翌年から旧登別温泉中学校の生徒たちが舞うようになり、その後、学校統合を経て登別中学校が引き継ぎ、現在に至る。

「熊舞」は、山中でさまよっていた狩人が、偶然出会った大きな二頭の熊を巧みに手なづけ、転がしたり立ち上がらせたりする迫力満点の舞である。熊に導かれて地獄谷にたどり着いたという言い伝えに基づいており、登別の自然と深く結び付いたこの芸能は、地獄まつりをはじめ、地域の様々なイベントで本校の生徒たちによって披露され、地域の人々や登別温泉を訪れる観光客に楽しみを提供している。

【おわりに】

私は、教職生活三四年のうち二四年間を登別市内の学校で勤めており、大変縁の深さを感じる街である。この度の執筆を承ったことで、教師として育ててくれた街「登別」の魅力を改めて深く知ることができたことに深く感謝を申し上げたい。



十勝開拓とともに発展した

八千代地区

帯広市・八千代中

坂田 明彦

帯広市は十勝地方の中心都市であり、農業や畜産業が盛んな地域です。開拓の歴史は明治時代に遡り、広大な土地を活かした農業が発展しました。特に、馬産業や農業技術の革新が帯広の発展を支えています。人口は約一六万人で、道内では中規模の都市です。



その中でも八千代地区は、帯広市の南部に位置し、十勝地方の開拓とともに発展してきました。八千代地区の人口は、帯広市全体のうち、ごく一部を占める地域で、市街地から離れた農村地帯であるため、人口密度は低く、広々とした環境が特徴です。

【八千代A遺跡・C遺跡】

この地域には、八千代A遺跡・C遺跡があり、約九、〇〇〇年前の縄文時代の定住生活の痕跡が確認されています。道東最古級の縄文集落として、昭和六十(六十三)年に帯広市教育委員会によって発掘調査が行われ、堅穴住居跡や炉跡や、土器や石器などの貴重な考古資料が発掘されており、道東地域における最古級の集落跡として重要視されています。国指定重要文化財で、



平成三十年に出土品が国の重要文化財に指定されました。出土品は、土器・土製品三九点、石器・石製品五四一点など計五八〇点が発掘され、動物形土製品や石製装飾品なども含まれています。

【観光】

帯広市は、十勝平野の豊かな自然、食文化(豚丼やスイーツ)、そして世界唯一のばんえい競馬が挙げられます。ばんえい競馬(世界唯一の競馬形式)、紫竹ガーデン(四季折々の花が楽しめる)、幸福駅(縁起の良い名前)で人気の観光地)、北海、道立帯広美術館(地域の芸術文化を展示)、ビート資料館(砂糖の原料となるビートの歴史を学べる)が観光地として有名です。

【八千代公共育成牧場】

八千代地区の特色は、何ととっても農業と畜産業です。広大な十勝平野の恵みを受け、小麦・豆類・ジャガイモなどの作物が栽培され、乳牛の飼育も盛んです。また、地域の自然環境を活かした観光資源もあり、特に八千代公共育成牧場では、広大な牧場でのびのびと育つ牛や馬の姿を見ることが出来ます。八千代公共育成牧場は、帯広市八千代町に位置する広大な牧場で、十勝幌尻岳のふもとに広がる自然豊かな環境が特徴です。八千代地区には、自然と文化を楽しむための観光スポットが点在しています。そのひとつである八千代公共育成牧場では、広大な敷地をもつ牧場で牛や馬の飼育が行われていいます。のどかな風景の中で、北海道らしい牧場の雰囲気を感じていただけます。

この牧場は、酪農経営の



合理化を目的として昭和五十年から国営草地開発事業により整備され、昭和五十七年に完成しました。総面積は約九八〇ha(東京ドーム約二一〇個分)にも及び、乳牛や馬の育成が行われています。乳牛・馬の育成について、夏季には約一、六三〇頭の乳牛が放牧され、冬季には九四五頭が舎飼されています。畜産研修センター「カウベルハウス」といわれる宿泊施設やレストランがあり、十勝の大自然を満喫できます。畜産物加工研修センターでは、ソーセージやチーズ作りの体験が可能で、小中学生や観光客が体験することも多くあります。ポロシリ高原パークゴルフ場は、三六ホール、レジャーも楽しめます。八千代牧場では、ソーセージ作りや羊毛加工などの体験プログラムが用意されており、十勝の食文化や畜産業を学ぶことができます。また、広大な牧場の風景を楽しみながら、北海道ならではの自然を満喫できます。

【周辺の観光】

近隣では六花亭アートのヴィレッジ中札内美術村(河西郡中札内村)、帯広市近郊にある美術村で、北海道の自然をテーマにした美術作品が展示されています。アートと自然が融合した空間で、散策を楽しめます。また、相原求一朗美術館(河西郡中札内村)、北海道の名峰を描いた作品が展示されている美術館、帯広市内最古の銭湯を移築した建物も見どころの一つです。

八千代地区は、帯広市の中でも自然と農業が調和した地域であり、歴史的な遺跡や広大な牧場が魅力です。北海道らしい風景を楽しみながら、地域の文化や産業に触れてみてはいかがでしょうか。



タンチョウとともに生きる

釧路市阿寒町

釧路市・阿寒中

森下 智之

【はじめに】

「クワツ、クワツ」
「コーロン、コーロン」
「カルルーン、クルルーン」……

タンチョウの高い透き通る声が校長室に響き渡る。校舎裏のグラウンドでは、ツルの夫婦が仲良く餌をついばみ、優雅で荘厳なダンスを披露してくる。気温が氷点下を下回り始める晩秋の時期から木々の芽がほころびはじめる春先にかけて見られる阿寒中の光景である。



【釧路市阿寒町】

釧路市中心部の北西に位置する釧路市阿寒町は、北部に阿寒湖を有し、雄大な山岳と原生林に囲まれた南北に細長い自然豊かで美しい町である。現在は酪農、農業、観光業が主な基幹産業であるが、明治中期から昭和四十五年の雄別炭鉱閉山までは、石炭産業が盛んな地域であった。平成十七年、いわゆる『平成の大合併』により、阿寒町は釧路市と合併し現在に至る。

【町全体で取り組んでいるタンチョウ鶴の保護活動〜初めてタンチョウ人工給餌に成功〜】

大正十三年に絶滅したと思われていたタンチョウが釧路湿原で十数羽の生息が確認されて以降、タンチョウ鶴の保護活動が始まり、現在（令和七年）では約一、九〇〇羽のタンチョウの生息が確認されている。

タンチョウ鶴保護活動の端緒は、昭和二十五年に故山崎定次郎氏によって日本で初めて行われた給餌活動である。この山崎氏のタンチョウ鶴に対する熱い想いに阿寒町民の心が大きく動かされた。今は釧路市タンチョウ鶴愛護会を中心に、町ぐるみでタンチョウ鶴の保護活動に努めている。

【鶴翔青雲】

「鶴翔青雲」とは、昭和四十年に制定された阿寒中学校の校訓である。大空を天高く、力強く飛んでいく一群の鶴のように、大きな夢と希望と志をもち、未来へと羽ばたいていく生徒を育てることを目指している。

今年で開校七十八年目を迎える阿寒中学校では、タンチョウを何とか生徒の教育に生かせないものかと考え、昭和三十二年に『ツルクラブ』が発足。現在は、『鶴ボランティア』と名称が変わったが、今まで七〇年近く、給餌活動や生息調査



中学生による給餌場（にお）設置の様子

等が行われている。

中学校のこうした保護活動は、全国的に評価されており、全国や全道表彰を受けている。

阿寒中学校はまさに、校訓「鶴翔青雲」の精神を受け止め、阿寒中学校の教育の大きな礎となっている。

【タンチョウが結びつけてくれた絆】

「ツル」が縁で結ばれた釧路市の友好都市である鹿児島県出水市（ナベヅルやマナヅルなど数種類のツルの飛来地）の中学生と阿寒中学校は、二〇年前から現在まで、ツル交流事業が行われている。今年も出水市の中学生が阿寒中学校を訪れ、互いにツルの保護活動などに関する情報交換を行った。また、阿寒町で永く愛されている『丹頂鶴音頭』を地域の方々と一緒に踊り、交流を深めた。

タンチョウが結びつけてくれた絆は未来永劫、引き継がれていくことだろう。

タンチョウは我が町の誇りである。



【第4回吉川英治賞受賞の様子（昭和45年）】



【阿寒町の地域住民と阿寒中の生徒が出水市の中学生と一緒に丹頂鶴音頭を踊る様子】

サロームの休日



佐呂間町・佐呂間中

太田 依里

【森と湖の町 佐呂間】

佐呂間町の自慢といえば、なんとといっても日本で三番目に大きな湖「サロマ湖」。神秘的なブルーの湖水は「サロマンブルー」と呼ばれ、湖に沈む「四角い夕日」はハートに染みわたります。

湖の恵みであるホタテ、カキ、北海シマエビをはじめ、毎年の生産量が全国上位を占める若佐のカボチャとそれを使ったスイーツ銘菓。サロマ牛肉、サロマポーク、佐呂間に生きる人が皆、町の自慢を口にできる笑顔あふれるまちです。

のどかに過ぎ行く贅沢な時間と、素の自分を蘇らせてくれる和やかな風が流れるサロマでは、自分の存在を大きく表現できます。そ

んなサロマにあなただの心をつなげてみてください。

休日のドライブで、ぜひ、佐呂間町まで足を延ばしてみてください。



【佐呂間町の教育】

小中学校においては、今年度より「併設型小中一貫校」を導入し、九年間連続した教育課程を編成することにより、中一ギャップの解消や学力向上など教育力の向上を目指しています。

「佐呂間町小中一貫教育推進委員会」を設置し、基本方針に掲げられた「思いを伝えあい豊かに未来を創る子」「認め合い 励ましあえる子」「健康な体を持ち やり遂げられる子」という三つの目指す子供像の実現に向かい、義務教育九年間を見通した各教科・特別活動のカリキュラムによる教育活動を展開している。

中でも総合的な学習の時間における「さろま学」の開発では、サロマのヒト・モノ・コト（体験）をサロマ人とともに学び、社会や地域づくりに貢献できる子供の育成を目指しています。

【アラスカ州・パーマ市との姉妹都市交流】

一九八〇年四月十日、石黒睦弘さん（当時佐呂間高校教諭）と、アメリカ合衆国・アラスカ州・パーマ市



スカ州・パーマ市に在るのエドワード・ホームズさんがアマチュア無線で親交を深めたことが縁で、同年十月二十八日、姉妹都市提携の調印をしま

した。



一九八〇年から佐呂間高校、佐呂間小学校、佐呂間中学校が相次いで姉妹校提携を結び、現在、中・高校生各四人の短期留学、手紙や作品の交換などで相互に交流を深めることが、生徒たちにとって他ではできない貴重な経験となっています。

また、今年七月には姉妹都市提携四五周年を記念して、佐呂間町に二〇数人の訪問団が訪れました。

【佐呂間湖一〇〇km ウルトラマラソン】

オホーツクの大自然と朝夕光景を異にする雄大なサロマ湖をフィールドに毎年六月最終週に開催され、今年で四〇回を数えました。例年、全国各地から約四、〇〇〇人のランナーがエントリーする注目を浴びる大会です。

一〇〇kmの部は、湧別町と常呂町が隔年でスタート地点とゴール地点を担当し、午前五時にスタートします。

本校生徒と教職員も給水所のボランティアとして参加し、町の一大イベントで一役買っています。



戦後八〇年によせて

千歳市・東千歳中

山下慎一

私は祖父を知りません。知っているのは、伯父の家に飾られたスーツ姿の青年（二十九歳）の写真だけです。祖父は民間の生命保険会社に勤めていました。満州に支店が新設されるということで、転勤を命じられ、一家四人で移り住んだそうです。しかし、戦局の悪化に伴い、祖父も召集され、戦地へと向かいました。ただのサラリーマンがいきなり武器を持たされ、家族を残して戦場へ向かうなど、そのときどんな気持ちだったのか、私には想像できません。終戦時、祖父は生き残りしましたが、そのままシベリアへ抑留され結局帰ってくることはありませんでした。私の父がシベリア抑留者のことをよく調べていましたが、きつと祖父がどんな生活をして、そして亡くなったのか知りたかったのだと思います。

祖父の出征後、残された祖母も壮絶な体験をしました。敗戦が決まると幼い兄弟【伯父と父】を連れて満州から命からがら日本へ引き揚げてきました。途中で何度か賊に襲われ、「持ち物を渡せ」とまだ幼かった父の顔に拳銃をあてて脅されたこともあったそうです。祖母は私が五歳のとき、天寿を全うしました。しかし、気丈な祖母が子供たちを連れて日本に帰ってこなければ、今の私は存在しませんでした。

戦後八〇年。日本は奇跡的な復興を遂げ、平和と繁栄を享受してきました。しかし、その一方で、戦争の悲惨な記憶が薄れていくことを懸念しています。戦争の悲惨さ、平和の尊さは、教科書や様々なメディアを通じて伝えられてきました。しかし、戦後から時間が経過するにつれて戦争が単なる過去の出来事として、あるいは遠い昔の歴史の一部として認識されるのではないかと恐れています。過去から何を学び、未来へとどうつないでいくのか。祖父が極寒のシベリアで生きようとしていたこと、そして、祖母が命懸けで我が子を守り生きたことに思いを馳せ、私は平和の尊さを子供たちに伝えていこうと思います。

現代に必要な 転ばぬ先の杖

留寿都村・留寿都中

林 稔 晃

「転ばぬ先の杖」という言葉がありますが、近年はその「杖」が多すぎること、子供たちの主体性が失われているように感じます。

大人は経験がある分、子供の失敗を未然に防ごうと「それはダメ」や「次はしないでね、約束だよ」と一方的に注意しがちです。しかしそれでは、子供がなぜ転んだのかを自ら考える機会を奪ってしまいます。

最近よく見られる「不器用な子供・大人」は、得意なことには集中できても、それ以外には無関心で、人との関わりもうまくいかない傾向があります。その背景には、大人が本質を伝えず、禁止や指示ばかりしてきた関わりがあるのかもしれない。本来の「杖」とは、転ばせないための過干渉ではなく、転んだときに支え、学びへと導く存在であるべきです。

では、本当に子供に必要な「杖」とは何でしょうか。

「子供の成長支援」〔引用…こども基本法（令和四年二月制定）〕
 ・子供の健全な成長と発達のため、家庭・学校・地域の連携を促進すること

・子供が能力を最大限に発揮できるよう、教育・育成の機会を平等に提供すること

こども基本法は、全ての子供が健やかに成長し、幸福に生きるための環境を整備することを目的に制定されました。頭ごなしに叱るのではなく、気持ちに寄り添い、共に考える。そうした関わりこそが、大人に求められる本当の役割です。

その関わりが、子供にとっての真の「杖」となり、自信をもって生き抜く力につながっていくのではないのでしょうか。

現代に必要な「杖」とは、まさにこの関係性と、考える日々です。

心豊かで主体的に

生きる力をはぐくむ学校経営

小樽市・松ヶ枝中

柳原功美

本校では、「根気 勇気 元気」を教育目標に掲げ、子供たちが多様な他者と関わり、「何のために学ぶのか」と深く思考し、よりよく生きる力を育む学校経営を進めております。その基盤には、小樽の豊かな自然、歴史、そして地域の人々との深いつながりがあります。小樽は、北海道開拓の玄関口として栄えた港町であり、海と山に囲まれた自然豊かな魅了的なまちです。美しい景観や四季の移ろいは、子供たちの感性や創造力を育む掛け替えのない教材となっています。

また、小樽の歴史ある街並みや石造りの歴史的建造物は、今なお多く残されており、その中でも小樽運河は、市民のふるさとへの誇りを象徴する存在です。かつて埋め立てや道路化の計画が進められた小樽運河は、市民の熱い思いと粘り強い運動によって保存されました。この市民の行動は、「まちを愛し、自ら行動する力」の大切さを、今もなお子供たちに教え続けています。

本校では、こうした地域の歴史と人々に学び、ふるさとに愛着を持ち、社会の一員として考え行動する力を育む学習の場を大切にしています。総合的な学習の時間を軸とし、家庭・地域・大学との連携を深めながら実施する体験活動や交流活動を通して、「人を創る教育」を「ふるさとでの未来を創る力」へつなぐ学びの実現を図っております。

子供たちが人の願いや思いを感じとり、他者とながら、共に支え合う優しさを心に宿してほしい。私たちは、子供たちの可能性を信じ、安心して挑戦できる学校を創り、小樽の未来に貢献する学校教育の使命を果たしてまいります。子供たちが、「明日を創る勇氣」をもち、「幸せ」を感じながら、主体的に自らと社会の未来を切り拓いていけるよう、地域からお預かりした大切な学校の発展に全力を尽くしてまいります。

生成AIをうまく使う

富良野市・麓郷小中

島村圭吾

近年、急速に広がっている生成AIは、私たちの暮らしや仕事に大きな変化をもたらしています。令和七年一月に北海道教育庁より発出された「道立学校における生成AI活用ガイドブック」では、校務利用での作成例も示されており、今後学校でも活用が一層進むことでしょう。学習や研究、デザインやものづくりなど、あらゆる分野で活用が進むとともに、調べたことを効率的にまとめたり、新しい発想を得るためのきっかけをつくつたりと、学校だけでなく日常生活でも役立つ場面が増えていきます。

一方で、課題も生み出しています。生成AIが誤った情報を正しいかのように提示するリスク、著作権や個人情報扱いに関する問題、さらには「自分で考える力」が弱まるのではないかと懸念も指摘されています。便利さに過度に依存すれば、判断力や表現力を育む機会が失われるかもしれません。また、偽情報やフェイク画像が拡散されることで、社会全体の信頼が揺らぐ危険性もはらんでいます。

本校の生徒会では、毎日などを作成し、教室前の掲示板に貼っています。難しいものもあるのでAIに聞いてみると、「もう少し詳しく説明していただけますか。」と、回答されたこともありました。どうやら、一般的に知られているなどなぞでも、こちらが求めているような回答が得られないこともあるようです。AIはたくさん情報を整理して提案することはできますが、文脈やニュアンスを完全に理解するわけではないことを示しています。最終的にその情報を選択し、責任をもつのは自分自身です。

今後、生成AIは更に生活に溶け込み、学びや働き方を大きく変えていくでしょう。学校では各教科等での探究的な学びのプロセスに活用されることが期待されます。重要なのは、AIを都合よく活用し、自分で考え、選び、表現することがよりよい未来を築く鍵となるでしょう。この文章の作成のように、AIを道具として使いこなすことが求められているのです。

AI時代に挑む学校と先生

旭川市・啓北中

東藤 義文

サザンオールスターズ待望の新作は初期のシンプルさに回帰しつつ、キヤリアを重ねた音と歌詞の深みや新境地も織り交ぜた気負いない一枚で、デビューからのファンである私の心を掴んだ。断片的な音や言葉のイメージを丹念に広げ、共有し、膨大な時間を費やしてバンドのサウンドに昇華する。その熱い想い、いにしえの手触りは五〇年間変わらない。

手触りは自分がこだわってきたことでもある。時間のかかる手作りの味わいは効率的でないが、コロナ下で生徒や学校の元気な姿を発信しようと校舎を回って写真を撮り、毎日学校HPを更新した。講話にあたっては、学級の様子や生徒の顔を思い浮かべ、願いを書き止め、何枚ものメモの断片的な言葉を紡いだ。AIは使っていない（いや、使えない…）。書家の端くれとして手書きに拘り、折に触れて筆を執って掲示物、手紙や色紙を書いたり…。書くことは悩みの種だが、言葉を通して思いや考えを整理し、心を伝え、自分が大切にしたいことを明確にしてきた。

と、ここまで書き進めて本稿の軌道修正を余儀なくされた。校長会の研修でAIの力を思い知らされたからだ。デジタルに疎い時代遅れの自分だが、なるほど、これは…その能力に舌を巻いた。圧倒的な作業の速さと正確さ。情報の整理分析と多彩な処理。提案すらしてくる。これは働き方改革、いや世の形を激変させるすごい道具だ。しかも、まだまだ進化中。それに合わせた好奇心や柔軟さ、学び続ける意欲が求められる。人は何をやる？ 進化のスピードについていける？ 先生って必要なの？

だからこそ、実物⇄子供と触れ合う、感性を磨く、自他の心と対話することも大事にしたい。言葉や数字で表しきれない余白を想像し、経験も踏まえて判断したい。道具としてのAIを従えて。この先どんな世界、どんな学校が広がっているのだろう。かつての伸びやかな学校が懐かしいが…自分は役割に一区切り。もう、終わりかあ…いや、それでいいのかな。お世話になった皆様に、心からのTHANK YOU SO MUCH。

北の海と子供たち

稚内市・宗谷中

込山 茂

朝もやの港に、ホタテ漁から戻った船が静かに並ぶ。荷を下ろす人々の顔には、充実した表情が浮かんでいる。宗谷沿岸地区は、豊かな海の恵みに支えられた地域だ。ホタテ漁が好調な今、暮らしは安定し、若い世代が地元に戻って家業を継ぐ姿も増えてきた。生徒の中には、卒業後「自分も父のように海に出たい」と語る者が少なくない。そのままざしには、この土地で生きる誇りが宿っている。

地域が豊かであることは、子供たちの心の安定にもつながる。家庭が明るく、地域に笑顔があれば、学校にも穏やかな空気が流れる。生徒たちは、地域の人々に見守られながら伸び伸びと成長している。行事の度に地域の方が来校し、生徒たちの努力を見守ってくれる。小さな学校だからこそ、一人一人の表情や変化がよく見える。ここには、学校と地域が一体となって子供を育てている実感がある。

しかし、子供たちの成長を見守る立場として、今の豊かさの裏に潜む課題も感じている。海の恵みは決して永遠ではない。資源の減少、気候変動、国際的な価格変動など、どれも地域の暮らしを揺るがす可能性をもつ。だからこそ、子供たちには「現状に満足するだけでなく、変化に対応する力」を身に付けてほしい。

漁業を継ぐとしても、ただ海に出るだけではなく、経営を考え、環境を守り、地域の未来を見据える力が求められる。宗谷の子供たちには、海に生きる強さとともに、学び続ける知恵と柔軟さを育てたい。学校での学びが、やがて地域の力となり、次の世代を支える礎になることを願っている。

冬の荒波のように厳しい時代が来るかもしれない。だが、そのときこそ宗谷の風土に根ざした強さが試される。海とともに生きてきたこの地区が、これからも希望の光を放ち続けるように、直接そばにいられなくても、教育の力で子供たちを支えたいと思う。

あの頃は

初山別村・初山別中

滝本 秀明

初任者の頃、男子バレーボール部の顧問を務めることになりました。バレーボールの経験といえ、中高の体育の授業程度でした。さらに私は中高六年間アルバイトに励んでいたため、部活動の経験ありませんでした。それでも諸般の事情により、顧問として部活動を指導することになりました。

ある年の卒業式後、バレーボール部員の保護者であるお母様からいただいたひと言が、今も心に残っています。素敵な笑顔でこうおっしゃいました。「先生、三年間ありがとうございました。でも、先生のおかげで、今まで夏に家族でキャンプをしていたのが、この三年間は一度もできませんでした。」思い出す度に申し訳ない気持ちや切ない感情が湧いてきます。

その生徒は左利きで、入学時から身長が高く、運動能力も学力も優れていました。レギュラーとして三年連続で全道大会に出場し、管内選抜に選ばれるなど活躍でした。全道大会が終わると、管内バレーボール協会主催の夏合宿に参加し、ほぼ毎月のように大会や練習試合があり、私も生徒も部活動中心の生活を送っていました。お母様にとっては、コートで生き生きと活躍するわが子の姿はうれしく、応援にも熱が入ったことでしょう。しかし、同時に家族で過ごす時間や思い出づくりを大切にしたいという気持ちもあつたはず。バレーボール中心の生活は、その思いと相反する部分もあり、複雑な心境を抱えながら、朝早くからお弁当をつくり、送り出してくださっていたのだと思います。

部活動に対する生徒の意欲や目標、保護者の思いや願い、そして顧問としての方針や考え方は、必ずしも一致しないこともある、と思います。中学校での部活動での思い出と、家族としての三年間の思い出が、どうすれば重なり合うことができたのか。あの頃の自分を振り返ると、今もなお「なんだかなあ」となっています。

学校のチャイムを聞きながら

せたな町・大成中

山本 雅樹

電車の到着時刻や発車時刻が正確であるなど、日本人は「時間を守る国民」として世界的に知られている。その背景には、社会全体に浸透している時間意識とそれを支える様々な仕組みが関係しているようだ。

まず、日本のほとんどの学校では授業の始まりや終わりを知らせるチャイムが日常的に鳴る。始業前、授業の開始・終了、昼休み、給食、清掃、放課後など、一日に複数回鳴る。生徒はその音を合図に行動を切り替える。チャイムが鳴ったら席に着き、授業が始まる。鳴り終わったら移動する。こうしたルールの中で生徒は育ち、自然と「時間どおりに行動する」ことを学んでいくのだろう。

次に、本校地域のように朝、正午、夕方にメロディーが鳴ることがある。夕方には「ふるさと」の音楽が流れ、「日が暮れるから家に帰りなさい」という地域の合図となっている。これは生徒だけでなく全世代にも「時間の感覚」を知らせる効果となっている。調べてみると、農村部などでは、正午のサイレンが「お昼休憩の時間」を示す役割を果たしてきた部分もあるようだ。

こうしたチャイムやサイレンの存在は、日本人の時間に対する感覚を身に付ける上で重要な役割を果たしてきた。音により時間を区切ること、自分の行動を時間に合わせて調整するようになる。それが日常の中で当たり前となっていく。もちろん、チャイムやサイレンがない国も多い。そうした国々では、自分自身で時計を見て行動することが求められる。しかし、日本では「音に合わせて動く」ことが長年の習慣として根付き、日本人は自然と時間を守る行動が身に付いてきたのだろう。

生徒にもチャイムやメロディーなどは単なる合図ではなく、社会全体の時間意識を支える文化であることを伝え、今後の生活にうまく生かしてもらおうよう伝えていきたい。単なる「音」としないために。

学校体育と私

知内町・知内中

森 涉

教職員となつてはじめて赴任した学校には、グラウンドに隣接したスキー場がありました。冬になると、全校生徒はもちろん、全教職員が一斉にスキー授業に取り組みます。生徒の大半は、幼い頃からスキーに親しんできたものですから、何人かは「先生」役です。教職に就くまで、まともにスキーをしてこなかった私は当然、「生徒」の立場です。全校生徒三〇人程度の小規模校であつたこともあり、その学習スタイルは自然な形で行われていましたし、学ぶ楽しさにあふれていました。地域のスキー指導員もボランティアで参加されることもあり、今、振り返ると、生徒、教職員、地域の方も含めて、「ともに学ぶ」ことが体現されていたと思います。

さて、右記のとおり、冬季間、毎日のごとく、保健体育に部活動にとスキーブーツを履く機会が続くと、「上手になりたい」という意欲が自然と沸き上がってくるものです。せっかくスキー場がある学校に赴任したのだからと、基礎スキーに取り組み、二級、一級、準指導員に挑み、獲得にいたりしました。初任者段階として赴任した学校勤務最終年には、ついにスキー授業においても「先生」になれました。もちろん、「先生」になつたことや資格はうれしいのですが、大人になつてから、そこまで努力したという経験が、良い財産になっています。学校体育や部活動できっかけをつかみ、一番成長したのは、教師である私であつたと感じています。

学校体育を切り口として、何かに挑み、獲得する喜びを、生徒とともに、これからの教育を担う教職員の皆様にも感じてほしいと願っています。

言葉の力

函館市・赤川中

木谷 隆史

自分が卒業した中学校には生徒会誌があつた。生徒会長の挨拶、各委員会の活動の様子、部活動の結果や部長のコメントなど、読んでいて楽しく、いろいろな想像ができた。さらに、各学級で一ページ、学級の様子を書くことができて、卒業学年になると二ページ割り当てられ、一人一行を書くことができた。自分が一年生のとき、生徒会長でありながら、当時流行のボンタンや短ランを着ていた先輩の一行に心を奪われた。『るるるるるるるるるるるる、もうその声も聞こえない』。卒業を前にして、中学校との別れを惜しみ、それを河童と蛙の詩を用いて表現する生徒会長のセンスに憧れ、さらに、言葉には力があることを知つた。それ以来、誰がどんな文章を書いているのか、先輩がどんな言葉で何を表現するのか、大きな興味をもって生徒会誌を読んだ。そして自分が三年生になつたらどんなことを書こうか、自分の発信する言葉を友達や先輩たちはどのように思うのかを想像しながら中学校生活を送つた。

時は流れ令和の時代、生徒会誌を廃止する学校が出てきたが、中学生は、自分の言葉を発信するツール、スマートフォンやタブレットを手にしている。面白くないことがあると、ネットに不満をぶちまけ、ライブと言われる動画配信を行い、リアルタイムで自分たちの言葉を中継する。自分の発信する言葉や文章が相手にどのように伝わり、どのように受け止めるのか、などという想像力は令和の時代には消滅していると感じることが何度もあつた。『相手のことを考えてみようか』『これを見た人はどんなことを思うのだろうか』と幾度となく、生徒に問いかけ、自分の発信する言葉は時には凶器にもなると伝えてきた。表現する場が増えることは良いことなのかもしれない。しかし、読み手、相手のことを考える、想像するということの子供たちに伝えなければならない。

最後に、自分の一番信頼している友人が、『光陰ミサイルの如し』と中学校の生徒会誌に書いたことを思い出し、友人のもつ感性の素晴らしさと先見の明を感じて、自分の発信する言葉を磨こうと思う。

全ての生徒が「成瀬」のように いられる学校に

砂川市・砂川中

堤 雅宏

今年度の全国学力・学習状況調査中学校国語の問題で、文書作成ソフトを使ってチラシを作成するシチュエーションが出題されました。その第一問は「かいしん」を変換した際の正しい漢字を選びなさい、というものであり、問題を解いていた私は一瞬、解答に躊躇してしまいました。

デジタル化が進展する現代において、ここ数年、私はアナログで出入力する習慣が少なくなると語彙力が鈍るタイプの人間なのだということを痛感する機会が増え、意識的に読書をする時間を生み出しています。ジャンルや作者も無作為に様々な書籍を手にする中で、私は一人の魅力的な中学生と出会いました。彼女の名は「成瀬あかり」といいます。

昨年度の本屋大賞を受賞した、宮島未奈さんの著書『成瀬は天下を取りに行く』はベストセラーとなり、多くの人々に読まれていますので御存じの方も多と思います。滋賀県大津市生まれ、同市在住のきらめき中学二年生の成瀬あかりが、中学・高校・大学と学生時代を自分らしき全開で生きる姿が描かれた作品です。スマートフォンも所持しておらず、町のゴミ拾いと不審者抑止を目的とする見回り活動を日課とし、無二の理解者である友人とコンビを組みM11グランプリ予選に出場する彼女は明らかに「今どきの子」とは一線を画しており、周囲から「変わった子」と思われています。作中では冷たい視線をうけたり、心ない言葉を投げかけられたりもします。しかし彼女は、そうした周囲の評価に自分を曲げたり、ふてくされたりすることなく、まっすぐにブレることなく自分の興味や好奇心の赴くままに我が道を突き進みます。そしてその姿は次第に周囲の見方や考え方にプラスの影響を与えていきます。すがすがしさを覚えた読後、子供たちが様々なことに気を遣い、がんじがらめで窮屈な思いをすることなく、ありのままの自分で過ごせる安心・安全な学校を創らねばと、決意新たに学校経営に向き合っています。

いのちの授業と第二の誕生日

苫小牧市・ウトナイ中

山岸 弘昇

私は平成二十二年（三九歳）に急性骨髄性白血病を患い、病気休暇、休職を合わせて三年一〇ヶ月の間現場を離れていた。抗がん剤治療や骨髄移植を受けるも再発したことから、北海道での治療の限界を感じ、セカンドオピニオンを経て、当時は治療レベルだったハプロ移植（ヒトHLA半合致移植）を研究している道外の大病院に転院し、二度目の造血幹細胞移植に臨み、命をつないでいただいた。治療中は薬の副作用、度重なる再発や移植後の五年生存率の低さ、打つ手がなく限定される治療方法、復帰が間に合わなければ分限免職になる可能性があったことなど、目や耳にする情報がことごとくネガティブであった。そうした絶望的な状況の中でもメンタルが崩壊することなく闘病できたのは、家族はもとより、職場の上司や同僚、友人、生徒や保護者の見舞いや激励、医療従事者の献身的な支援があったからである。感謝してもし尽くせない。

なお、休職したときの年齢が厄年と重なっていたのは奇妙な偶然である。

これらの経験から、復職後は毎年「いのちの授業」として、自分の経験を生徒に伝える取組をしている。がんは二人に一人が罹るといわれており、三人に一人はがんで亡くなる現実があることから、話す内容や受講の可否など、一定の配慮をしながら講話を実施している。生徒たちにはがん、献血、骨髄バンクの話題にとどまらず、人・夢・命の大切さを次の言葉で伝えている。（学校経営の土台として教職員にも伝えている）

- ・ 生きていくから出会える人がいる。
- ・ 生きていくから（我が子の）成長した姿を見ることが出来る。
- ・ 生きていくから見られる夢があり、挑戦できる。

平成二十四年二月十五日は二度目の移植日で、私は「第二の誕生日」と呼んでいる。この日が来る度に生きていくことへの感謝を忘れないことを心に誓っている。

地域の皆様に支えられて 閉校・統合を迎えるにあたって

浦河町・浦河第二中

森 真 治

令和七年度をもって町内の中学校三校が統合され、本校・浦河第二中学校は閉校することとなった。昭和二十二年の開校以来、地域の子供たちを育み、多くの卒業生を送り出してきた。小さな町の小さな学校ではあったが、ここには確かな学びと温かな人間関係が息づいていた。

校舎の窓から見える日高山脈、冬の厳しさの中でも元気に登校する生徒たち、地域の方々が手づくりで準備してくださった行事の数々：それらは全て、浦河第二中学校の記憶として私たちの心に深く刻まれている。学校は単なる学びの場ではなく、地域の文化や人のつながりを育む場でもあった。

これまでの教育活動は、地域の皆様の支えなしには成り立たなかったと言える。保護者の皆様、地域の方々、そして歴代の教職員の方々に對して、敬意と感謝の気持ちでいっぱいである。特に近年は少人数教育の利点を生かし、生徒一人一人に寄り添った指導を展開できたことは、私たちの誇りである。

閉校後、生徒たちは近隣の中学校へと通うことになる。環境の変化に不安を覚えることもあるだろう。しかし、浦河第二中学校で培った「自分らしく生きる力」は、どこへ行っても彼らの支えとなるはずである。

私たちは、最後の一年を「感謝と未来への希望」を胸に、生徒たちとともに歩んでいきたい。

閉校という節目を、地域と学校が一体となって前向きに迎えられるよう、記念誌の作成や記念行事の準備を進めている。大変な作業ではあるが、この閉校を「記憶の継承」として捉え、未来へとつなげていきたいと考えている。浦河第二中学校の精神は、これからも地域の中に息づき続けるであろう。この最後の一年を、生徒たちとともに、地域とともに歩みながら、この学校の記憶を未来へとつなげていきたい。

ボツカルーポく狼の口に飛び込め！

音更町・緑南中

緑 川 昌 浩

この四月、一〇年ぶりに中学校勤務となった。教頭昇任以来、四つの小学校を経験し、この先もずっと小学校だと決めつけていたから驚いた。

それにしても一〇年である。正直お役に立てるか不安になった。しかしやるしかない。そこで開き直すことにした。一〇年前の経験がそのまま通用するわけもない。知ったかぶりをしないことこそ肝要である。そう思うことにしたのである。

今のところ、航海を共にする仲間助けられ、難破船にはなっていないと思う。多少の針路のずれは大目に見ていただく。

そんな感謝の日々であるのだが、実は、小学校の経験が貴重だったと思うことも少なくない。調子に乗って、中学校に戻ったからこそ為せる仕事もあると考えることさえある。

よくよく振り返ってみると、一〇年前にも同じことがあった。新採用から二〇年間中学校畑だった自分が、教頭となり小学校へ。しかも四年生の担任だった。そう、あのときもできるできないではなく、やるしかなかった。そして、中学校での経験が大いに生きたことを思い出す。

実際、飛び込んでみれば何とかなるものらしい。それは経験が証明している。しかし、いくつになっても不安が高まりつい二の足を踏む自分がある。これは、大人でも子供でも変わりはないのかもしれない。

つまるところ、不安にならないことなどできないし、その不安を抱えつつ一歩踏み出すのは自分以外にない。だから、自分の背中を自分で押す言葉をもつことが大切ではないか、と思うようになった。

何かないかと考えていたら、「ボツカルーポ」という言葉が浮かんだ。イタリア語で「健闘を祈る」という意味の慣用表現だが、直訳は「狼の口の中へ（飛び込め）」だ。四月の私は開き直すという手を使った。次こそは、校長としての気概をお見せしたいと思っている。

武道の精神 学校経営に

帯広市・帯広第四中

小林 徹哉

私は小学校二年生から剣道を学んできた。途中途絶えた期間があったり、また人に誇れる戦績を残したりしているわけではないが、教員として採用されてからは、中学校教諭として部活動指導に携わり、通算二三年間の剣道部指導経験がある。その後、教育行政や管理職を通じて、なかなか防具を着ける機会が少なかったものの、本年四月、剣道部が設置されている中学校の校長採用により、五年ぶりに中学生と剣を交えるうれしい機会をもった。

全日本剣道連盟では、剣道の理念を、「剣の理法の修練による人間形成の道である」とし、剣道を正しく真剣に学ぶことで、人間として自らを磨き上げることが目的としている。つまり、その先にあるのは、「人としてどうあるべきか」を問うものであり、この考えは、校長としての学校経営にも大きく通じるものである。

学級経営、教科経営、部活動経営等を通じて、日頃から絶えず考えなければならぬ大事な視点は「子供たちをどう育てるか」ではないかと思う。七月に本校のある部活動顧問が中体連夏季大会後に、部活動指導の悩みを吐露した際、私は、「大会結果が全てではない。そこに人として、チームとしてどうあるべきかを指導しなければ、教育活動としての意味はない」と指導助言した。

部活動の地域展開が推進されている中、中学校外のクラブ等の団体も参加しているが、中学生段階においては「勝負だけによらない、礼節を重んじた指導」を大切にしていかなければ、これまで部活動で築き上げてきた大事な伝統が失われるのではないかと思っている。

日本古来から連綿と受け継がれてきた武道の精神を学校経営に生かし、「人間形成の道」を大切にする学校経営を基盤に、今後も一人一人の子供たちが生き生きと自らの夢を実現できる学校づくりに尽力したい。

「学校」って何だろう？

弟子屈町・弟子屈中

小林 一博

学園ドラマ「熱中時代」の北野広大先生に憧れ、小学校教員を目指した。教授の結果は、A採用を頂いたが、その後の教員生活は、管理職に就くまで中学校社会科教員として過ごした。まず、社会科教員として務める中で抱いた疑問が、「社会科って何だろう？」。社会科は、戦後生まれの教科でありながら、教科へのイメージは「暗記教科」。何とか、その問いの答えを得たく、三〇代後半に大学院で学ぶチャンスを得て、自分なりの解を得て実践することができた。

その後、管理職となり新たに直面した問いが、表題の「学校って何だろう？」。学校経営に取り組む内に、少しずつ解が構築されてきた気がする。得た解の一つが、「将来、社会に出たときに必要な知識や経験、コミュニケーション力など、社会に適應できる能力を身に付ける装置」である。

だが、その解の意味も時代や社会の変容とともに変化する。例えば「社会に適應できる能力」も、四〇年前と現在とでは、明らかに異なる。かつては、「与えられた知識を早く覚え、正確に再生できる能力」が、求められたであろう。現在は、予測不可能な社会を生き抜くため、新たな生き方や価値を創造できる姿勢と能力が求められてきた。

では、その装置である学校は、変化に順応できているのか、と問われれば、「否」である。多くの学校は、教室も四〇年以上前と変わらぬ形であり、管理職や教員の意識も、その呪縛から、抜けきらず授業改善も道半ばである。

「社会に開かれた学校」が求められて久しいが、実際には、危機管理上の問題、保護者や地域からの理解と協力など、合意形成を図る必要もあり、そう簡単ではない。

弟子屈町は、将来のまちづくりに向けた意欲が高く、移住者の受入と挑戦を積極的に支援する町である。本校もその恵まれた環境を最大限に生かした学校経営に取り組んでいる。開放的な校内にある空き教室を、地域との共有スペース「TEICHU SPACE」として解放、地域と中学生とを結び付ける様々な新企画が進行中である。

さらに、「地域おこし協力隊」が立ち上げた社団法人の一拠点を校内に置き、「会社のある学校」を発信している。社会の変化に合わせ柔軟に挑戦できるチャンスを保障するところ、それを「学校」と呼びたい。

アインシュタインからの学び

釧路市・春採中

河原 和 範

令和七年七月二日の新聞のテレビ欄に「3か月でマスターするアインシュタイン」というタイトルを発見した。その番組は、相対性理論の世界をCGと物理学者の解説を織り交ぜながらタレントと対話形式で楽しく解き明かす、物理番組であった。毎週、知的好奇心を刺激されながら視聴した。内容を全て理解できたわけではないが、時空の歪みや重力という不思議な力に触れる度、宇宙の奥深さに改めて感動を覚えた。

この番組の終盤に、私の脳裏に蘇ってきた映画があった。クリストファー・ノーラン監督の『インターステラー』である。地球の滅亡を前に、人類の新天地を求めて宇宙へ旅立つ家族の愛と冒険を描いたこの作品は、アインシュタインの一般相対性理論を壮大なスケールで映像化した作品だ。映画では、重力の強い惑星で過ごしたわずかな時間が、宇宙船で待つ仲間には数十年もの歳月となる「ウラシマ効果」、時空の近道である「ワームホール」、光でさえ一度中に入ると出ることができない「ブラックホール」など、アインシュタインの理論が物語の根幹を成している。番組で得た知識は、この映画で描かれる事象に、より深い理解と説得力を与えてくれるに違いない。

この二つの作品が示唆するテーマは、科学の面白さ、未知の世界へ挑む探究心、困難に屈しない人間の強さであり、多感な時期を生きる中学生たちの心に響くテーマではないだろうか。なぜ学ぶのか、なぜ挑戦するのか。その問いに対し、壮大な宇宙と人間ドラマを通して、答えを示してくれるかと思う、この秋、『インターステラー』の四回目の鑑賞をしようかと心に決めた。

実りの秋、そして思索の秋の夜長に、この知的な冒険の旅へ出てみよう。番組で理論の基礎に触れ、映画でその壮大さを体感し、未来を担う生徒たちに何を伝えるべきかを、改めて考える機会としたい。

今日は昨日の明日

別海町・別海中央中

小崎 伸 人

先日、元同僚の後輩と大学院時代の後輩と三人で杯を酌み交わした。元同僚は十勝へと転出し、後輩は後志からスタートし、十勝へと異動となった。その結果として二人が同僚となりつながった。(ちなみに、その学校には道外にある私の大学時代の友人がいたのも面白い偶然である。)杯を酌み交わしながら思い出話から仕事の話など話題に尽きることなくとても楽しい時間を過ごすことができた。

若い頃には気付くこともなかったこのような「縁」を感じることが多くなった。こう書く時点で加速度的に加齢が進んでいることを知る。旅の終わりが見え始め、教職生活、あるいは人生そのものを振り返る時期に来ているらしい。前述の縁がつながったことも目には見えない時空間の積み重ねが、時を経て可視化されたのだろう。

こうして振り返ると常に縁が自分を取り囲んでいる。前任校も現在校も二回目の赴任となり、一般教員だったときの教え子たちが今は保護者、あるいは同僚として学校や私自身を支えてくれている。時間がいくらか経とうとも途切れなかったつながりの数々は、私にとっては何にも代えがたい見えざる宝珠である。

昨年度の『全道中』にも高校の同級生が執筆していた。道中の研究大会においても参加者・発表者として名前を見ることができ、それぞれの活躍に刺激を受ける。いつの時代も新しい出会いがあり、過去の出会いと糾いながら幸せを形成してきた。だから今はまだ旅の終わりなんかではなく旅の途中で、今の縁はこれから先、更につながっていくことを予感させる。過去が今を作り、今が未来を創る。だからこそ今この一瞬を楽しみながら生きたいと思っている。

出会いと体験

滝上町・滝上中

中 港 善 博

教育という仕事は、子供たちとの出会いそのものであると同時に、私たち自身の生き方や価値観が絶えず問われる仕事でもある。校長という立場になり、改めてその重みを実感する日々。そんな日常のなかで、私の心に深く刻まれた出会いと体験があった。

きっかけは、健康維持のために始めた朝の散歩であった。夜明け前の澄んだ空気のなか、美しい稜線から昇る太陽に感動し、鳥のさえずりに耳を澄ます。そんな穏やかな時間のなかで、いつしか言葉を交わすようになった一人の御婦人がいた。御主人を戦争で亡くされ、広島で被爆した親族をもつというその方の、深く美しいしわが刻まれたお顔を拝見する度、その計り知れない人生の重みに、私は襟を正す思いがした。

その御婦人との出会いに導かれるように、私はその夏、初めて広島を訪れた。平和記念資料館で目にしたのは、約八〇年前に一瞬にして日常を、そして未来を奪われた人々の無念の証であった。特に、建物疎開作業中に命を落とした六、〇〇〇人も中学生たちの事実、そして「せんせい、みずをください」と訴える教え子の手を握りしめることしかできないかった教師の痛切な手記は、同じ教育に携わる者として、私の胸を強く打った。涙が止まらなかった。

広島空の下で、私は自問せずにはいらなかった。なぜ、世界から戦争はなくならないのか。そして、私たち教育者に一体何ができるのか、と。

答えはまだ見つからない。しかし、あの御婦人が静かに語ってくれたこと、広島が私に教えてくれたことを、まずは目の前の子供たちに伝え続けることから始めたい。全ての子供たちが、生まれ育った場所に関わらず、夢や希望を語り、笑顔で生きていける未来を築くこと。その一助となることこそ、私たち教育者に課せられた、ささやかで、しかし最も尊い使命であると信じている。

ブドウ作りの楽しさ

札幌市・北栄中

北 伸 章

今年も甘いブドウが成った。

私の家の庭には、ブドウの樹がある。他界した義父から二〇年ほど前に譲り受けた巨峰の樹である。当時の私はブドウの育て方など分からず、毎年知らぬ間に実ったブドウを見ながら放置していた。隙間だらけに並んだ実は大きさも様々で、色も薄い。食べてもおいしくない。スパーに並ぶ巨峰のイメージとは程遠いものであった。

時代とともに、最近は様々な情報を簡単に手に入れることができるようになった。ある年の春、家庭菜園の延長でブドウの育て方について調べてみたところ、たくさんの動画が配信され、分かりやすく丁寧に解説されていることが分かった。見様見まねで始めたブドウ作りに私は知らぬ間に没入してしまった。

ブドウ作りは、花穂の形を整えるところから始まる。この作業で、すでに秋に収穫する房の大きさや実の込み具合が決まってしまう。そして花が満開になった頃、重要な処理を行っていく。種をなくし、実を大きくするのが目的だ。所定の割合で作った溶剤を、タイミングを見ながら二回与える。その後、出来上がりの状態を予想し、実の数を調整しながら落としたり、並べ替えたりしていく。最後は害虫や雨除けのための袋がけをし、あとは袋の中でブドウ自体が色づき、大きな房になっていくのをひたすら待つだけである。

これら一連の作業は大変そうに思えるが、私はその楽しさにすっかりはまってしまった。その魅力は適切な時期に適切に手をかけていけば間違はなく良いものができるというところにある。このことは、教育現場で子供たちを育てることや学校づくりをする醍醐味とどこか似ている。手をかけすぎてもいけないし、放っておくのもよくない。育てたようにしかならない。成長したときの姿を想像しながら、愛情を注いでいく。今年も甘いブドウが成った。その瞬間がうれしくて、来年もまた頑張ろうと思う。

令和7年度 一般会計予算

収入の部

(単位：円)

科 目	令和6年度 (補正予算)		令和7年度 予算額	予算額比較		備 考
	予算額	決算額		増	減	
1. 会費収入	34,473,600	34,473,600	34,117,200		356,400	単置校5,400円×500校×12か月=32,400,000 併置校2,700円×53校×12か月= 1,717,200
2. 繰越金	3,955,754	3,955,754	2,807,028		1,148,726	令和6年度繰越金
3. 雑収入・特別会計	1,710,050	1,714,878	1,710,000		50	銀行利息、全日中通信費助成10,000 全日中地区研究補助(研究大会基金より入金)1,700,000
計	40,139,404	40,144,232	38,634,228		1,505,176	

支出の部

科 目	令和6年度 (補正予算)		令和7年度 予算額	予算額比較		備 考
	予算額	決算額		増	減	
研究大会費	9,552,000	9,276,816	9,194,000		358,000	
1. 大会運営費	3,000,000	3,000,000	3,000,000			研究大会実行委員会による大会運営費(担当地区決算)
2. 研究活動費	4,002,000	4,002,000	3,994,000		8,000	各地区の研究活動補助費(2,000円×461校)+札幌3,080,000
3. 旅 費	2,550,000	2,274,816	2,200,000		350,000	役員・提言者・司会者等旅費
研究調査費	1,790,000	1,679,381	1,705,000		85,000	
1. 旅 費	1,330,000	1,232,400	1,250,000		80,000	ブロック研修費、地区教育経営研究会、地区交流等旅費
2. 印刷製本費	310,000	302,302	320,000	10,000		学校経営の資料
3. 通信運搬費	50,000	44,679	50,000			上記送料
4. 賃 金	100,000	100,000	85,000		15,000	調査アンケート作成等筆耕料
研究物刊行費	2,220,000	2,275,056	2,050,000		170,000	
1. 印刷製本費	1,900,000	2,075,186	1,800,000		100,000	道中だより、全道中、法制研集録、実態/調査報告書、研究紀要
2. 通信運搬費	320,000	199,870	250,000		70,000	上記送料
事務局費	26,577,404	24,105,951	25,685,228		892,176	
1. 借 損 料	3,700,000	3,619,247	3,600,000		100,000	事務所賃貸料、会議会場費、機器リース料、車借上げ料等
2. 給料・手当	5,445,000	5,444,580	5,460,000	15,000		専任職員給与、手当
3. 退職・社保	1,190,000	1,173,278	1,190,000			社会保険料、雇用保険料、退職積立金
4. 備 品 費	0	0	0			事務所備品
5. 印刷製本費	870,000	881,286	630,000		240,000	総会要項、運営要綱、感謝状、要望書、提言書、役員名刺等
6. 通信運搬費	720,000	721,319	680,000		40,000	電話代、郵券、託送料、振込料金
7. 消耗品費	420,000	507,281	400,000		20,000	用紙代、封筒、購読料、プリントナーインク、その他事務用品
8. 慶 弔 費	100,000	152,712	100,000			退職・退会役員記念品、祝電、香典、供花
9. 賃 金	200,000	200,000	142,000		58,000	筆耕料、印刷賃金
10. 渉 外 費	730,000	611,248	680,000		50,000	関係機関総会・研究大会参加費、外郭団体会議、広告料、食糧費
11. 負 担 金	4,100,000	4,057,150	4,080,000		20,000	全日中会費、交通安全推進委、社明運動、道P連、ユニセフ他
12. 旅 費	7,400,000	6,537,070	7,400,000			総会、理事研修会、事務局研修会、全日中総会・研究協議会
13. 送 金 費	80,000	80,000	80,000			会費等地区からの送金手数料補助費(各地区4,000円)
14. 雑 費	22,404	25,740	30,000	7,596		両替手数料他
15. 予 備 費	1,600,000	95,040	1,213,228		386,772	
計	40,139,404	37,337,204	38,634,228		1,505,176	

令和7年度 北海道中学校長会役員・理事

会 長	山田 誠一 室蘭西中 (室蘭市) 0143-25-1000	副 会 長	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック	
			代永 研 菁園中 (小樽市)	亀田 寛人 留萌中 (留萌市)	宮腰屋 由 江差中 (江差町)	山田 誠一 室蘭西中 (室蘭市)	伊藤 道彦 豊頃中 (豊頃町)	吉本 将樹 稲穂中 (札幌市)	
事務局 長	高橋 正幸 羊丘中 (札幌市) 011-851-9352 直011-000-0000	事務局 次長	田丸 明史 発寒中 (札幌市) 011-661-0412		事務局 次長	前田 真志 中央中 (江別市) 011-385-5581		会計 理事	伊藤 仁弥 朝里中 (小樽市) 0134-54-6321
運 営 委 員 長	伊藤 達也 八軒中 (札幌市)	運 営 委 員	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック	
			駒場 秀剛 西陵中 (小樽市)	大熊 修一 六合中 (旭川市)	白川 卓 港中 (函館市)	松野 岳彦 明成中 (岩見沢市)	嶋 健 西陵中 (帯広市)	伊藤 達也 八軒中 (札幌市)	
部	副会長 (事務局)	部 長	部 員			副部長	幹 事		
経 営	宮腰屋 由 江差中 (江差町)	安榮 智裕 恵明中 (恵庭市)	吉崎 健一 稚内東中 (稚内市)	関田 貴人 上ノ国中 (上ノ国町)	中田実千代 三石中 (新ひだか町)	北村 剛 花川南中 (石狩市)	野澤 孝志 恵み野中 (恵庭市)	岡田 一之 大曲中 (北広島市)	
	高橋 正幸 羊丘中 (札幌市)		名和 勝紀 鶴居中 (鶴居村)	/					
研 修	伊藤 道彦 豊頃中 (豊頃町)	桑原 俊二 中島中 (札幌市)	吉岡 智尋 北陵中 (小樽市)	袈田佳奈恵 当麻中 (当麻町)	山口 哲也 亀田中 (函館市)	川原 明子 稲積中 (札幌市)	中井 幸一 篠路中 (札幌市)	福井 浩史 福移学園 (札幌市)	
	田丸 明史 発寒中 (札幌市)		今野 典之 南町中 (帯広市)	葛迫 勝秋 中春別中 (別海町)	/				
対 策	代永 研 菁園中 (小樽市)	増田 正弘 八雲中 (八雲町)	林 尚起 赤井川中 (赤井川村)	千葉 雅樹 緑が丘中 (旭川市)	野村 勝紀 夕張中 (夕張市)	小泉 寧 新十津川中 (新十津川町)	松田 淳二 三笠中 (三笠市)	青山 天生 永山南中 (旭川市)	
	伊藤 仁弥 朝里中 (小樽市)		佐々木典郎 音更中 (音更町)	土江田亮一 景雲中 (釧路市)	/				
情 報	亀田 寛人 留萌中 (留萌市)	嶋本 敏幸 増毛中 (増毛町)	能登 敬久 開成中 (苫小牧市)	橋本 正之 南中 (北見市)	/		鏡 武志 和光中 (苫小牧市)	宮田 真基 鶴川中 (むかわ町)	山岸 弘昇 ウトナイ中 (苫小牧市)
	前田 真志 中央中 (江別市)		/						
事 務 所	北海道中学校長会事務所 〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目 敷島プラザビル TEL : 011-251-1344 FAX : 011-251-1302 E-mail : dotyu-kotyokai@bz04.plala.or.jp						事務主事	加藤 秀典	
							会計主事	笹川 恒春	

表紙に寄せて

「地球岬から望む噴火湾」

室蘭市・港北中

高田裕之

四市七町で構成される胆振は、ものづくり産業の集積に加え、温暖な気候を生かした農業、噴火湾の特性を生かした水産業、そして日本有数の温泉地を含む観光と、各産業がバランスよく発展している豊かな地域です。

表紙を飾るのは、壮大な景観を誇り室蘭市を代表する景勝地「地球岬」です。快晴の日には遠く恵山岬や下北半島まで見渡すことができ、道内外から多くの観光客で賑わっています。その雄大な自然の大パノラマは、訪れる人々に深い感動を与えています。

室蘭市は二〇二二年（令和四年）に、開港一五〇年、市制施行一〇〇年という節目を迎えました。明治時代の鉄道敷設から始まるものづくりの歴史、産炭地から運び込まれる石炭の積み出しで発展した天然の良港は、長らく日本の産業を支えてきました。工業都市として発展を遂げる一方、豊かな自然も大切にし、共生してきた歴史をもち合わせています。幾多の時代の波を越え、今、室蘭市は環境に優しい、人が輝く未来を目指して、新たな歩みを進めています。

このような地で第六六回北海道中学校長会研究大会が開催できましたことは、胆振管内校長会、室蘭市校長会としてこの上ない喜びです。今大会の成果を共有し、明日を担う子供たちのために尽力する決意を新たにすることができました。大会運営を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

編集後記

令和七年度版会誌「全道中」第九五号が、皆様の多大なる御協力により出来上がりました。ここにお届けいたします。

北海道教育委員会教育長 中島俊明様、北海道立教育研究所長 谷垣朗様の「潮流」への御寄稿をはじめ、「特集」では、三人の会員の皆様から先進的な実践について御寄稿いただき、テーマに迫ることができました。

また、北海道中学校長会役員・理事、各地区役員をはじめ、多くの会員の皆様に御協力をいただき、各地区の活動や風土紹介、論考、文芸など多彩な内容を掲載することができました。会員の皆様の職能向上や、広い北海道教育の情報源の一助となれば幸いです。

最後になりますが、「令和の日本型学校教育の実現」に向けて日々実践を推進する中、本誌の発行に快く御協力いただきました全ての皆様にご心より感謝申し上げます。

全道中 第95号

発行 令和八年三月一日

発行者 北海道中学校長会

会長 山田 誠一

札幌市中央区北一条西三丁目

札幌プラザビル内

電話（〇一一）二五二―一三三四

FAX（〇一一）二五二―一三〇二

編集 北海道中学校長会情報部

印刷所 佐藤印刷株式会社

札幌市北区北七条西八丁目一

電話（〇一一）七二六―三三四五

北海道中学校長会歌

清水 弘 作詞
上元 芳男 作曲

Moderato (♩=96)

北海道中学校長会歌

作詞 清水 弘
作曲 上元 芳男

働哭の いくさを越えて
新しき 時代を拓く
大いなる 理念に燃えて
吾ら 起ちたり(くり返し)

幾星霜 人は変れど
教育の 使命一筋
朔北に 理想かかけて
吾ら 集えり

未来への 希望豊けく
頼母しき 若き世代の
幸多き み代のあけほの
吾ら 果たさん(くり返し)
道中 道中
栄あれ 道中